

「学び舎の乃木希典」展覧書

はじめに

学習院大学史料館では年に二回の特別展を「日本の伝統文化」と「学習院の歴史」を主題として開催している。平成三〇年度は春季特別展に「宮中和歌の世界」を、秋季特別展には「学び舎の乃木希典」を開催した。平成三〇年は明治時代が始まってから一五〇年を数え、また学習院が現在の目白校地に移転してから一一〇年となる年であった。これを記念する展覧会として、当時の学習院長・乃木希典（嘉永二年（一八四九）〜大正元年（一九一三））に焦点を当てたのである。

乃木希典は明治初年より新政府の軍属となり、数々の戦争に従軍して陸軍大将にまでのぼった、明治期を代表する軍人である。明治天皇崩御から乃木の死に至る一連の出来事は、夏目漱石が『こころ』に描いたように明治時代の終わりを象徴するものとも捉えられ、乃木の名はその自決の事実と共に今も広く知られている。しかし晩年の乃木希典が学習院の院長であり、寄宿舎で学生たちと共に生活していたことを知る人はそう多くないだろう。そこで「学び舎の乃木希典」展（以下、「本展」）では、軍人・乃木希典ではなく、教育者としての学習院長・乃木希典の側面を紹介することに主眼を置き、学習院の各所に所蔵される乃木関連資料を中心に展示を構成した。

学習院内の乃木関連資料の所蔵先は、学習院大学史料館、学習院アーカイブズ、学習院大学図書館、各科（初等科など）の四系統に分かれる。

以下、各系統を概観してみよう。

吉廣さやか
戸矢 浩子
西山 直志

まず学習院大学史料館は、学習院が華族子女の教育を目的として開校したことに鑑み、皇族・華族家に関する資料をコレクションの核とする博物館である。この中には、院長在職中の乃木の直筆書簡や、当時学生として在籍していた華族の旧蔵品に含まれた乃木関連資料があり、今回はその一部を出陳した。

学習院アーカイブズは、学習院の公式文書を扱う組織であり、乃木院長に関する記述を含む公式文書を所蔵している。また、前身が院史資料室であることから、乃木が院内で使用していた日用品や、院長在任時の下賜品なども引き継いでいる。これらは、乃木の遺言により大正二年（一九一三）に学習院に寄贈された品の一部である。

学習院大学図書館には、この時学習院に寄贈された遺品のうち、主に図書類が所蔵され、「乃木文庫」として伝えられている。

そして、学習院内の各科にも乃木関係資料が伝来する。これらの詳細はまだ不明なところも多いが、今後、各校における調査により目録作成が進むことで、全容の判明が期待できるだろう。初等科においては近年資料整理が進められており、それにより発見された游泳記録などを今回展示することができた。

本展では、これら学習院内の所蔵品のほか、乃木神社や山口県立大学、また個人の方々の所蔵する品を展示し、あわせて関連エピソードや写真を紹介した。展示は次の三章構成とした。

第一章 教育者となった乃木希典

第二章 武課教育と修身教育の充実

第三章 自刃と顕彰

本稿は、「学び舎の乃木希典」展の彙報として、展示ではスペースの関係で紹介できなかったものも含め、展覧会の開催にあたっておこなった調査研究の成果を記録するものである。第一章では、展覧会の内容に沿う形で、学習院長・乃木希典を軸に、晩年の乃木と明治四〇年代の学習院の歴史を資料でたどる。第二章は、展示の内容（すなわち第一章）を補う形で、乃木院長をめぐるエピソードと書簡史料を中心に紹介し、今後の研究に供したい。あわせて〈表1〉として、本展で公開した「乃木希典院長と学習院年表」を掲載する。適宜参照されたい。

なお今回展示された資料のうち、学習院内に所蔵される下賜品や軍服など主だった遺品および遺書に関しては、吉廣さやかが前号の紀要に「学習院所蔵の乃木希典遺書とその周辺」(以下、「遺書とその周辺」と題した論考を寄せてその詳細を紹介している³⁾。これは本展の開催を目して学習院内に保管される乃木関連資料を事前調査したうちの一部を報告としてまとめたものである。また展示資料中、図書館所蔵の書籍『中興鑑言』に関しては本誌所取の中嶋諒論文「乃木希典と小柳司氣太―学習院大学図書館蔵『中興鑑言』に附された原稿用紙をめぐる⁴⁾」に詳しい。なお当館の刊行物「ミュージアム・レター」三八号には、本展の概要と解説および主な出品資料の画像を掲載している⁴⁾。これらも併せてご一読いただければ幸いである。

本稿中、資料翻刻にあたっては、旧字を常用の表記に適宜改め、必要に応じて読点を補った箇所がある。

第一章 乃木希典の院長生活

(一) 明治天皇の御沙汰と裕仁親王入学

いさがある 人を教への親にして

おほしたてなむ やまとなでしこ

この歌は明治天皇より乃木に授けられた御製である。勲功ある人を「教への親」、つまり学習院長に任じて、日本の未来を担う子供たちを育てようという天皇の意志、さらには乃木への期待をも読み取ることができる⁵⁾。

明治三九年(一九〇六)八月二五日、乃木は宮内省御用掛を拝命した。これは明治天皇の意向によるものであり、同日には、「学習院学生ノ教育ハ朕ノ夙ニ診念スル所ナリ。今回特ニ卿ニ命シ、同院教育ノ事ニ参与セシム。卿能ク此意ヲ体シ実績ヲ挙ゲルコトヲ勉メヨ」との御沙汰があった⁶⁾。学習院は華族子女のために創立された学校であり、明治一七年からは宮内省管轄下におかれていたため、乃木は学習院の教育に参与するに際し、まずは宮内省御用掛として学習院の教育に参画したのである⁷⁾。

宮内省御用掛となった乃木は、明治天皇の御沙汰に応える形で動きだす。学習院の教育方針の要を「品性の統治」とし、初等学科・中等学科・高等学科各科での教育を、相互に関連したものとすること、つまり一貫教育を推進し、高等教育を充実させるための意見書を提出した。これにより、翌年四月に廃止される予定であった高等科は存続することとなった。

そして明治四〇年(一九〇七)一月三一日、乃木は第一〇代学習院長に就任。軍事参議官・陸軍大将との兼任であった。先の御製はこの際に授けられたもので、『明治天皇紀』には「天皇の希典を以て院長たらしめ、肅然校風を刷新せんとしたまふ勅旨」があったと記されている。

乃木が学習院長となったのは、明治一〇年の学習院開業以来、在学する皇族の人数が特に多かった時期で、何より、明治天皇の孫である迪宮裕仁

親王（後の昭和天皇）の修学を控えたタイミングであった。裕仁親王が学習院の初等学科において修学することが「御治定」（確定）となったのは、明治四一年（一九〇八）二月二十七日のことである。⁸ 天皇の命を受けた東宮職と乃木との間で種々の検討がなされ、当時皇太子であった父・嘉仁親王（後の大正天皇）の例を参考とした結果である。初等教育は貴賤男女の別なく必須の学科を学習するものであり、皇族も初等学科において学ぶべきとの判断からであった。⁹

また乃木は初等学科主任（後の科長職に相当）の石井国次に命じて、皇族の教育方針について次のような覚書を作成した。¹⁰

皇族教育の覚書

- 一、御健康を第一と心得べきこと。
- 二、御宜しからぬ御行状と拝し奉る時は、之を御矯正申上ぐるに御慮あるまじきこと。
- 三、御成績につきましては御斟酌然るべからざること。
- 四、御幼少より御勤勉の御習慣をつけ奉るべきこと。
- 五、成るべく御質素に御育て申上ぐべきこと。
- 六、将来陸海の軍務につかせらるべきにつき、其の御指導に注意すること。

その後も天皇の御沙汰に従い、東宮職と学習院の間で基本方針や具体的対応が相談され、天皇への奉答がなされている。裕仁親王は、一年西組に所属することが決定した。主管（担任）の石井国次は、国語・算術・訓話の授業を担当。級友には、華頂宮博忠王と久邇宮邦久王、三人の御学友（松平直国・久松定孝・渡辺昭）を含む一二名が配されることとなった。¹¹ そして、明治四一年四月一日。裕仁親王が学習院初等学科へ初登院する日がやってくる。

○庶務課日誌（列品番号・一）

学習院アーカイブズに所蔵される「庶務課日誌」は、学習院の庶務課で日々とられた記録をまとめた簿冊で、学習院にとつての重要事項が多く記載される資料である。「昭和天皇実録」にも「学習院院史資料室所蔵資料」の名で、典拠の一つとして使用されている。明治四一年の簿冊中、初等学科の始業式がおこなわれた四月一日の項には、裕仁親王が四谷の学習院に初登院した際の様子が次のように記録されている。

四月十一日 土 晴

一 新学年始業式ヲ挙行ス

皇孫迪宮殿下本学年ヨリ御降学此ノ日午前八時五十分頃附属校舎ニ成ラセラレ院長御先導ニテ御休憩所ニ入ラセラル而シテ場ニハ職員学生整列ヲ終リタル後院長御先導ニテ臨マセラレ初等学科ノ列前ニ並ハセラレタル博義王武彦王博忠王三殿下ノ右ニ立タセラル於是始業式始マリ式終リテ院長新任助教授鈴木克己川本為次郎講師堀竹雄白井亀吉ノ新任告達式ヲ行ヒ次テ学生ニ対シテ新学年修学ノ心得並ニ迪宮殿下ニ対シ奉ル心得方ヲ訓辞セラル

然後迪宮殿下正堂ノ東室ニ入ラセラレ職員一同正堂内東室戸扉ノ前面ニ整列ス須臾ニシテ院長御先導ニテ東室ヲ出テセラレ通御ノ際職員ニ拝謁ヲ賜ヒ再御休憩所ニ入ラセラレ間モナク還御遊ハサル本学年ヨリ久邇宮邦久王殿下華頂宮博忠王殿下モ御入学アラセラル本院ノ光荣宏大責任更ニ深甚ヲ加フ

今後儀式ノ節殿下方ハ列ノ前面ニ並ハセラル、コトニ定メラル

右のように当日の次第が詳細に記録され、院長である乃木を中心に裕仁親王を出迎えた様子がよく分かる。また最後に「今後儀式ノ節殿下方ハ列ノ前面ニ並ハセラル、コトニ定メラル」と記されているように、学習院内における皇族対応の基準が徐々に定められていく様子もうかがえる。

初等学科の授業は翌週月曜日の四月一三日から開始された。裕仁親王は登院すると始めに呼吸体操をおこない、八時から授業を受けるといふ学校

生活が始まった。

学習院長は、初等学科・中等学科・高等学科・女学部（幼稚園含む）という学習院全体を統括する立場にあり、乃木は初等学科の学生とも交流の時間をとって、多くの訓示を与えた。その代表的なものは、後に「学習院初等学科訓示要項」としてまとめられることになる（後述）。当時それらの教えに接した裕仁親王は、昭和五〇年（一九七五）、天皇として海外メディアのインタビューを受けた際に、「感化を受けた人物」として乃木希典の名を挙げている。

（二）明治天皇の行幸

明治四一年（一九〇八）八月、学習院の中等学科は高等学科は北豊島郡高田村の新校地に移転した。図書館や院長官舎などの施設が落成して新校地の建築物すべてが完成するのは翌年一二月のことである。総面積八万一千九百三坪（二七万三九〇平方メートル）の広大な土地であった。⁽¹³⁾ 正門を入ると西側（目白駅側）に教室棟、東側に寄宿舎が並び、両者をつなぐように本館と図書館が配置されている。図書館の南側には運動場が広がり、そのさらに奥の構内周縁は池や原も残されていた。正門の外、目白通りを挟んだ北側には馬場と官舎が置かれた。

新校地に校舎群が完成すると、明治四二年七月九日、院長の乃木や、設計者の文部省技師・久留正道をはじめ、校舎新築に尽力した教職員や技師らに、天皇から慰労の品と恩賜金⁽¹⁴⁾が下賜された。さらに天皇は同月一四日に目白校地へ行幸し、新校地内を見て廻っている。この行事は学習院にとって一大イベントとなった。

○式事録（列品番号・15）

学習院アーカイブズ所蔵の「式事録」には、明治天皇の行幸に向けて学習院が整えた準備内容から当日のことまでが詳しく記録される。

「式事録」は、学習院でおこなわれた行事や式典の記録である。この行

幸に関しては、「式事録 明治四十二年」の「第七號 七月 校舎新築落成ニ付キ天皇陛下竝裕仁雍仁両親王殿下御臨幸啓ノ件」にまとめられている。内容は、「（一）御臨幸次第及招待状（二）奉迎順序（三）校舎新築顛末（四）展覧ニ供シタル書物物品及講演書（五）献上図書（六）式場設備（七）各皇族以下來賓（八）学期末学生人名表及官報掲載其ノ他」の八つに分類して記録されている。

「（一）御臨幸次第及招待状」に含まれる行幸当日の式次第は次の通りである（図は省略）。

明治四十二年七月十四日学習院へ 行幸御次第書

午前十時 御出門

第一 奉迎

院長本館玄関前ニ職員学生正門内ニ奉迎（第一図）

臨院ノ皇族方本館玄関前ニ参院ノ親任官以下玄関前右方及図書館前ニ奉迎

此時奏樂（第一図）
奉迎終ラハ勅任官以上ハ院長室前ニ
参集他ノ参院者ハ直ニ正堂ニ入ル

第二 院長御先導便殿ニ 入御

第三 院長拝謁 図面書類ヲ献ル

第四 勅任官以上拝謁参院奏任官及奏任取扱以上ノ職員ハ正堂参列ノ

位置ニ於テ拝謁

第五 諸員正堂ニ着席（第二図）

第六 院長御先導正堂ニ 臨御

選抜学生講義

一 口演 初等学科六年級学生 神田盾夫

一 漢文 中等学科三年級学生 戸田忠孝

一 英語 中等学科四年級学生 黒木清

同 同 平松時賢

同 同 松平信造

同 同 島津忠備

同 同 市原一郎

同 土井利安

一 国史 高等学科一部三年級学生

柳澤保承

第七 院長御先導便殿二 入御

第八 正午 御昼餐 此時奏楽

第九 午後一時院長御先導特別教室二 臨御

参院親任官随従 他ノ参院者ハ
練兵場ニ集合

学生ノ製作品及理科実験 御覧

一 理科実験 実験者

高等学科二部三年級学生

坪井眞男

同

田中春夫

同

菅田敏光

同

溝口正男

第十 院長御先導練兵場二 臨御

武課 御覧

指揮者⁽¹⁵⁾

一 歩兵操練

中等学科
高等学科学生

同

高等学科一部三年級学生

中村貫之

同

同

木場貞一郎

同

同

山内英夫

同

同

大村謙太郎

指揮者

一 馬術

高等学科学生

指揮者

高等学科一部三年級学生

伊達九郎

一 体操

中等学科学生

指揮者

高等学科一部三年級学生

野間莊三郎

一 呼吸体操

初等学科学生

学習院助教授

指揮者

内藤栄

一 剣道柔道

中等学科高等学科学生

学習院助教授

指揮者

内藤栄

一 剣道柔道

中等学科高等学科学生

学習院助教授

指揮者

内藤栄

一 剣道柔道

中等学科高等学科学生

学習院助教授

指揮者

内藤栄

(雨天ノ節ハ歩兵操練及馬術ハ之ヲ止メ体操及剣道ハ
雨覆体操場ニ於テ行ヒ柔道ハ特別教室ニ於テ行フ)

第十一 院長御先導寄宿舎 御通覽便殿二 入御

参院者及職員学生奉送ノ位置ニ就ク(第一図ノ如シ)

第十二 還幸 此時奏楽

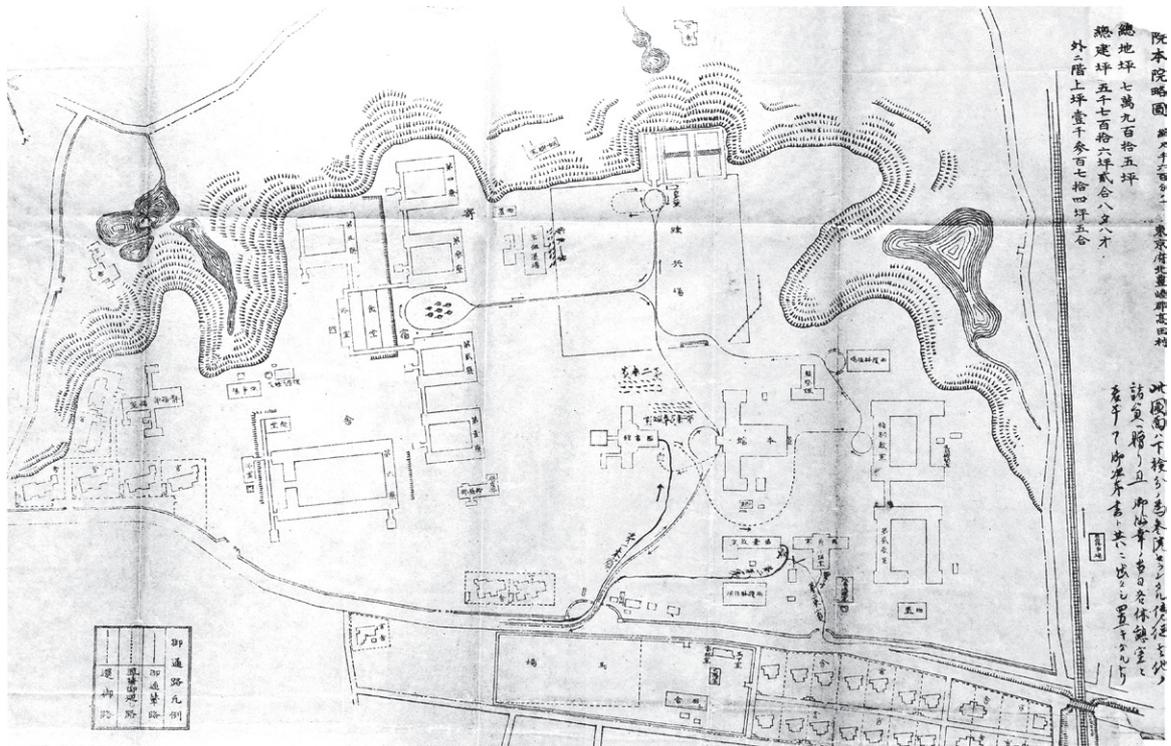
諸員奉送

右の内容は、「(二) 奉迎順序」の他の頁の記述と突合せることでさらにその詳細が立体的に見えてくる。例えば、当日の出迎えにあたっては、早朝に正門と本館車寄せに国旗を掲揚し、午前一〇時に天皇が宮城の門を出発し、二〇分後に学習院では学生と教職員が正門付近から本館・図書館前にかけて並ぶ。行幸の列の先頭の騎馬が目白台を通過した時点で門に電話連絡が入り、門からの喇叭の相図で、皇族方や来賓を本館玄関と図書館前の奉迎位置に案内し、半円形に整列させる…、このように、天皇行幸にあたっては一つ一つの動きを記したマニュアルが綿密に作成されている。さらに、「(六) の式場設備の付属図面には、学習院本館や特別教室をはじめ、現存しないものを含めた建物内部の見取り図や、当日の各部屋の用途なども書き込まれている。

行幸に際し、当日の参加者は学習院の教職員、学生はもとより、有栖川宮威仁親王をはじめ各皇族にも台臨奉請が出された。学習院からの招待状が送られた記載された来賓の総数は一三一六名。皇族・華族をはじめ勅任官・奏任官などの第一来賓は午前中からの招待、宮内省関係者・他諸官庁奏任官、特別・有爵者・旧職員・保証人・卒業生・職員などの第二来賓は午後からの参加とされた。

さらに、明治天皇が校地内を巡る順路が記された「学習院本院略図」【図1】や、臨幸記念の絵葉書(勅額・旧校舎・新校舎(本館・図書館)の三葉一組)も残されている。これらの詳細な記録は、一大記念行事となった行幸当日の様子を鮮やかに再現してくれる好資料といえるだろう。

またこの日、乃木は運動場の御座所の前に二鉢の櫛を供えて明治天皇の閲覽に供した。「当時、運動場の南側には唯一のテニスコートがあつて、此の東南の両側にコートを半ば囲む芝生の高い丘があつた。此の丘の北端に設けられた天幕内に玉座が運ばれたのである。玉座の左右には真神の大



【図1】「学習院本院略図」（『式事録 明治四十二年』 学習院アーカイブズ蔵）
 明治天皇の鳳輦の動線が書き込まれている。

鉢が、乃木院長の御心入りで飾られてあつた¹⁶。「式次第」の「第十」にあたる武課の参観の後、乃木は「此の榊は特に天覧を賜はりたし。本院内の然るべき場所に植えて永く御臨幸の記念と致したし¹⁷」と奏上した。そうして植樹されたのが今も残る「御榊壇」である。これは新校舎の構内に神域を設けようとした乃木が、学習院教授の国学者・井上頼圀の助言により、「岩を畳み、その上に神木を植¹⁸」えたものである。この神域となす場所として、乃木は構内の「富士見台」と呼ばれる地を選定、前方後円型の壇を神社同様に真南に向けて築き、円形部中央に榊を植えた。壇を築く石のうち八〇個は当時の日本領土の境界から乃木が取り寄せた石で、番号が付されて採集地が分かるようになっていた¹⁹。すべて乃木が私費を投じて準備し、建立したものである。落成式は明治四三年三月二三日春季皇霊祭の日、乃木自ら植樹して祝詞を奏上して執り行つた²⁰。この御榊壇もまた、明治天皇の行幸を後世に伝える記念碑なのである。

（三）乃木院長の寄宿舎生活

寄宿舎で楽しきことをかそふれば 撃剣音読朝めしのあじ

右は明治四五年（一九一二）一月二九日、友人桂彌一に宛てた書簡中の歌である²¹。広大な土地を有した目白校地には寄宿舎が整えられ、全寮制が敷かれていた²²。明治四一年九月に学生が入寮すると、乃木は総寮部の会議室を寝室とし、学生と共に院内での生活を開始した。明治四二年には院長官舎が竣工するが、乃木は総寮部に起居し続けたために、同舎には皇族が入寮することになった。総寮部は正門と寄宿舎の間に位置し、乃木の使用した二間からは、第一寮から第四寮、第六寮の入り口を見渡すことができ²³た。寝室には寝台と衝立、書棚があるきりで、携帯品は行李二つに入るのみ。住居用ではない建物で、夏の暑気、冬の寒気は厳しかったが、乃木は板敷きのままにスリッパ²⁴で過ごして暖をとることもなかったという。明治



【図2】蓋物（塩入れ）、歯ブラシ、石鹼入れ、薬罐（展示風景より）

四一年一二月、かつて学習院長を務めた田中光顕（第六代院長）と岩倉具定（第五代院長）が院内視察に訪れた時のエピソードが残っている。乃木の部屋である会議室での休憩中、「田中宮内大臣より院長の寝室は何処ぞと尋ねられたれば、院長は自ら次の小室を開き、是が寝室なりとて示さる。其の時岩倉爵位頭は田中宮相を顧みて曰く、「田中サン、お互は早く院長を勤めて善かつた。乃木サンの後ではたまらんで」と」⁽²⁵⁾。

学習院長と軍事参議官陸軍大将とを兼任していた乃木は、目白の学習院本院・四谷の初等学科・永田町の女学部に加え、陸軍や宮中を行き来する日々であった。当時の学生や教職員の談話が数多く記された『乃木院長記念録』からは、乃木がその多忙な生活の中で学生たちとの時間を大切にしていた様子がうかがえる。朝夕は学生と食事を共にし、日中は授業の視察、剣道の授業では自ら竹刀を振るって稽古をつけ、夜の自習時間には訓話や音読をする。本展ではそうした乃木の寄宿舎生活を、学習院アーカイブズに伝わる乃木の日用品を通して振り返った。本稿ではその一部を採り上げて、乃木の日常を紹介したい。

○蓋物（塩入れ）、石鹼入れ、薬罐【図2】（列品番号…8）

乃木は朝四時半頃に起き、冷水で洗面をし、歯磨きには塩を用いた。塩は小さな蓋物に入れていたが、もとは井のような器に入れていたという。石鹼入れの中には、小さくなった石鹼が今も残っている。戦地での経験から水を大事にした乃木が一日に使用する水は薬罐一杯分で、どんなに寒くとも湯を使うことはなかったという。また洗面器などで使用した水を捨てる時にも植木の根にかけてやるなどしていた。⁽²⁶⁾

○鎌【図3】（列品番号…6）

毎朝、洗面を終えると乃木は鎌を携えて院内の散策に出た。鎌は小鎌を五本、長柄の鎌を一本所有し、柄に「乃木」と刻していた。当時の目白校地には自然が残りに、敷地の中に森や崖や池があった。学習院教授・馬場轍の述懐によれば、乃木は崖に攀登木を備え、谷には丸木橋を架け、路傍の草木には植物学名の表示をつけ、蒿を切り取り、道にかかる枯れ枝を取り除き、筍や小松の芽生えなどには保護を与えていたという。⁽²⁷⁾ 嵐の後などには長柄の鎌で池面の落ち葉を浚った。敷地内の安全に気を配り、整備するだけでなく、普段の外出を制限されている学生たちの運動や散歩のために、散歩道を作る目的もあつたようだ。乃木は少年時代の学問修業中には農事にも励み、軍務についても休職中には那須野で農耕生活を送っていたため、庭仕事に精通していた。草木の成長に気を配り、瑞香花や梔子などの苗木を寄付することもあつた。

○食器一式（列品番号…13）

起床時間の早い乃木は朝食を楽しみとし、「学習院の朝の味噌汁は非常に旨い」⁽²⁸⁾と人に語っていた。その朝食とは味噌汁に煮豆や海苔などが一品つく程度で、夕食は焼魚や肉などの主菜が加えられた。

朝夕の食事の際、乃木は各寮（幼年部・中年部・青年部）の食堂を一日交替に訪れて、食卓を共にした。昼食は教職員と共にとるため、寮の食事を弁当箱に入れて運び、箸は箸袋に入れて上着のポケットに入れていたと

いう。

【図4】は寮の食堂で用いられていた碗と櫃で、これに大小の皿をあわせて一式となる。碗と皿には院章の桜を正面に配し、裏には「硬陶」の印が見られる。三つの碗は重ねて櫃内に収納できるようにになっており、櫃の蓋には「給養部」の焼き印がおされている。

乃木は食材の衛生を気遣い、食事前に個々の皿を確認することもあった。また成長期の学生たちの発育上、栄養価と分量を大事にし、好き嫌いは厳しく戒め、どんなものでも食べる習慣をつけさせようとした。祝祭日にはその行事に相応する食事や間食を出すようにも命じている。⁽²⁹⁾



【図3】鎌、石（展示風景より）



【図4】食器一式より、飯櫃・碗

○碁石（列品番号・12）

乃木は職員集会所に碁盤と碁石を寄贈し、時間に余裕のある時は教員と囲碁を打ちながら学生の訓育の話をする機会ともしていた。⁽³⁰⁾ 職員集会所は敷地の東南隅、鴨池と呼ばれる池の辺にある建物で、もとはこの地にあった松浦伯爵別邸の茶室だった。⁽³¹⁾ 乃木はこの集会所付近の風景を好み、よく散策していたという。⁽³²⁾

○石【図3】（列品番号・7）

乃木が石を好んで拾う姿はしばしば目撃された。明治四五年（一九一二）七月、学期試験後の茶話会で、五月におこなわれた多摩川遠足の活動写真を鑑賞した時のこと。「院長が河原にて従容として散歩せられ、或は体を屈して石塊を拾はるる所など、其の様実際を見るが如く、院長自身も其の余りに屢々現るゝを以て、平手を以て頭を撫でつゝ、覽られたり」。⁽³³⁾ 乃木は「石は形が面白くても坐るのでなくはいかぬ⁽³⁴⁾」と語り、持ち帰った石は文鎮に用いたという。⁽³⁵⁾

○文具類（墨壺・蠟石文鎮・インク壺・筆）（列品番号・10）

歌や漢詩を詠み、書をよくした乃木は揮毫を求められることも多かった。石碑などの大きな書を認めるときは床に紙を広げて書いたため、床には墨滴が見られたという。前述の石はそうした折に文鎮として用いたのである。

『記念録』によれば、乃木は学生の夏休みの日記や作文を読み、一人一人に添削の赤字を入れて指導することもあった。書物には朱や墨で印をつけ、書き込みをしながら読みこんでいる。書物へのこだわりは深く、自費出版をするほどで、『中興鑑言』などが学習院寄宿舎にも寄贈され、今に伝えられている。⁽³⁶⁾ 朝晩に時間があると乃木は書物に目を通し、学生たちの自習時間には大きな声で音読をし、勉学に励む姿勢を示していた。

○軍行李【図5】（列品番号：20）



【図5】 軍行李（展示風景より）

乃木の所持品は行李二つに入る程度であった。この行李は軍用で、革に木枠をつけて強度を高めてあり、蓋の内側には二つのポケットがつく。「乃木希典」の記名は蓋表と両側面にある。乃木はこれを日露戦争の際にも使用していたとい⁽³⁷⁾。夏季游泳への携行品は、一方の行李には毛布二枚と襦袢、袴下の着替え、鹽と薬罐が各一個と若干の日用品、もう一方には「種々なる書籍が一杯詰めてある切り」⁽³⁸⁾だったという。

以上、遺品の中から日用品を通して乃木の日と学習院の様子を振り返った。学習院アーカイブズにはこの他にも洗面器、靴ブラシなど、生活に密着した品々が伝わり、乃木希典の日常を彷彿とさせる。

（四）武課教育と精神修養

乃木が学習院の教育に及ぼした影響の一つに、武課の充実が挙げられる。皇族男子は相応の年齢になると陸海軍の将官となることが定められていた。明治一四年（一八八一）に発せられた天皇の御沙汰において、華族は陸海軍に従事することが求められたため、学習院ではもとより武道や体操が盛んであった。現在の体育にあたる武課の授業では、体操・柔道・剣道・弓道・馬術・遊泳・射撃・野外演習などが学齢に応じておこなわれていた。

乃木はこれらの充実を計り、中等学科では剣道・柔道（三年以上）を正

課とし、初等学科六年の木剣体操開始、中等学科一・二年の木銃教練開始、中等学科四年以上の行軍演習を期間延長するなど、身体の発育に応じた課題を与えた。陸軍特別大演習の見学も明治四〇年から開始している。これらの目的は精神の修養であるとして、明治四二年一月には次のように述べられている。

「本院にて武課を教授する目的は、軍隊の如く武器を執り直接戦争の場裡に立つものとは同じからず、武課訓練に基づき精神の修養を企図し、自ら品性を保ち、以て厳肅なる紀律の涵養を得しめ、他日指導監督の任に堪へしむるに在り⁽³⁹⁾」。

乃木の教育の主眼は、「精神の修養」にあった。特に乃木は撃剣（剣道）の授業には欠かさず出て、自ら指導した。授業を受け持たない乃木は、直接学生に教えることのできるこの時間を大切にしていたという。その教えは勝敗よりも気合や太刀筋を重視するものだった。

「精神の修養」は夏季休業中にも、游泳演習の場を通じて実践された。学習院では明治一三年（一八八〇）から、夏季休業中に游泳演習をおこなっていた。満一〇歳以上の学生のうち希望者が参加して、隅田川下流と両国の中州で演習を実施していたが、明治二四年からは鎌倉郡片瀬に場所を移した。同三八年には同地に游泳寄宿舎が竣工し、また演習規定と転地游泳心得を制定して、演習のための環境を整えた。乃木は院長となった明治四〇年からこの演習に参加している。

そしてこの年より乃木は学生の天幕（テント）生活を導入した。始めは宿舎に入りきらない学生を収容していたが、翌年からは中等学科以上の学生は天幕での生活をおこなうことになった。これは天幕で生活することが「精神の修養」に適うとして導入したもので、乃木自身も天幕で生活して生活指導にあたった。

乃木は泳ぎは得手ではなかったようで、演習中は望遠鏡で学生たちの様子を見守り、時に初等学科の学生を指導した。晴雨計（気圧計）と温度計を常に気にかけて、曇天であれば晴雨計と首つ引きで気象を観測し、游泳演習に及ぼす影響を気遣っていたという⁽⁴⁰⁾。本展には乃木所用の晴雨計（列品

番号・27、乃木神社蔵)を展示した。これは明治四四年、英国王の戴冠式に出席する東伏見宮依仁親王に随行して渡欧した際に購入したものだといふ。

游泳場からは富士が一望でき、乃木は「仰ぎみれば心もいと、すみわたる旭てりそふ富士の神山」という歌を詠んでいる⁴³。明治四〇年には、この歌と富士を描いた乃木自筆の絵葉書⁴⁴が記念として作成された。以後、游泳記念絵葉書は恒例となり、参加者に配布されるようになった⁴⁵。

学習院初等科蔵の「学習院初等学科游泳記録」には、游泳のスケジュールや内容、参加者などの詳細が記録されている。右の絵葉書も含まれ、游泳期間中に乃木が学生のために講演した内容も見ることができる。学習院の游泳場は、その後明治四五年に沼津に移転され、以降現在に至るまで、游泳は同地でおこなわれている。

(五) 英国王戴冠式と世界の学校視察

乃木が学習院長在任中の明治四四年(一九一一)、同盟国であった英国で、新王ジョージ五世の戴冠式が執り行われることとなった。日本からは、天皇皇后の名代として東伏見宮依仁親王・周子妃^{かみこ}が出席することとなり、その随行員として軍事参議官陸軍大将乃木希典、同海軍大将東郷平八郎、他数名が渡欧することとなった(乃木が随行員となった経緯は第二章に後述する)。

当時の宮内省の記録「外交接待録」(宮内公文書館蔵、識別番号・11002)第八号及び第一号によれば、渡欧にあたり、外交のための贈呈品として、天皇から英国皇帝(王)には「大勲位菊花章頸飾」が、皇后から英国皇后(王妃)には「御紋付蒔絵手箱躑躅ニ孔雀模様」が用意された。また、「宮内省省報」(宮内公文書館蔵、識別番号・77882「明治天皇以後皇族実録」より)によれば、各随行員には旅費其他の費用が下賜され、乃木と東郷は、この時八千五百円を賜っている。

随行員の一人、陸軍砲兵中佐の吉田豊彦が記録したとされる「乃木大将

渡欧日誌」⁴⁶は、同年二月一四日に正式な随行員の辞令が発表された後、四月一二日の出発までの準備期間から、帰国後の各国へ礼状を発送に至るまでの、渡欧に関する詳細な記録である。

これによれば、渡欧前の準備として、随行員一同は度々東伏見宮邸に参集し打合せを行い、また、各個でも旅程や物品に関する手配、各関係者への挨拶などが進められた。天皇皇后からの贈呈品以外に、乃木も独自に現地の人々への贈呈品を用意しようとした。今回展示した品に関するところは、前述の「乃木大将渡欧日誌」二月二〇日に「本日御前九時乃木大将ヲ学習院ニ訪ヒ旅行準備ニ関スル詳細ノ指示ヲ受ケ午後:(中略)弥左エ門町宮本商工及三越ニ到リ土産品ノ考案ヲ命ズ」とあり、二月二三日には「本土産品トシテ三越美術部ニ「ボンボン入」百個ヲ宮本商工ニ紋章附巻煙草入三拾個ヲ注文ス」と記述される。

展示した銀製巻煙草入(列品番号・24、乃木神社蔵)は、本体表中央に乃木家の家紋を配したデザインで、内側には「為記念贈呈/明治四十四年/乃木希典」の文字が彫られ、付属の箱には「MIYAMOTO SHOKO/京橋区弥左衛門町二番地/貴金属美術品宮本商工」の札が貼られている。意匠、為書、年紀、製作会社の情報が全て日誌の記述とも合致するため、この銀製巻煙草入は渡欧にあたり乃木から指示を受けた吉田中佐が、その日の内に宮本商工を訪ねて現地への土産品の考案を命じ、さらに三日後には乃木家の紋章を入れる指定をし発注した巻煙草入とみてよいだろう。日誌には、英国での戴冠式後の七月一二日、乃木がオーストリアのヴァイスキルヒェンの士官学校で、年に一度の学生の競馬大会を参観した際に、その「賞品トシテ銀製巻煙草入三個ヲ贈ル大将の紀年品を得タル学生ハ歡喜極リナク大将帰維ノ後礼電ヲ送」ったと、実際に贈呈された例が記録されている。

銀製巻煙草入と並び記述される三越製のボンボンニエールについては、該当するものが不明だが、今回の展示では、特別出陳として「銀製八稜鏡形人物文ボンボンニエール」(口絵7)(列品番号・☆、個人蔵)を展示した。制作年代は、その造りから、明治末〜大正初期頃と思われる。八稜鏡は、

縁が八弁菱花形をした銅鏡のことで、日本では奈良・平安時代にはその存在が認められる古典的な道具類の一つである。このボンボニエールは、蓋表の鏡面部分に、東伏見宮依仁親王と周子妃の姿が並んで写し出される趣向となっている。ボンボニエールには様々な造形のものがあるが、このように写真を利用したものは他に類例がない。二人の像の部分は、まるで金属に直接印刷してあるようで、拡大するとこの像が無数の点の集合体で構成されていることから、この頃日本に入ってきて実用化された写真平版などの写真製版の新技术を応用して制作されたものかと考えられる。「英国王戴冠式記念絵葉書」(口絵6)(列品番号・25)に使用された依仁親王・周子妃の写真とほぼ同じであるため、この点からも、明治四四年に近い年代の製作と推測される。

日誌をみると、乃木はまた、渡欧前にドイツ・フランス・ロシア各国の駐日大使の元を訪問し、戴冠式後の各国視察の際に、それぞれの国の学校や軍隊を参観できるよう依頼してまわっていたことが分かる。例えば、三月二八日には、ロシア大使に「露国ノ貴族学校ハ世界ニ於ケル貴族学校ノ好模範タルヲ以テ是非参観シタキコト其他一部ノ軍隊及学校ヲ見学シタキコト」として交渉し、ロシア側の快諾を得ている。四月一二日から八月二八日の約四ヵ月半に渡る渡欧中には、各寄港地で現地の学校や日本人学校を見学し、戴冠式後は、英国の名門イートンやボーイ・スカウト、近隣諸国の貴族学校・普通学校・士官学校など、あわせて二〇校以上もの学校視察を行った。また、英国のボーイ・スカウトについては、戴冠式後の視察で見学した天幕張りや救護演習等の様々な競技に感動し、現地の学生の前で講演する一幕も設けられ、帰国後の学習院の生徒への講演でもその様子に触れている。創立者のベーデン・パウエル中将が初めてボーイ・スカウトの実験キャンプを行った明治四〇年八月、院長になったばかりの乃木も学習院の沼津游泳に学生の天幕生活を導入しており、英国におけるボーイ・スカウトの参観は、乃木が模索していた教育法に大いに参考になったと見える。翌年からは現地で見学した競技の一つ「木銃教練」を学習院の授業に取り入れた。乃木はこのように、学習院長として、世界の教育の最

新事情を視察し、新しい教育法を取り入れるという試みも行っていたのである。

なお、渡欧に関わる資料として、本展では渡航中に洋上から学習院初等学科へ宛てた絵葉書も展示した(列品番号・26)。本稿では出品しなかったものも含めて全八点を〈表2〉にまとめた。

(六) 乃木院長の訓示

学習院の教育には一般的な学業だけでなく、品性の陶冶が重要であると思見した乃木は、折にふれて学生に訓話をした。本展に出品した「乃木院長の初等学科訓示要項」(列品番号・14、学習院初等科蔵)は、乃木が院長在任中に学生に折々与えた訓示の中から代表的なものをまとめ、箇条書きにしたものである。この訓示要項は、初等学科では太平洋戦争が終わるまで毎年全学生に配られていた。その内容は『乃木院長記念録』に掲載された事項に準じているため、同書より紹介する⁴⁷。

- 一、口を結べ。口を開いて居るやうな人間は心にもしまりが無い。
- 二、眼のつけ方に注意せよ。始終きよろしくして居るのは心の定まらない証拠である。
- 三、敬礼の時は先方をよく注視せよ。
- 四、自分の家の紋所、家柄、先祖のことはよく聞いて忘れないやうにして置け。先祖の祭は大切であるぞ。
- 五、男子は男子らしくなくてはいかん。弁当の風呂敷でも赤いのや美しい模様のあるのを喜ぶやうでは駄目だ。
- 六、決して贅沢をするな。贅沢ほど人を馬鹿にするものはない。
- 七、人力車には成るべく乗るな。家で人力車をよこしても乗らないで帰る位にせよ。
- 八、寒中水で顔を洗ふものは幾人あるか。湯で洗ふやうではいかん。
- 九、寒い時は暑いと思ひ、暑い時は寒いと思へ。

一〇、破れた着物を其の儘着て居るのは恥だが、そこをつぎをして繕つて着るのは決して恥ではない。いや恥どころではない。

一一、恥を知れ。道にはづれたことをして、恥を知らないものは禽獸に劣る。

一二、健康の時は無理の出来るやう体を鍛錬せよ。けれども一旦病氣になつたら、医者といふことをよくきけ。

一三、洋服や靴は大きく作れ。格好などはかまふな。

一四、学習院の学生は成るだけ陸海軍人になれとは、陛下の御沙汰であるから、体の丈夫なものは、なるべく軍人にならなければならぬ。けれども生れつき体の弱いものもあり、又いろ／＼の事情で軍人になれないものもあらう。之も仕方がないが、何になるにも御国のために役に立つ人にならなければならない。国のために役に立たない者、或は国の害になるやうな人間は、死んでしまつた方がよいのである。

これらの訓示に関わつて、裕仁親王が初等学科に通つていた頃の有名なエピソードがある。破れた洋服や靴下が新しいものに取りかえられていると、「院長閣下は継ぎの当たつたのを着るのは恥ではないと仰つた。穴が開いたのは継ぎを当てておくように」と命じ、継ぎの当たつた正服を誇らしげに着ていた、というものだ。⁽⁴⁸⁾ 乃木の質実剛健の教育方針はこの訓示要項に如実に表れており、また学生に浸透していたことがうかがわれる。

乃木は個々の学生にも「揮毫」という形で訓示を与えた。⁽⁴⁹⁾ 揮毫は主に初等学科の学生に流行し、扇面に乃木の書をもつたという。その内容は漢文や論語、漢籍、古典書籍から採られていた。本展にはそうした扇の一つ(列品番号・34)を展示した。扇面には「立身行道」で始まる「孝経」の一節が墨書されている。

(七) 乃木の自刃とその後

大正元年(一九一二年)九月一三日、明治天皇の大喪儀の日。この朝、乃木は写真士の秋尾新六を自邸に呼び、正装の写真を撮影している。この時撮影された一枚に、新聞を読む姿の写真【図6】がある。

乃木は右目が遠視、左目は若い頃の怪我により視力はほとんどなかったという。しかし普段は裸眼で問題はなかったようで、乃木が眼鏡をかけている写真は少ない。

今回展示した【図7】の眼鏡(列品番号・9)は、【図6】の写真で乃木がかけている眼鏡と比較すると、形やつるの曲げ具合から見ると同一のものと思われる。



【図6】 乃木希典・夫人静子 (明治45年9月31日撮影) 当館蔵



【図7】 眼鏡

午後八時、宮城を出発した天皇の棺が、大喪儀の会場となった青山練兵場へ向かう頃、乃木は赤坂の自邸において、辞世歌「うつし世を 神さりまし、大君のみあとしたひて 我はゆくなり」や、関係者へ複数の遺書を遺し、自刃した（この辺りは前掲論文「遺書とその周辺」に詳しい）。その報せは、すぐに青山の大喪儀会場と学習院にもたらされ、翌日からは新聞各紙により大きく報じられた。

学生から慕われた乃木の自刃は、学習院内にも大きな衝撃を与え、学生らは自発的に通夜を営んだ。乃木の没後、顕彰活動が進む中で、学習院においては大正二年（一九一三）に『乃木院長記念写真真帖』、翌年には教職員・学生の談話をまとめた『乃木院長記念録』を編纂・出版した。当時の学生や教職員が語る学習院長・乃木希典の姿は、教育者としての乃木の横顔を鮮明に伝えている。本稿もこれらの本に負うところが多く、この中から採り上げて語りたいエピソードは尽きない。

また学習院アーカイブズには、乃木の自刃後から翌年にかけて、すなわち大正元年～二年の間に、新聞各紙に掲載された乃木および学習院に関する記事切抜を各社ごとに綴った「故乃木院長二閔スル事項」と題する冊子が二〇冊遺されており、本展でも一部を紹介した（列品番号・42）。

記事が切り抜かれた新聞を冊子毎に挙げると、①東京朝日新聞、②国民新聞、③時事新報、④中央新聞、⑤中外商業新報、⑥東京日日新聞、⑦日本新聞、⑧二六新報、⑨報知新聞、⑩東京毎夕新聞・東京毎日新聞、⑪都新聞、⑫やまと新聞、⑬読売新聞、⑭万朝報、⑮大阪朝日新聞、⑯大阪時事新報、⑰大阪新報、⑱大阪日々新聞、⑲大阪毎日新聞、以上の在京・在阪の大手各紙を網羅しているほか、⑳地方各新聞を集めたものもある。とくに㉑地方各新聞には、北は北海道から南は沖縄までの日本内地はもとより朝鮮・台湾・樺太の地域紙も含めて、六〇を越える新聞から記事が切り抜かれており、その収集範囲は驚異的と言えるものである。①～⑱の各冊も、各紙から恐らくほぼ遺漏無く採取されたと思われる、記事の量は膨大であり、その点でも稀有な史料といえる。これらを分析することで、乃木の「殉死」をめぐる様々がメディアによって各地に伝播する様相、各地で

催された乃木追悼行事の様子や、「忠臣」「軍神」といった乃木イメージが社会の中で増幅・再生産されていく過程を詳細に検証することが出来るだろう。

本稿では紙幅の関係から、①東京朝日新聞と②国民新聞に加えて、特徴の著しい㉑地方各新聞の三冊についてのみ、内容目次の一覧表（表3）を掲載するので参照されたい。

遺された辞世歌や遺書から、乃木の死は「殉死」とも言われた。幕末に生まれ、明治という時代を駆け軍人の最高位・陸軍大将となり、天皇の信頼を受け、その治世の終わりとともに自ら世を去った乃木の選択は、近代化が進んだ明治末の時代において、稀なものとして捉えられ、当時の作家や芸術家の創作活動にも影響を与えている。乃木の死という事件は、森鷗外の短編『興津弥五衛門の遺書』や夏目漱石の『こころ』など小説に題材として取り上げられ、各地で多くの乃木像が制作された。前掲吉廣論文「遺書とその周辺」でもその一部を取り上げたが、今回の展示では二体の乃木の銅像を展示した。渡辺長男原型・岡崎雪聲鑄造「乃木希典胸像」（列品番号・44、学習院アーカイブズ蔵）と、本小白雲原型・阿部胤齋鑄造「乃木希典胸像」（図8）列品番号・43、個人蔵）である。いずれも、乃木がなくなつたその年のうちに制作されたものである。

本小白雲（一八七二—一九五二）は、土佐出身の彫塑家で、明治から昭和にかけて、幕末の志士や明治の元勳の銅像原型を数多く作った人物である。土佐藩の旧主・伊賀陽太郎や岩村通俊男爵の援助を受け、明治二一年（一八八八）高村光雲に弟子入りし、東京美術学校の学生となり、光雲の助手として皇居外苑の楠正成像や、上野公園西郷南洲翁像（西郷隆盛像）の原型制作にも携わった。後、彫塑科教授の長沼守敬に師事し、彫塑の道へ進んだ。桂浜の坂本龍馬像や、国会議事堂の伊藤博文像などの作例があり、史料館所蔵の資料群である山階宮芳磨博士旧蔵資料の一つで、大正時代に皇后（貞明皇后）から山階芳磨侯爵に下賜された「銅製瓢箪蜻蛉瓶」もこの白雲の作である。（詳細は史料館発行「ミュージアム・レター No.29」を参照のこと）。が、白雲の制作した銅像やその原型は、戦時の金属供出や、



【図8】 本山白雲原型・阿部胤齋鑄造
乃木希典胸像

これを悲観した白雲本人が自宅保管の原型を自ら破壊したこともあり、鑄造した銅像の多くが失われた作家である。

今回展示した白雲原型の乃木希典胸像は、読売新聞社によって制作を企画、受注販売されたもので、当時の読売新聞にはその広告や関連記事が見られる。乃木が自刃した二日後の九月一五日には製作の旨とその詳細が紙上で発表され、製作完了期は一月三〇日とされている。また、一〇月一日の紙面では、「乃木大将の銅像」のタイトルで白雲のインタビューが掲載されている。それによると白雲は明治四二年（一九〇九）に旅順表忠塔の模型を製作して以来乃木と親交があり、肖像制作を約束、片瀬で游泳中の乃木をスケッチしたそれをもとに原型を制作したのが、この銅像である。銅像原型の制作の様子を見学してきた岩村通俊男爵からは、「実に將軍そっくり」との言が出たという。銅像の製作に関する情報とともに、乃木と白雲の二人に面識があったということも、興味深い事実である。

以上、第一章では展示を概観しながら、個々の資料について調査により新たに判明した知見などを織り交ぜながら紹介した。

第二章 乃木院長時代の学習院に関する史料紹介

本章では、本展の準備過程において行った調査・研究の結果、得られた知見を述べていきたい。収集した史料の紹介が中心となるが、従来紹介がなされていないもの、または本展の準備過程で新たに発見されたものを中心にとりあげていく。

（一）乃木院長をめぐるエピソード

本展では、展示品に関連するエピソードを紹介する小パネルを展示室の各所に配置した。本節では、これらエピソードパネルの内容について引用箇所を記録するとともに、文字数の関係で省略した内容や、調査の過程で判明した事項も含めて述べていきたい。

1. 乃木坂の起源

乃木は明治一二年（一八七九）以来、赤坂新坂町（現・港区赤坂八丁目）に邸宅をかまえており、乃木が自刃したのもこの邸宅の一室であった。その後、乃木邸は東京市に寄附されて公園として整備されるとともに、乃木神社が創建されて、乃木を顕彰する場所として現在に至っている。その敷地の南隣に接する坂は、江戸時代には行合坂ないし幽霊坂と呼ばれていたが、乃木の自刃後に「乃木坂」と改称され、現在には広く坂名として人口に膾炙している。この乃木坂の名称の由来について、史料に基づいて検討してみたい。

乃木坂という名前を提唱した初出とみられるのは、明治三九年（一九〇六）一月一五日に、原田稔甫という人物が『中央新聞』に寄せた投書である^⑩。

○乃木坂 赤坂新坂町なる乃木大将邸宅の附近に幽霊坂といふがあ

り。斯名何に因りて附せられしかを知らざるも、古来人家疎なる寂寥たる場處なりしを以て、何時の頃よりも無く斯くは称呼せられたるにやあらん。而かも今や同地界限は人家櫛比せる繁華の地となりて、最早幽霊坂といふは無意味の称呼となれり。故に思ふに今回偉勳赫々たる乃木大将の凱旋せられたるを好機とし、彼の坂の名を改めて向後永に乃木坂と呼ぶこととせば妙ならんか。曾て聞く往年聖上陛下函根に御行幸の御、夫の大地獄小地獄をばいはれ無き称呼なりとありて大涌谷小涌谷と其名を改めさせられたることあり。近くは東郷大将邸附近の坂を東郷坂と命じたこともあれば此好例を追ふて、赤坂の幽霊坂をば自今乃木坂と命名せんことを熱心に提唱するものは東京市民の一人なり（原田生投）

この前日、つまり一月一日に乃木は、日露戦争の戦地から帰国して新橋に凱旋していた。原田は翌月の雑誌『歴史地理』にも、この投書と同様の意見を掲載しているが、その文中には「予は大将凱旋の当時、之を新橋に迎へ、翌日の中央新聞に此意見を掲げし」と記されている。⁽²⁴⁾つまり、原田は乃木の凱旋を熱狂的に迎えた群衆の一人であり、そこでの興奮体験が投書を書かせた直接の要因であったことは容易に推察されよう。

投書の内容を見ると、ここで原田は、乃木坂の命名を提唱するに至った背景を二つ挙げている。一つは明治六年（一八七三）八月に明治天皇が箱根に行幸したことを契機に「大地獄小地獄」が「大涌谷小涌谷」に改称された事例である。もう一つは、乃木と並んで日露戦争の英雄と賞されていた東郷平八郎が、前年一〇月二三日に東京へ凱旋した際に、それを記念して麹町区上六番町の東郷邸に接する法眼坂（行人坂）が「東郷坂」と改名されたことである。この東郷坂への改名は、麹町区民の有志の発起によるものであり、区会での議決を東京市へ届け出る形で行われていた。⁽²⁵⁾日露戦争の軍事的英雄の凱旋に際して、坂の改名が実際に行われていたことは、有力な動機付けとなったであろう。

なお原田稔甫はこの当時、学習院女学部の教授であった。⁽²⁶⁾ちなみに、乃木が宮内省御用掛に任命され学習院の教育に参与するようになるのが同

年八月末、第一〇代学習院長に就くのは翌年一月末のことである。よって、原田が乃木坂を提唱した時点では、乃木と直接関係することになろうとは予想外のことであっただろう。さらに附言すれば、原田は明治四〇年（一九〇七）一二月に学習院を非職となるが、その理由は乃木院長の教育方針と馬が合わない⁽²⁷⁾とみられた下田歌子が女学部長を辞職したことに連袂したためであった。乃木坂の提唱者が、二年と経たず乃木その人と対立するような形となったことになり、皮肉と言うほかない。

さて、この原田による提案の後、いくつかの新聞記事から、乃木坂の名前が使用されるようになったことがうかがえる。例えば、明治三十九年七月二三日の『東京朝日新聞』に掲載された、赤坂檜町に新校舎を建設した高等女子實脩学校の參觀記では、その場所を「新名乃木坂（乃木將軍が其附近に居らる、故に爾名づく）」の上に在る」と説明している。また明治四一年一二月三日の同紙には、「東京新名所」として東郷坂と乃木坂を併せて紹介した記事がある。次に掲げたい。⁽²⁸⁾

▲東郷坂 麹町区上六番町の小阪路、別に名もなかりしを日露役大捷の結果威名隆々たる東郷大将の邸宅が坂の中途にあるを以て、東郷坂の称を得るに至れり。当時講話談判に赫々の功ありし桂首相小村大使等の居住地をも、桂町とか小村坂とか名づけんと云出せしものありしも殴られて止めたり。

▲乃木坂 乃木將軍邸に近き赤坂新坂町の坂にて、是も戦捷の結果將軍の威望を現はしたるなり。去れど二百三高地ほどに高からず、戦功に誇らぬ將軍の鼻と同様何方かと云へば低い方なり。俗に幽霊坂と呼ぶ縁故によりロスケの幽霊でも現れたなら、おでん屋の出る程見物人の賑ふべきに惜しいかな其噂もなし。

この記事から二つの点が興味深い。第一は、日露戦争の功労者である首相の桂太郎やポーツマス講話会議の日本側全権の小村寿太郎なども、地名に採用される可能性があったものの、乃木・東郷という軍事的英雄とは異なって、現実には至らなかつたことである。当時の大衆の志向性がよく表れていよう。第二は、乃木の自刃後には東京市民が押し寄せる一大スポッ

トとなった乃木坂も、それ以前にはさほどの賑わいを見せていなかったことである。この点については、この当時の乃木が、学習院内の寄宿舎に起居していたことも、一つの要因かもしれない。

最終的に、乃木坂という名称が完全に定着したのは、乃木の自刃後のことである。教育家の峰間信吉（鹿水）は、その経緯を自身の経験として、次のように述べている⁽⁸⁶⁾。

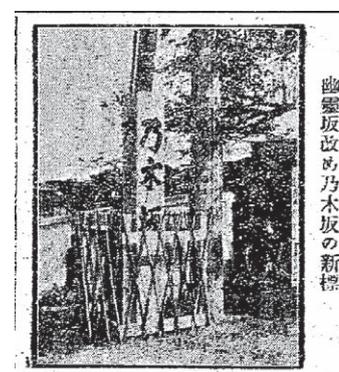
私は、いち早くも、乃木邸のほとりの坂を、一大記念として「乃木坂」と命名し、この千古の偉人を歩々是れ忘却せぬタツキとしようとした。是れより先、友人なる学習院教授原田稔甫君が、雑誌「地理歴史」に、「此の坂を乃木坂と命名すべき説」を載せられたことがあつた。そこで、

その雑誌を抜き出し、友人油田亀五郎君に、私の古びたフロツクコーナーに山高帽を貸与し人力を雇うて、油田君を乗せ、雑誌「地理歴史」を持たせ、各新聞社を歴訪さして、「乃木坂」のことを熟説せしめた。翌朝の新聞紙には何れもその記事を載せてあつた。為に赤坂区会も早速区会を開いて「乃木坂」と命名することを決議し、之を上司に申達したので、私の素願は成就したことがあつた。

原田稔甫と友人関係にあつた峰間は、原田の提案を覚えており、改めて改名の提案を働きかけたのである。この結果かは不明であるが、実際に九月一八日の『万朝報』では、乃木の葬儀執行を伝える記事の中で、「改称乃木坂」の小見出しの下に、赤坂区の動向を次のように伝えている⁽⁸⁷⁾。

赤坂区にては將軍終焉の邸宅を区内に有するを名譽とし、満腔の弔意を表せんとて十七日区会協議会の決議にて弔辞を草したが、今十八日には代表者が同邸に至り近親の人々に呈する筈なり。又本日の葬儀に対しても霊前に花環を供んとの議ありしも、斯くては大將生前の素志に悖るべければとて取消しとし、改めて將軍を記念する為区内有志等協議の上、乃木邸附近の通称幽霊坂を『乃木坂』と改称する事となり、本日坂の上に其木標を樹つる筈なり。

この記事中にあるように、乃木の葬儀が行われた九月一八日に、赤坂区会の決議を以て、坂の上に青竹の柵で囲まれた「乃木坂」と墨書された棒



【図9】『読売新聞』1912年9月19日3面

杭（【図9】参照）が建てられた。翌日以降の新聞各紙は、葬儀の様子とともに、このことを伝えていく⁽⁸⁸⁾。そもそも、坂の名称は法規上の定めは無かったというが、この区会決議と棒杭の建設をもって、乃木坂が坂の公式名称として一般に流布した画期と見做し得るだろう。

なお、この直後には、乃木邸の横にある路面電車の停留所が「乃木坂停留所」と改称されたという⁽⁸⁹⁾。しかしアジア・太平洋戦争後、軍人の名前が避けられて「新坂町」（のち「赤坂八丁目」）に停留所名が変更され、さらに昭和四四年（一九六九）にはこの区間の路面電車が廃された。ところが、昭和四七年（一九七二）になってここに地下鉄千代田線が開業すると、その新駅は「乃木坂」と命名され、再び駅名として復活すると共に、周辺一帯の地域名としても使用される契機となった。

2. 回想録「学習院物語」より

乃木院長時代の学習院に関する回想は、『乃木院長記念録』に掲載されたものを始めとして、数多く残されている。ここでは、従来あまり知られていない回想録「学習院物語」をもとに、印象的なエピソードをいくつか紹介したい。

まず、移転当初の目白校地について記した戸澤富寿「目白点描」の一節を引こう。

移転当時は未だ東京府下北豊島郡高田村で交通も不便であったが、辺りは至って閑静であり敷地は四谷とは比較にならぬ程広大であった。然も松・杉・櫟・欒などが沢山あってそれに囲まれた高燥な一角から

は遠く西の方秀麗の富士を朝夕眺められるし、近く脚下一面の稲田は遙か高田馬場へ続いてその遠近の眺めは四季様々の趣があった。そして敷地の中にはいろいろの小鳥や雉が棲んでいたから俗塵を離れた豊かな自然に恵まれた環境であった。斯様な丘の此方彼方に校舎と寄宿舎が配置よく建てられたので如何にも落ちつきのある学園の感じを強く抱かせた。

移転当初の目白校地は、未だ東京の郊外であり自然豊かな場所であったことがよくわかる。別の箇所では「その頃の敷地には今想像することさへ困難な位蛇や雉が沢山棲んでいたし狸の住むにも都合のいいところだった。」とも述べられている。現在の目白キャンパスは、長年の増改築により、移転当初とは全く様相が異なっているが、乃木院長時代のいくつかの建物が場所は移動しているが現存している。

続いて、目白校地における一つのエピソードとして、近衛文麿「父の追憶を中心として」から、運動会の様子を述べた部分を引用する。

感銘の深かったのは、その前年、目白へ移転して秋の学期が始まって間もなく十月中旬に初めて目白で運動会を開いた時に皇太子殿下の行啓を仰いだ時のことです。私共はその時分ランニングをやって居りました。伊藤〔博文〕公が正面の天幕の中で皇太子殿下即ち大正天皇の御側に侍して運動会を見られて居りました。慥か統監服を着て居ったと思ひます。李王世子も御同列でした。あの時分には伊藤公はとく今の李王殿下の御手を引いて御供をして居りました。その時分の学習院は運動部には先輩に三島〔弥彦〕君や二荒〔芳徳〕君のやうな第一流の選手が居て花やかな時代でした。

近衛は当時、中等学科六年級に在籍しており、翌年に第一高等学校へ入るまで約半年間、目白校地で過ごした。ここで回想しているのは明治四一年（一九〇八）一月一日に開院記念式と同時に行われた第一二回運動会である。文中にあるように皇太子嘉仁親王は、運動会や端艇競漕会・卒業証書授与式などの学習院の行事に、たびたび行啓していた。また当時の学習院には、後に日本初のオリンピック選手となる三島弥彦^⑧がおり、「花

やかな時代」であった。

次に、学生から見た乃木院長の姿について、中等学科第二級から高等学科第一級にかけて乃木院長時代を過ごした酒井忠正（在学当時の姓名は阿部元彦）の回想「乃木院長」を引きたい。

この個人教育といふものは三、四十名の人間ならば先づ出来得るといふ常識に今までなつて居ると思ふのですが、その頃、三百人からの学生の個人教育をやつて行かうとされた努力も偉いけれども、事実それが行届いて居たことは、これは非常な努力だったと思ふのです。だから一般の学生も非常に懐いて、殊に小さい幼年寮の学生達には特に親切にされて、茶話会や何かの時には努めて出席していろいろ面白い話を聴かして、我々も乃木さんの幽霊の話とか、狐がばかした話といふような実験談を茶話会でもって聴いたのです。それから時には謠をうたつて聴かされたり、といふやうなやり方として、非常に和やかな生活を学生の人達にさせようとされたので、一面非常に厳しい嚴格なところがあつたと同時に、一面非常に親子にも等しい心持のゆたかさをもつて学生に接しられたといふことは、あれは余程の精神的の努力がなければ出来ないことと思ふのです。

酒井は、乃木の個人教育の努力が行届いていたことを称賛しており、一面では好々爺のような乃木の人物像が語られている。

ここで述べられるように、乃木は院長として、学生と生活を共にする中で、学生への個人教育を熱心に行つた。この熱血指導については、白樺派の長与善郎（乃木の院長就任時に中等学科第五年級）が、「四六時中、個人個人のことにまで、差図をされることは不愉快極まりなかつた」と回想しているように、否定的に捉える者もいたのは事実である。そうした評価の背景には、乃木がそれまでの院長とは大きく異なる教育方針をとつたことにも原因があつた。乃木の就任当時、高等学科第二級生であつた徳川義親（在学当時の姓名は松平錦之丞）は、「最初、乃木大將が院長になられた時は、軍人なんか院長に持つて来て、一体どうなるのだらう。兵隊屋敷のやうになつてはたまらないといふ連中が多かつた。とにかく質実剛健

厳格一点ばりで、武課の如きは一掃張り切つて、ぎょう／＼やられるものと観念してゐた。これは学生ばかりでなく先生方も同様であつた。」と回想している。もつとも徳川はこれに続けて、徐々にその「真意」を理解していき、「一面には線が太く、他面には繊細な心づかいである。温かい厳格さの乃木院長を知つた。」と記している。厳格さと親切さの同居という評価は酒井の回想にも見られ、徐々に乃木の教育方針が学生の間に受け入れられていったことがうかがえよう。また、長与・徳川と酒井との評価の差異は、乃木の就任時に既に高学年であつた者と、乃木院長時代を通して経験した者との差異でもあるだろう。

最後に、厳格な軍人という乃木のイメージを覆すもう一つのエピソードとして、明治四四年（一九一一年）四〜八月に、東伏見宮夫妻の英国王戴冠式参列に随行した際に立ち寄つたドイツでの挿話を紹介したい。昭和一六年（一九四一年）五月に行われた「学習院乃木院長時代思出座談会」で、当時ドイツ大使館で書記官をつとめていた武者小路公共は、「学習院で非常に厳格な方と聞いて居つたが、私共お伴をして居ると、非常にくだけたお爺さん」だつたと、次のように語っている。

フォンアイネムと云ふ陸軍大臣の所に大きな宴会があつた。私は乃木さんの通訳みたやうな恰好で傍に附いて居た。さうすると其所に鹿の角で出来た灰落しがあつた。乃木さんが「是は非常に面白い物だから褒めてやつて下さい」と斯う言はれる。私がフォン大將に褒めやうとした所が、「シヤイリアルバイ」と乃木さんが仰つた。フォン大將は驚いてしまつた。「シヤイリアルバイ」と云ふ言葉は余程独逸語を知つて居なければ言へないのだ。さうするとフォン大將が「之を献上させて戴きませう」と言つた。さうすると乃木さんが小さい声を出して「実は褒めたけれども、余り良い物ではない。貰ふと迷惑だから宜しく断つて呉れ」と言はれた。（笑声）

英国王戴冠式への参列を終えた後、乃木は帰国の途次にヨーロッパ各地を周遊している。ドイツのベルリンへは七月九〜一〇日に滞在しているが、この引用箇所は二日目の晩餐会における話である。乃木は明治二〇

年（一八八七）から一年余りドイツに留学していた経験があり、また明治二〇年代前半にはドイツ語で日記も記していたことから、かなりの程度ドイツ語に通じていたと考えられる。

ほかにも乃木院長時代の回想は枚挙に暇がないが、本稿では紙幅の関係もあるため、本展で紹介した以上の内容に留めておきたい。

3. 乃木院長と武道・スポーツ

乃木は院長として、現在の体育に相当する武課を奨励した。しかし、剣道や柔道といった日本の武道や游泳を盛んに推奨する一方で、西洋スポーツについては批判的であつた。

その考えが表れたエピソードを二つ紹介しておきたい。一つ目は、院長就任以前の明治三九年（一九〇六年）に、宮内省御用掛として初めて学習院（四谷校地）を視察した際、テニスコートを見て次のような感想を述べたという。

一体一個の柔かな護謨毬を投げて遊ぶのに、砲台ではあるまいし、コングリートなどで造るとは、いくら金がある華族の子弟の集つて居る学校でも、随分贅沢過ぎた話である。一個の毬を投げるには、小石等は少しあつても、地面に凹凸位はあつても、普通の草原などで十分では無いか

このように乃木は、軍人的発想によってスポーツを断じた。加えて、テニスラケットについては、「一体構子の様な網で、一度毬を一方から他の方へ折角投げたのを、何故又元の方へ投げ返すのですか。」と疑問を呈したという。このような乃木の反応は、「目下流行して居る西洋の運動には、大々の弊害がある」という考えをもっていたことによる。それゆえ、乃木就任以前には三島弥彦らが活躍していた野球部も、活動を制限されてしまった。

軍人的発想は、運動をする際の服装へも注文をつけた。明治四一年五月一日に陸上部員の二荒芳徳（在学当時の姓名は伊達九郎）らが乃木邸を

訪れ、クロスカントリーレースの服装につき軽装を認めるよう伺い立てをした際に、乃木は次のように答えたという^⑩。

断郊競争（クロスカントリーレース）でも長距離でも、只早く走ればよいと云ふのでない。忍耐や克己心を養ふのであるから、競争者が皆制服を着て駆ければ御互である。兵隊でも襯衣一枚でなければ、重くて突貫が出来んやうでは困る。殊にこれから先殿下方も中学に御出で遊ばされるやうになれば、やつぱり御加入になる事となる。その時に俄に服装を変へるとか、又は殿下丈は御制服を召すと云ふ事は出来んから

乃木にとって運動の意義が精神修養にあったことが明瞭であり、制服を着用することを譲らなかつた。ただしその背景には、この年に初等学科へ入学した皇孫・裕仁親王への配慮もあつたことが読みとれる。

これに対して、武道のうち、とくに剣道については乃木自ら指導に当たつた。通常の授業に加えて、冬季休暇中に行われる寒稽古にも欠かさず出席したという。明治四四年一月の寒稽古は、次のような新聞記事となつた。

▲此夜予て病氣と承はつた乃木院長が軍服を着てヒヨツコリ道場へ入つて来られた。寒いから一本やらうと上着を脱ぎ洋袴の裾を捲つて道具を着ける。生徒監督等は驚いてまだ閣下は御病氣が本当でないとはりますからお控になつた方がと止めても、將軍は却々に用ひられない。止むなく生徒監督はこつそり学生一同に閣下の御病氣は耳だから余り乱暴に仕合つて閣下の耳を撃たぬ様にと伝へた。

▲そんな事とは閣下は御存知ないから、いざ来い若者と許りに竹刀を取つて道場に出られる。御相手をされる学生等こそ迷惑千万で、全力を籠めて仕合つては院長の耳を撃つかも知れぬ。然りとて手加減して居れば閣下が大喝一声、何を愚図々々して居る元氣を出さんか、もつと元氣にもつと元氣にと激励されるので、まごまごしてる間に、何れも此れも皆ボカボカ殴られてしまふ。評すれば乃木大將の剣術は極めて拙い。併し学習院剣道部の唯一の誇りだ。

前年夏に罹つた中耳炎の病み明けの乃木は、心配の声をよそに張り切つ

て参加し、躊躇する学生を叱咤激励したのである。

4. 乃木式教育への風刺画

当時の『東京二六新聞』一面には「二六ボンチ」という投稿による風刺画が掲載されていたが、明治四一年（一九〇八）九月には【図10・11】の



【図10】『東京二六新聞』明治41年9月19日



【図11】『東京二六新聞』明治41年9月22日

ように、二度にわたって乃木院長の風刺画が掲載された。いずれも当時の乃木院長のイメージを投影したものと云えるので、紹介しておきたい。

まず、この風刺画が作成された背景を見ておこう。前年に学習院長に就任した乃木は質実剛健な教育方針を掲げ、奢侈を廃して質素儉約を説き、精神修養や身体鍛錬を重んじた。だが、女学部長の下田歌子は乃木の方針に反発し、同年末に辞職する事態となった。華族女学校以来、長年学習院の女子教育に従事してきた下田の辞職は、ほかの教職員にも影響を与え、多くの連袂辞職を引き起こした。さらにこの年の三月には、時事新報社主催の美人コンクールで一等となった学習院女学部第三年級の末弘ヒロ子が退学処分を受けたことが、世間で大きな話題となっていた。^②乃木が掲げた厳格な教育方針は改革を伴うものであり、少なからぬ軋轢が生じていたのである。

こうした背景から、【図10】では「絹布来車禁止」と記された太鼓を打ち鳴らす雷神に扮した乃木院長に、怯える女学生の姿が描かれ、「アレ又雷様が鳴り出した」というキャプションが付されている。【図11】では「学習院女学部」の門前で継ぎ布を当てた服を着た女学生が、乃木が自ら学生に指導を行っていた剣道の真似をする姿を描いて、「斯うしたら乃木院長のお気に入るだらう」と皮肉っている。

(二) 乃木院長に関する書簡史料の紹介

本稿の最後に、本展に向けた調査・研究の過程で分析を行った、乃木院長に関わる書簡五通の史料紹介を年代順に行いたい。

これらはいずれも従来、未翻刻のものである。また最初の一通を除いて、本展で大きく取り上げた片瀬での夏季游泳と英国王戴冠式への随行に伴う渡欧についての内容であり、展示内容を補完する意図がある。

本節で紹介する書簡のうち、三通は寺内正毅宛ての書簡である。本展で展示した、乃木が自刃する二週間ほど前に寺内へ送った和歌（列品番号…40）、および後事を託した遺書（列品番号…39）に表れるように、同郷か

つ同年代の乃木と寺内は親友といえる間柄であった。とくに和歌の一首は「思ふとち語りつくしてかへる夜のそらには月もまとかなりけり」というもので、親密な間柄が滲み出ている。このほかにも、乃木が寺内に宛てた書簡は、山口県立大学図書館所蔵の「寺内正毅関係資料」に一〇通が残されている。^③これらの和歌・書簡については既に翻刻・解説が存在し、本展の関連講座でも東京大学准教授の山口輝臣氏に詳しく解説して頂いた^④ため、本稿では割愛する。

以下で紹介する各書簡を他の書簡と突き合わせて検討することによって、乃木と寺内だけでなく、山県有朋・石黒忠恵らも含めた立体的な関係性を垣間見ていきたい。

【書簡1】寺内正毅宛て平田東助書簡（明治三八年） 一月二三日

拜啓 益御清安奉欣賀候。陳は過日參邸之節御相談申上候学習院長候補者之儀に付、大磯に御意見之趣開陳仕置候処、奥將軍ならは至極適当に有之、此際専務と申訳には難相成も先づ兼務にて可然老閣より田中宮相に御相談被下候上にて、奥將軍に御内談御取計被下候様、迂生より御協議可申上との事に御座候間、日夜御多端之折柄乍御手数可然御処置被下候様奉願候。同院々長未定之為種々之浮説運動等を生し在再久に及候時は、同院之将来に不容易不利を醸し可申、且つ三月にて学期之終を告げ候得は、其以前に於て改正之準備不致ては学務上又幾多之不利可有之、乍蔭憂慮罷在候次第に御座候。小生昨夜帰京仕候間参趨之上御相談申上度存候得共、御多端之此際却て御妨と存、不取敢書中啓上仕候。右に關し尚御話之旨も御座候得は、電話にて御報被下度何時も拜候可仕奉存候。大磯より今日帰京之由被申居候間、疾々御承知之儀と存候得共、為念申添候 頓首

十一月廿三日 東助

寺内老台

〔封筒表〕 寺内陸軍大臣殿 必親展

〔封筒裏〕 平田東助

〔原史料〕 国会図書館憲政資料室所蔵「寺内正毅関係文書」 46―2。

【書簡1】は、「大磯」にいる山県有朋が「学習院長候補者」として陸軍大将・奥保鞏を挙げたので、当人への連絡を寺内正毅に依頼する内容である。乃木の就任以前に、奥が学習院長の候補に挙がっていたのである。

年代推定については、文中に出てくる宮内大臣・田中光顕の就任期間が明治三二―四二年であり、その間の十一月頃に学習院長の後任が問題となっていたのは、第八代院長・菊池大麓が明治三八年一月二日に宮内省と対立して突如辞任した事案があり、その後任問題だと判明する。

奥は日露戦争では第二軍司令官であり、第三軍司令官の乃木と同等の地位であった。この書簡が認められた時点では、未だ戦地から帰国しておらず、奥が新橋に凱旋したのは翌年一月二日のことであった。その直後の一月一八日に、院長空席期間に院務事務取扱となっていた山口銳之助が後任院長に就任することで問題は決着するが、結論が先送りにされた感はない。

乃木が宮内省御用掛に任命され、学習院の教育に参与するようになるのは、この年の八月末のことである。この宮内省御用掛への就任に際しても、長州閥・陸軍の長老である山県の「配慮」が働いていたことが、田中宮相の書簡から分かる。⁽⁶⁾

なお、乃木没後の院長後任問題に関する山県宛て平田書簡でも、「学習院長は東郷及奥両大将固く之を辞せられ、小笠原に内決致候様承り候」とあり、依然として奥が院長候補であったことが察せられる。⁽⁷⁾

【書簡2】 石黒忠恵宛て乃木希典書簡 明治四三年八月六日

拝啓 一昨日ハ御来臨夫々御示之儀相守、且又早速平井・山上両博士ノ臨診手術も相受今朝ハ無熱、痛も殆ント無之（今暁来）相成、大悦至極。乍略一寸御礼申上度、如此候。頓首

六日 希典

石黒賢兄尊下

又々耳鳴り候間、御覽可被下候。

〔封筒表〕 牛込揚場 石黒男爵殿 ※消印「麻布／4386」

〔封筒裏〕 赤坂 乃木希典 ※消印「牛込／4386」

〔原史料〕 国会図書館憲政資料室所蔵「石黒忠恵文書」 927

【書簡2】は、明治四三年（一九一〇）の夏季游泳中に耳疾に罹って、のちに中耳炎を発症したことに関わるものである。その様子は、次のように新聞で報じられた。⁽⁸⁾

乃木学習院長は過日来、同院生徒と共に片瀬に旅行し生徒と共に水泳中、耳中に水入りて一時痛みを覚えしが甚だしき事もなかりしに、其後毎夜深痛ありし為め一時帰京し新坂町の自邸にて静養せしも、何分痛みの減ぜざるに加へて発熱さへありたるに付、平井軍医監の診察に依り一昨日〔引用者註…八月九日〕正午十二時雨中を冒して渋谷の赤十字社病院に入りたり。大将の病状に付、昨日午後同医員の語る処に拠れば大将の病は左耳の急性中耳炎にて其局部に疼痛を存するも、目の下の処にては病状に何等の変化を見ず、熱度も騰らず食欲も平素と大差なし、されば此際外科手術を施す程の事もなく、此分ならば今後二週間に全癒さるべしと云ふ。

この記事によって、本書簡を書いた時の乃木は、片瀬から一時帰京して赤坂の自邸で静養中だったことが分かる。石黒の手配によって、日本赤十字社病院副院長の平井政適と同院耳鼻咽喉科主幹の山上兼善が診察に訪れたのちに、礼状を認めたのであろう。当時、軍医総監の地位にあった石黒は、

軍医として赤十字社にも創立以来関係し、常議員を務めていた。新聞記事にもあるように、当初の病状は軽度のものであったようで、平井らの診察によって「痛も殆んど無之」になったという。だが同時に、「又々耳鳴り候」と言つて石黒に診てほしい旨を伝えており、結果的に八月九日に赤十字病院へ入院するに至つたのである。

この後、石黒は韓国統監であつた寺内正毅に宛てた書簡において、逐一乃木の容体を伝えている。⁽⁷⁹⁾まず、八月一二日の書簡では「乃木伯病氣昨日はよきと申上たり。一昨日施術已来よろしく、先安心候」と記しており、また前日に見舞つた際には「還籍の翌年障子突破り」と詩句を吟じたという。一週間後の八月一九日の書簡では「乃木伯昨日午後、岡田、加古、山上立会、岡田執刀施術いたし、爾後経過よろしく、今日午前一時初めて調節交換いたし検し候処、創処もよく排膿も十分、痛も減し、此分にては先安心と被存候間、此段御報申上候也」と、再度の手術後も経過が良好であると伝えてある。しかし、八月二一日の書簡では「乃木大将耳病、小生大に案候間、推て入院をせしめ両度之施術にて遂候。先は安心と可存候。一時は頗る心配仕候。」と伝え、一時は症状が悪化していたことがうかがえる。もっとも、九月三〇日の書簡では、「乃木伯爵一昨日見舞候。もはや全身に患無之、唯致施術候耳骨の一部いまた骨膜不生処有之候間入院被致居候事にて、他は少も病的之処無之候。」と記しており、この頃には容体が安定していたようである。

その後の乃木は、病院内で静養を続け、一二月六日に退院した。⁽⁸⁰⁾その間の様子は、新聞に次のように報じられている。

医師よりも纔に新聞紙の一種とありしを二種三種に増され、又読書も許されたれば、大将は夫れ以来飢多たる者の食を需むる如く、年来愛読の山鹿素行の著書に親しみ往々医者よりも余り凝りてはと注意する迄に読み耽られ、忽ち読み果ては更に同著の和本洋刊を取揃へて見較べく読み進み、今は庭上の運動以外に之のみ唯一の慰楽なり。

なお乃木院長の入院は、皇族も心配するところであつたようである。入院直後には、天皇・皇后より菓子一折が下賜され、皇太子からも見舞いが

あつたという。⁽⁸¹⁾また、退院時には渡辺宮内大臣を経て「今般退院の趣聞召され尚精々休養候条」という御沙汰が下された。⁽⁸²⁾

【書簡3】 寺内正毅宛て山県有朋書簡 明治四四年二月四日

春寒峭料候処、弥御情壯欣然之至に候。老生も如例寒威と世塵を避、湘南静養罷在候故、過日御帰朝後も心外之御陳情に打過御海容可被下候。扱英国皇帝戴冠式挙行之際、陸軍側より可被差越人物に付乃木之御内話之事縷々被仰越了承至極可然、御人撰も御同意を表し候。此派遣に付而は桂首相とも示談之節、大山元帥被參候へは至極之好都合と相勧め置候へ共、強而辞退之趣に付甚遺憾に存候。其節首相より内談有之二付、奥大将は重要之職務上多忙に付、乃木被差越候方可然歟と相答置申候。旁御舎被下、御決行相成度候。老生も明後六日鳥渡帰京可致に付、其節得拜光万縷可申陳候。拜復。草々不盡
二月四日 古稀庵にて 有朋
寺内陸相閣下 内啓

〔封筒表〕 寺内陸軍大臣殿 拜復親展 ※別筆で書き込み「4/2、乃木將軍英帯冠式二派遣」あり

〔封筒裏〕 緘 有朋

〔原史料〕 国会図書館憲政資料室所蔵「寺内正毅関係文書」360-

81。

【書簡4】 寺内正毅宛て大山巖書簡 明治四四年二月五日

謹啓 陳は御書面忝拝読仕候。さて閣下にも昨年末御旅行以来御壯采御勉職被成御座候条奉慶賀候。

一桂首相一月一日拙宅に相見得今般英皇戴冠式に付、陸軍を代表者として出張致候而は如何之御話に有之候得共、御承知之通小生近來段々年を取り瘵作近過意の如くならず乍遺憾御断申上候次第に御座

候。付而は誰れを御差遣相成候而宜敷や陸軍大臣も留意中之事に付、意見有之候得は、承度との事に有之候間、乃木大将を派遣相成候而如何と申上置候次第に而、乃木大将之派遣に付而は更に異存無御座候。左様御承知被下度不取敢拜答迄、如此御座候也。敬具

二月五日 巖

陸軍大臣閣下

追而小生には例年之通一月早々より此地に滞留無事消光罷在候間、乍緊事御放念奉仰候。今暫時之所御願申上候。

〔封筒表〕 寺内陸軍大臣殿 親展拜答

〔封筒裏〕 封 駿州沼津 大山巖

〔原史料〕 国会図書館憲政資料室所蔵「寺内正毅関係文書」2333-4。

【書簡3・4】は、東伏見宮依仁親王の英国王戴冠式への渡欧に随行する陸軍側代表に、大山巖が辞退して乃木に決まる経緯がうかがえるものである。ともに、恐らく選衡の決定権者の一人であった陸軍大臣の寺内正毅へ宛てられている。

この代表者選衡は、明治四四年（一九一）一月一〇日に依仁親王が明治天皇の名代に決定したのち本格化した。⁽⁸⁵⁾翌日の新聞には、すでに陸軍の代表者は大山か乃木のいずれかである旨が報じられている。⁽⁸⁶⁾なお、海軍側の代表者は早くから東郷平八郎に決まっていた。

もつとも、山県と桂太郎首相の間では、すでに前年一〇月初頭の段階で選定が行われていた。当時、山県が桂へ送った書簡には、山県が「御内諭之趣同人御断申上候由」の大山を訪問する予定であること、もし大山が承服しない場合は「乃木之外無之」という桂の意見に同意すること、【書簡1】にも登場した参謀総長・奥保鞆は「重要之職務に従事居候付、可相成は乃木に御取極相成り度」こと、が記されている。⁽⁸⁷⁾大山の固辞は、「御内諭」つまり天皇の意向を断るほど、固いものだったことは注目される。この前提の上に、【書簡3・4】は位置づくことになる。

二月四日付の【書簡3】は、実は同日付の寺内正毅書簡に対する返書で

あった。寺内は、「大山公も御希望も無之趣」なので「乃木大将を御遣し相成候ては如何」と述べ、「同氏とも一応内談を遂候処命あらは御請可致との意向に御座候」とも伝えて、山県の意見を伺っていた。⁽⁸⁸⁾この書簡は秘書官に持参させており、小田原の古稀庵で受け取った山県は、その場で返信を認めたものと思われる。そして本書簡で山県は、前段で述べた桂との相談結果を述べて、寺内の意見に同意しているのである。

翌日付の【書簡4】は、もう一人の候補者であった大山当人が、寺内へ辞退を申し入れた書簡である。それによると、すでに年頭の一月一日に桂首相は大山を訪ねて依頼していた。このことは、桂が山県に送った同日付の書簡に、「大山元帥閣下往訪、例之一件及示談候処強而辞退被致候に付、其俣仕置き他に適當之人有之間敷哉意見承り試候処、乃木大将可然らんとするに候。若又乃木大将派遣六つヶ敷候は、奥大将に而は如何哉之意見も有之申候。〔中略〕陛下之思召も伺ひ定め可申候。」と記しており、前段で述べた経緯とも一致することから裏付けられる。⁽⁸⁹⁾なお本書簡によれば、大山が辞退したのは、「近来段々年を取り座作近過意の如くならず」という理由からであった。

乃木の派遣が正式に決定したのは、二月一四日のことであった。⁽⁹⁰⁾

【書簡5】 石黒忠憲宛て乃木希典書簡 明治四四年六月七日

拜啓 五月十二日附貴札今日英京到着、直二拝読。当兩殿下至極御健勝御安意有之度候。

東宮妃殿下御快癒奉大慶候○寿平中将帰独書状到来、大満足御蔭ニテ安心仕候。福島・大蔵・松本諸氏近況御報被下相喜申候。谷中将は終に薨去之趣き残念之至に御座候。

小生儀も一行中第一番に風薬を相用ひ、何共無申訳候得共、直二全快今後は大に注意可仕御安意奉願候。船中より衣服の御勤めに困り候處、着英後は一段と嚴敷相成苦笑之至に御座候。先は乍略御答札御報知如此候。勿々頓首

六月七日夜

希典

石黒仁兄閣下

航海中ノ二三御笑覧に供候。

朝な〜をろかみまつる東の
そらにたふとき天つ日の影
ひんかしに豊栄のぼる天つ日の
かけみち渡る大うみの原
大そらの壁たつきはみたひらけく
青海原にさ、なみもなし

〔封筒表〕大日本帝国東京牛込 男爵石黒忠憲殿 Via Siberia Tokyo
Japan. ※別筆で「乃木大将」※消印「LONDON.S.W. / JUN 8 11e
/ 12.30 PM」

〔封筒裏〕※消印「TOKIO / 256.11 / JAPAN」※「HYDE PARK
HOTEL」のロー印刷あり

〔原史料〕国会図書館憲政資料室所蔵「石黒忠憲文書」924

【書簡5】は、英国王戴冠式参列の随員となった乃木が、英国ロンドンに到着した日に、石黒忠憲へ宛て無事の到着を伝えたものである。「HYDE PARK HOTEL, KNIGHTSBRIDGE, LONDON.S.W.」と記された便箋を使用しており、当ホテルで認めたものと思われる。また消印から六月八日にロンドンを発し、同月二五日に東京へ到着したことが読み取れる。

内容を見ると、まず「谷中將は終に薨去之趣き残念之至」とあるように、第二代学習院長でもあった谷干城が、この年の五月一三日に死去していた。次に「小生儀も一行中第一番に風葉を相用ひ」とあるが、渡欧中の日誌には六月二日、ジブラルタル海峡を越える頃に風邪に罹ったが、翌日には回復したことが記録されている^⑩。

書簡の末尾には三首の和歌が添えられている。このうち「大そらの」の

歌は、乃木が五月五日にペナンから学習院初等学科へ宛てて送った絵葉書に既に記されている（表2）参照。また、本書簡と同日付で小笠原長生に送った書簡にも、同じ三首の和歌が添えられている^⑪。

本展では学習院長としての乃木にフォーカスしたため、彼の政治的位置については立ち入らなかつた。だが本節によって、山県有朋・寺内正毅といった長州閥に深い繋がりがあつたこと、奥保鞏と並び陸軍を代表する軍人であり奥は乃木に代わる学習院長の有力候補者であつたこと、石黒忠憲と親密な関係にあつたこと、少なくとも以上の点は明瞭になつた。

以上、第二章では本展の準備過程で収集・発見した史資料の紹介を行つてきた。乃木は歴代の学習院長の中でも最も有名と言つても良い人物であるため、その関係資料もまた膨大に存在する。本稿で紹介した史資料は、そのほんの一端に過ぎないが、今後の研究に資するところがあれば幸いである。

謝辞

末筆ながら、展覧会の開催及び本稿の執筆にあたっては、下記の諸機関・諸氏に御協力を賜つた。また、展覧会会期中及び事後にも新たな関連資料の寄贈や情報提供をいただき、今後の研究を新たに展開する機会をいただいた。ここに記して感謝したい。（敬称略、五〇音順）

明石元紹、飯島正弘、池田宏、宇佐川瞳、及川益夫、大山公佑、加藤司郎、岸利信、北島徹也、木村真実、桑尾光太郎、近藤順子、坂本悠紀子、田中潤、田中精一、谷昭子、丹藤真子、千葉功、筑波常遍、鶴見みや古、寺内多恵子、野呂美月、橋本尚美、長谷川怜、松田和也、松田好史、三島昌子、安光裕子、山口輝臣、米井慎一
勸修寺、公益財団法人山階鳥類研究所、宮内庁、昭和天皇記念館、乃木神社、目白警察署、山口県立大学図書館、靖國神社遊就館

注

- (1) 平成二八年度は「幕末京都の学習院」、昨年度は創立一四〇周年記念として「黎明期の学習院―神田・虎ノ門のころ―」展を開催し、幕末に端を発する学習院の歴史を明治中期まで緋いた。今年度開催した両展の概要と来館者の感想については、本誌所収の小口康仁・丹藤真子「来館者の声から探る展示の成果と課題―「宮中和歌の世界」展と「学び舎の乃木希典」展―」に詳しい。
- (2) ただし、乃木希典関連の展示を希望する来館者の声は毎年寄せられている。当館では展覧会期間中にアンケートを実施しているが、設問「今後希望する展覧会内容」の回答に「乃木希典」の名は毎回見いだされる。本展の開催はこの要望に応えるものでもあった。
- (3) 吉廣さやか「学習院所蔵の乃木希典遺書とその周辺」『学習院大学史料館紀要』第二四号 平成三〇年三月。
- (4) 平成三〇年九月発行。このミュージアム・レターと、展覧会場で配布した列品一覧は、当館HPからも閲覧可能である。
- (5) この御製については、前掲注3吉廣「遺書とその周辺」に詳しい。
- (6) 宮内省臨時帝室局編『明治天皇紀 一一巻』（吉川弘文館 平成一三年）、明治三九年八月二五日の項。（明治三八年〜明治四〇年は平成一三年発行の一一巻、明治三九年〜明治四五年は二巻に掲載。本稿ではこの二冊を使用し、以下『明治天皇紀』として、参照した記述の年月日を記す。）
- (7) 乃木の教育者・学者としての資質および学習院長となる経緯に関しては前掲注3吉廣「遺書とその周辺」に詳しい。
- (8) 宮内庁編『昭和天皇実録 第一』（東京書籍発行 二〇一五年）、明治四一年二月二七日の項。（以下、『昭和天皇実録』とし、参照した記述の年月日を記す。）
- (9) 皇族就学令により皇族が学習院に入学するよう定められたのは大正一五年のことである。同令と明治二〇年の嘉仁親王の学習院入学に關しては長佐古美奈子「明宮嘉仁親王（大正天皇）所用学習院制服を巡る一考察」（『学習院大学史料館紀要』二四号 平成三〇年三月）に詳しい。
- (10) 学習院輔仁会編纂『乃木院長記念録（以下、『記念録』）』（三光堂 大正三年）八九頁。『昭和天皇実録』明治四二年二月二七日。
- (11) 『昭和天皇実録』明治四一年四月一日。
- (12) 『昭和天皇実録』昭和五〇年九月二六日。同書によれば昭和五七年九月七日にも乃木院長の思い出を語っている。
- (13) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史 第一編（以下、『百年史』）』学習院一九八一年。
- (14) 銀製花瓶など下賜品に關しては前掲注3吉廣「遺書とその周辺」に詳しい。
- (15) 本史料に登場する指揮者のうち山内英夫は作家・里見淳の本名、伊達九郎は後に二荒伯爵家に養子に入り二荒芳徳となる。
- (16) 戸澤富寿「母校生活回想」『輔仁会雑誌』一三四号 昭和三年一〇月。戸澤富寿は学習院の講師を務め、昭和五年より教授となった。
- (17) 『記念録』五八頁。
- (18) 『記念録』六六七頁。
- (19) 八〇個の石は陸軍軍人を通じて次の地からもたらされた。朝鮮、樺太、カムチャッカ半島、千島、旅順、遼東半島、台湾、澎湖島、ペーリング島、小笠原島、八丈島（『記念録』五九〜六一頁）。
- (20) この時植えた榊は二年の後、天皇が病氣の際に枯れたために残りの一本に植え替えられている。
- (21) 『記念録』八六〇頁。
- (22) 『学習院百年史』第六章第四節。また学習院校地と寄宿舎の変遷については次の論文に詳しい。富田ゆり・丸山美季「小金井の高等科清明寮の歴史的価値について」『史料館紀要』二四号 平成三〇年三月。
- (23) 大森金五郎「院長の平生（其の一）」『記念録』一三六頁。寄宿舎の第一・二寮は青年部（高等学科学生）、第三〜五寮は中年部（中等学

- 科四（六年）、第六寮は幼年部（中等学科一（三年））であった。
- (24) 『榊壇』乃木院長室（以下、『榊壇』）学習院 昭和九年、三三三頁。
- (25) 松井安三郎談／大森金五郎記「寢室の質素」『記念録』一五三頁。
- (26) 『榊壇』三〇頁。
- (27) 『記念録』二一〇頁。
- (28) 『記念録』二二六～二四二頁。
- (29) 『記念録』二二六～二四二頁。
- (30) 『記念録』五六八頁、『榊壇』二四頁。
- (31) 目白校地を購入後、移転がおこなわれる前の一時期には、一部の学生の寄宿舎「主一館」として使われていた（『百年史』四五四頁、前掲注16戸澤「母校生活回想」四九～五一頁、前掲注29馬場七三～七四頁）。
- (32) 『記念録』五六二頁。
- (33) 『記念録』八七頁。
- (34) 『記念録』五六四頁。
- (35) 『榊壇』二七～二八頁。
- (36) 前掲の中嶋諒論文「乃木希典と小柳司氣太―学習院大学図書館蔵『中興鑑言』に附された原稿用紙をめぐって―」（本誌所収）に詳しい。
- (37) 山崎高延編『旅順開城記念展覧会写真帖』（旅順開城記念 一九二八）に、今回の展示に出品の長靴と共に「乃木將軍日露戦役中使用の長靴及び軍用靴」として掲載される。
- (38) 『記念録』三五五頁。
- (39) 「明治一四年四月七日華族督部長ヲ経テ華族一同ニ宮内卿ヨリ達セラレタル御沙汰」。その内容は「華族之儀ハ兼テ勅諭ニモ有之各自奮励文武ヲ研究スヘキハ勿論ニ候得共少壯之者ハ一層精神ヲ發揮シ可成陸海軍ニ従事候様可心掛旨猶又被仰出候條此旨相達候事」（学習院編『教学聖訓』明治三〇年版）というものであった。
- (40) 明治四二年一月二三日、訓示の概要より。『記念録』一八七頁。
- (41) 『記念録』三五五頁。
- (42) 飯島正弘氏の御教示によれば、『井上通泰文集』（島津書房 一九九五）三二五頁に、この晴雨計の由来が載る。それによると、この晴雨計は大正元年（一九一二）九月八日、和歌の師である井上通泰を訪れた際に、乃木から井上に贈られた。この時、井上が添削をした乃木の妻・静子の歌は、数日後に辞世の歌となった。
- (43) 詩人・歌人としても知られた乃木は折に触れて歌を詠んだ。本展の会場には、院長時代に乃木が学生に披露した歌を所々にパネル紹介した。そのいくつかをここに掲載しておきたい（『記念録』より）。
- ・いぶせくもたゞ茂りあふ夏草の中にも咲や撫子の花
 - （明治四〇年、片瀬遊泳場にて学生の扇面に撫子の絵とともに書いた歌）
 - ・波風をはやくやすめて學び子のさちを守れや江の島の神
 - （明治四〇年、江の島周泳の前日、波が高いのを見て詠んだ歌）
 - ・雨ふらば降れ風ふかば吹けとも云へぬ天幕かな
 - （明治四〇年、片瀬遊泳中に暴風雨となり、天幕も危険になってきた時に記した歌）
 - ・益荒雄が獲物を競ふ狩くらにねづみ計のうさき一疋
 - （明治四二年、習志野御獵場での兎狩に際して詠んだ歌）
 - ・宮つこの朝ぎよめする袖の上にはほろゝとちる山桜かな
 - （明治四五年、第五寮の茶話会で黒板に書き示した歌）
- (44) 列品番号・35、学習院初等科蔵「学習院初等学科遊泳記録」明治四〇年に貼り込まれる。詳細は前掲注3吉廣「遺書とその周辺」を参照されたい。
- (45) 今回展示の遊泳記念絵葉書（列品番号36、史料館蔵）は、裕仁親王の主管も務めた初等学科主任・石井国次旧蔵の品である。
- (46) 乃木神社社務所編『乃木希典全集 下』（国書刊行会、一九九四年）所収。
- (47) 『記念録』九一～九三頁。
- (48) 「昭和」（昭和天皇聖徳記念財団 二〇〇六年）掲載の展覧会案内「学

習院制服「ズボンに継ぎ」の記事を参考にした。

(49) 『記念録』一〇六六〜一〇七二頁

(50) 『中央新聞』明治三十九年一月十五日二面。

(51) 原田稔甫「乃木坂と新年」(『歴史地理』八巻二号、明治三十九年二月)。

(52) 『麹町区史』(東京市麹町区、一九三五年)追録二四〜二六頁。

(53) 『女子学習院五〇年史』(女子学習院、一九三五年)の「附表類」のうち「旧職員名簿」(四五頁)によると、原田は明治三十二年(一八九九)

三月から明治四〇年一二月まで、学習院女学部の教授であった。

(54) 下田と共に辞職した原田は「下田門下の四天王」の一人であり、彼

ら以外にも多数の辞職者が出たという(『学習院第二の破綻』『東京朝日新聞』一九〇八年一月一日四四四頁)。下田の辞職については、大濱徹也『乃木希典』(講談社学術文庫、二〇一〇年〔原書

一九六七年〕二一八〜二二三頁)も参照。

(55) 『東京新名所』(三)『東京朝日新聞』一九〇八年二月三日六面)。

(56) 「乃木坂の命名」(横山健堂編『峰間鹿水伝』峰間氏還暦祝賀会記念刊行会、一九三三年)二五六〜七頁。引用箇所は、峰間の口述を小

泉竹雨庵が補修した自叙伝を掲載した箇所。

(57) 「乃木大将の葬儀は本日」(『万朝報』一九二二年九月一八日)。

(58) 「乃木坂」の命名を伝える新聞記事は、九月一九日の『中央新聞』・

『二六新報』・『読売新聞』、九月二〇日の『中央新聞』・『東京毎夕新

聞』・『都新聞』に確認している。

(59) 「乃木邸の栗」(『東京朝日新聞』一九二二年一〇月三日五面)に、

昨日より改称したと記されている。ただし、この青山一丁目六本

木間の路面電車は同年六月七日に開業していたが、乃木坂の名称と

なることはすでに路線開業前の新聞記事でも報じられている(『乃

木坂停留所』『読売新聞』一九二二年五月三〇日三三三頁)。

(60) この回想録は、一九四〇年の紀元二千六百年を記念する事業として

企画されながら戦争の影響で未刊に終わったものである。学習院

アーカイブズに稿本が所蔵されており、以下「第二篇 回想録(二)

下」から引用する。

(61) 『学習院大学史料館 ミュージアム・レター』第三八号(二〇一八年

九月)八頁に掲載した「現存する乃木院長時代の建造物マップ」を

参照。

(62) 三島弥彦の学習院における活動については、尚友倶楽部内藤一成・

長谷川怜編『日本初のオリンピック代表選手 三島弥彦』(芙蓉書

房出版、二〇一九年)を参照。

(63) 長与善郎「乃木將軍と学習院」(『特集知性』二、河出書房、

一九五七年一月)二〇一頁。

(64) 徳川義親「思ひ出すまゝに」(『学習院物語』所収)。

(65) 『桜友会報』六七号、一九四三年三月。この座談会は「学習院物語」

に「第一篇 華族会館座談会記録」として収録される予定だったも

のである。

(66) 原語はschöne arbeit(美しい作品ですね)か。

(67) 「乃木大将渡欧日誌」(乃木神社社務所編『乃木希典全集下』国書

刊行会、一九九四年)四〇四〜六頁。

(68) 本節は、坂上康博『昭和天皇とスポーツ』(吉川弘文館、二〇一六年)

の「武道との出会いと遊び 学習院初等科時代」の章を参照した。

(69) 「運動競技に関する批評(其の一)」(『記念録』二七八〜二八〇頁)。

(70) 「運動の服装について」(『記念録』二六六〜二六八頁)。

(71) 「各道場の寒稽古(二)」(『東京朝日新聞』一九二二年一月二〇日六

面)。

(72) 「末弘嬢退学問題と「時事」の立場」(『時事新報』一九〇八年三月

二九日)。

(73) 伊藤幸司ほか編『寺内正毅と帝国日本』(勉誠出版、二〇一五年)に、

「桜圃寺内文庫の乃木希典書簡」として、書簡一〇通および和歌の

翻刻と解説が掲載されている(一四五〜一六五頁)。

(74) 第八七回学習院大学史料館講座「思ふどち語りつくしてー乃木希

典と寺内正毅」、於学習院創立百周年記念会館正堂、平成三〇年

- (二〇一八) 一〇月六日。
- (75) 山県有朋宛て田中光頭書簡(明治三十九年九月六日)には、「乃木大将之件、種々御配慮奉懸候末都合能相運大に安心仕候」とある(『山県有朋関係文書』尚友叢書一三一二(尚友俱樂部・山川出版社、二〇〇六年)三五三頁)。また寺内も山県へ、八月二二日付・二八日付の両書簡で、乃木の宮内省御用掛就任が進展していることを報告している(同前、三八二―三三頁)。
- (76) 山県有朋宛て平田東助書簡、大正元年一〇月六日(『山県有朋関係文書』尚友叢書一三―三(尚友俱樂部・山川出版社、二〇〇七年)一―三三頁)。実際には、奥でも東郷平八郎でも小笠原長生でもなく、一月二五日に大迫尚敏が第一代院長に就任している。大迫は日露戦争時には、第七師団長として第三軍司令官の乃木の下にあった。
- (77) 「乃木大将入院」(『東京朝日新聞』一九一〇年八月一日二面)。
- (78) 本書簡には石黒が「一昨日」の八月四日に乃木を訪ねたとあるが、その日に山県に宛てた書簡において、石黒は「乃木伯片瀨に学習院生徒と共に水泳中一昨日より耳病を発候由にて帰京と之事昨夜承り大に心配、今朝未明に相尋ね候処、左程之事にも無之候間、今朝平井に一托耳医選其外依頼仕置候。御心配なき様一寸申上置候。」と述べている(『山県有朋関係文書』尚友叢書一三―一(尚友俱樂部・山川出版社、二〇〇四年)七一頁)。
- (79) 寺内正毅関係文書研究会編『寺内正毅関係文書 一』(東京大学出版会、二〇一九年)一九五―一九八頁。
- (80) 「乃木院長退院」(『東京朝日新聞』一九一〇年二月八日二面)。
- (81) 「病院内の乃木大将」(『東京朝日新聞』一九一〇年一〇月八日五面)。
- (82) 『明治天皇紀 第十二』(吉川弘文館、一九七五年)明治四三年八月一〇日条、四五〇頁。
- (83) 「乃木大将に御見舞」(『東京朝日新聞』一九一〇年八月一五日二面)。
- (84) 「乃木院長に御沙汰」(『東京朝日新聞』一九一〇年二月一八日二面)。
- (85) 『官報』一九一二年一月一日二頁。
- (86) 「随行員の詮衡」(『読売新聞』一九一二年一月二日二面)。
- (87) 桂太郎宛て山県有朋書簡、明治四三年一〇月二日(千葉功編『桂太郎関係文書』東京大学出版会、二〇一〇年、四三六頁)。
- (88) 山県有朋宛て寺内正毅書簡、明治四四年二月四日(前掲『山県有朋関係文書』尚友叢書一三一二、三九四頁)。
- (89) 山県有朋宛て桂太郎書簡、明治四四年一月一日(千葉功編『桂太郎發書翰集』東京大学出版会、二〇一一年、四一九頁)。
- (90) 『官報』一九一二年二月一日、四―五頁。
- (91) 前掲『乃木希典全集 下』三一八―三三二頁。
- (92) 「渡欧中小笠原子爵に送れる書簡」(学習院輔仁会編『乃木院長記念写真帖』審美書院、一九一三年)七七頁。

表1 乃木希典院長と学習院年表

凡例：乃木の個人的な事項については冒頭に「乃木：」を、院長としての事項については冒頭に「院長：」を付した。

年	月日	乃木院長および学習院の出来事
明治三十九年 (一九〇六)	4月11日	華族女学校が学習院と合併して女学部となり、学習院学制・学習院規則が制定される(4月始期制、高等学科の廃止が決定)
	4月23日	北豊島郡高田村の学習院敷地内に校舎建築事務所を設置(以後新築に向けた工事が行われる)
	8月25日	乃木：宮内省御用掛に任命され、学習院の教育に参加する
	8月27日	乃木：学習院へ初登院
	12月1日	乃木：職員一同へ挨拶。以後、登院して事務を視る
明治四〇年 (一九〇七)	12月21日	乃木：学習院の教育方針等に関する上書を提出する(「学習院教育は特に品性の陶冶を以て第一要義と為さんとするに在り」)。とくに高等学科の存続を意見した結果、翌月には高等学科の存続が決定
	1月31日	乃木：第10代学習院院長を兼任する(軍事参議官 陸軍大将 正三位 勲一等 功一級 男爵)。この時、乃木は軍職を辞して院長の職に専念しようとしたが、明治天皇の意向で現役軍人のまま学習院長となる
	3月3日	輔仁会春季大会を開催
	4月1日	職員分掌服務規程を廃し、事務分掌規程を定める 中等学科1・2年に武課の一部として剣道を練習させる
	4月5日	隅田川上流にて第12回端艇競漕会を開催
	4月11日	学年始業式
	4月16日	乃木：フランス共和国政府よりレジオン・ドヌール勲章を受章
	6月29日	院長：片瀬に出張し游泳場を視察
	7月4日	院長：職員に向けて旅順攻撃に関し講話を行う
	7月12日	卒業証書授与式
	7月21日	学生166名、相州片瀬にて3週間の游泳と狭窄射撃を行う。初めて幕舎を片瀬川右岸に設け、青年学生の一部を収容
	9月21日	乃木：日露戦争の勲功により伯爵に列せられる
	10月5日	学習院教職員、上野精養軒にて秋季懇親会を兼ねて乃木院長陞爵の祝賀会を開催
	10月9日	院長：宮中へ参内し、迪宮裕仁親王の学習院入学に関して、前日に皇太子嘉仁親王へ啓上した学友・級友・教師等を精選すべき旨を天皇へ報告
	10月16日	北豊島郡高田村の校舎新築敷地内に第11回陸上運動会を開催
11月15日	中等学科4年級～高等学科の学生、陸軍特別大演習見学のため茨城県結城に4泊の行軍演習へ出発(従来の行軍演習の代替として以後継続される)	
12月21日	早朝に柔剣道の寒稽古を行う(～1月7日。1月1～3日は休止)	
明治四一年 (一九〇八)	1月8日	新年始業式
	2月27日	東宮職と乃木院長の間で検討されていた迪宮裕仁親王の学習院入学が決定
	2月29日	剣道大会を開催
	3月8日	輔仁会春季大会を開催
	4月7日	隅田川上流にて第13回端艇練習競漕会を開催
	4月11日	学年始業式。迪宮裕仁親王が初等学科1年級に入学
	5月29日	宮内省令により、寄宿舎の設置および全寮制の採用が定まる
	6月2日	乃木：旅順小案子山東麓の露国戦死者建碑除幕式へ参列のため満洲へ出張(6月19日帰京)
	7月9日	卒業証書授与式
	7月12日	学生171名、相州片瀬で3週間の游泳と狭窄射撃を行う。院長：艦船「桜丸」を寄付。
	8月5日	本院が目白校地(北豊島郡高田村)に移り、中等学科・高等学科が四谷校地から移転(初等学科・女学部は旧来のまま)
	9月10日	寄宿舎入寮式。中等学科・高等学科の学生が入寮、院長は寄宿舎総寮部に寓居
	9月11日	第2学期始業式
	10月11日	輔仁会春季大会を開催
10月18日	開院記念式の後第12回陸上運動会を開催(皇太子嘉仁親王の行啓)	
10月31日	学習院事務分掌規程を改正し、あわせて馬術科規則・柔道科規則・剣道科規則・転地游泳演習規程および部長勤務学生組長概則・部長職務心得・勤務学生職務心得中を改正。これにより、中等学科生に剣道・柔道を武課正課として課す	
11月10日	中等学科4年級～高等学科の学生、陸軍特別大演習見学と修学のため奈良・京都・神戸地方に8泊の旅行へ出発	
12月21日	寄宿舎炊事規程を制定	
(明治四二年 一九〇九)	1月8日	新年始業式
	1月11日	夜間に柔剣道の寒稽古を行う(～31日。日曜祭日は早朝に施行)
	4月5日	隅田川上流にて第15回端艇競漕会を開催(皇太子嘉仁親王の行啓)
	4月28日	乃木：チリ共和国政府から金製有功章を受章
	5月2日	輔仁会春季大会を開催

明治四二年 (一九〇九)	5月8日	華族会館において学習院同志会を開催、院長・女学部長が講演
	5月	乃木：総寮部において『中朝事実』を手写
	7月14日	明治天皇が学習院に臨幸。選抜学生の講義を聴き、学生の製作品・武課演習・新築校舎の模様などを巡覧
	7月16日	卒業証書授与式。皇太子嘉仁親王が行啓し、学生の製作品・武課の諸技、および新築の寄宿舎を巡覧
	7月21日	学生169名、相州片瀬にて3週間の游泳と狭窄射撃を行う。院長：槽船「満珠丸」を寄付
	9月11日	始業式
	10月12日	第13回陸上運動会を開催（皇太子嘉仁親王の行啓）
	10月18日	開院記念式の後に輔仁会大会を開催
	11月4日	中等学科4年級～高等学科の学生、陸軍特別大演習見学のため栃木県那須野地方に5泊の行軍演習へ出発
	11月21日	乃木：11月28日の旅順白玉山表忠塔除幕式参列のため出発（12月6日帰京）。夫人同伴で旅順を訪い、勝典・保典の跡を弔う
	12月20日	院長：午後放課後、寮生一同を柔剣道場に集め訓示を与える
明治四三年 (一九一〇)	1月8日	新年始業式
	1月10日	夜間に柔剣道の寒稽古を行う（～1月30日。日曜祭日は早朝に施行）
	1月17日	皇太子嘉仁親王が学習院に行啓し、授業および寄宿舎を巡覧
	3月	前年の天皇臨幸を記念した櫓をもって、院内の富士見台に御櫓壇を造営
	4月2日	卒業証書授与式（皇太子嘉仁親王の行啓）
	4月5日	隅田川上流にて第16回端艇競漕会を開催
	4月11日	第1学期始業式（この年より4月始まりとなる）
	5月9日	輔仁会春季大会を開催
	5月11日	院長：学生を小講堂に集めて富国強兵に関して講話
	7月21日	学生162名、相州片瀬にて3週間の游泳
	8月2日	院長：游泳場において耳疾に罹る。のち中耳炎に变じ、赤十字病院に入院（12月8日退院）
	9月12日	第2学期始業式
	10月18日	開院記念式の後に輔仁会秋季大会を開催
	10月24日	第14回秋季陸上運動会を開催（皇太子嘉仁親王の行啓）
10月27日	中等学科第4年級～高等科の学生、陸軍特別大演習見学のため栃木県宇都宮・今市付近へ4泊の行軍および野外演習へ出発	
12月20日	院長：学生に対して病中見舞いを受けたことについて挨拶	
明治四四年 (一九一〇)	1月9日	新年始業式
	1月10日	夜間に柔剣道の寒稽古を行う（～1月30日。日曜祭日は早朝に施行）
	1月21日	築地精養軒にて、本院職員春季親睦会を兼ね、院長の全快祝賀会開催
	3月10日	院長：陸軍記念日につき奉天会戦について講話
	3月31日	上野精養軒にて職員懇親会を兼ね院長の渡欧送別会を開催
	4月2日	卒業証書授与式
	4月5日	隅田川上流にて第17回端艇競漕会を開催
	4月11日	新学年始業式。式後、院長より職員及び学生に対し告別がある
	4月12日	東伏見宮夫妻の英国王戴冠式参列に東郷平八郎とともに随行し、英国へ向け横浜を出航（8月28日帰京） 6月7日イギリス、7月2日フランス、7月9日ドイツ、7月17日ルーマニア、7月21日トルコの後、ブルガリア、セルビア、ハンガリーを歴訪し、8月16日モスクワからシベリア鉄道を經由し、8月28日敦賀上陸
	4月14日	輔仁会春季大会を開催
	7月21日	学生155名、相州片瀬にて3週間の游泳
	9月11日	第2学期始業式
	9月13日	院長：学生に対して英国視察談を講話
	9月23日	院長帰朝の歓迎を兼ねて全寮茶話会を開催
	10月18日	開院記念式の後に輔仁会大会を開催
	10月22日	第15回秋季陸上運動会を開催
	10月25日	乃木：ルーマニア皇帝から勲章を受章
10月26日	中等学科第4年級～高等科の学生、青梅地方へ5泊の行軍演習へ出発	
明治四五年 (一九一〇)	1月8日	新年始業式
	1月10日	夜間に柔剣道の寒稽古を行う（～1月30日。日曜祭日は早朝に施行）
	2月11日	学習院女子部の本館が全焼
	3月12日	職員制服着用の場合における敬礼規程を制定
	3月14日	学習院学制を改正（中等学科6年制を5年制に改める）
	4月2日	卒業証書授与式
	4月5日	隅田川上流にて第18回端艇競漕大会を開催（皇太子嘉仁親王の行啓）
4月8日	第1学期始業式	

（明治四五年）	4月	初等学科6年に木剣体操を課し、中等学科1・2年に武課正課として木銃教練を課す
	5月10日	乃木：英国王からロイヤル・ヴィクトリア勲章を受章（6月5日にはバス勲章を受章）
	5月12日	多摩川に輔仁会の遠足を行い乃木院長も同行する
	6月7日	乃木：「奉台命書」（『中朝事実』の一部）を筆す
	7月21日	学生170名游泳練習のため沼津へ出発するところ、天皇病気につき中止
	7月31日	明治天皇、午前0時43分に崩御
大正元年（一九一二年）	9月1日	乃木：大葬参列のため来日する英国皇族コンノート公の接伴員を仰せつけられる
	9月10日	乃木：迪宮裕仁親王に『中朝事実』を献上
	9月13日	大葬儀が行われる。学生一同及び監督職員青山御所前に整列して奉送する 乃木：午後8時の霊輜発車の号砲とほぼ同時に、自邸において妻静子とともに自刃
	9月16日	学習院教授・白鳥庫吉、学習院長事務取扱に任命される
	9月17日	高等学科・中等学科の学生が総寮部の院長居室に真影を掲げ、供物を捧げ、午前8時より翌朝5時30分まで交代で通夜を執行
	9月18日	乃木希典夫妻の葬儀が乃木邸において執行される。職員学生一同見送りをし、白鳥院長事務取扱・職員総代・男女学生各総代・輔仁会副会長が弔辞を捧呈
	9月19日	第2学期始業式
	9月20日	乃木家遺族より小笠原長生に乃木自筆の批点が施された『中朝事実』・『中興鑑言』等が授けられる
	9月22日	乃木院長十日祭が執行され、職員学生が青山墓所に参拝する
	10月12日	乃木院長三十日祭を乃木邸内において執行
	11月25日	大迫尚敏が第11代学習院長に就任
	12月6日	乃木の蔵書が学習院に寄贈される

※主要参考文献（年代順） 学習院輔仁会編『乃木院長記念録』（三光堂、1914年）／『明治天皇紀』第11・12（宮内庁、吉川弘文館、1975年）／『学習院百年史』第1編（学習院、1981年）／大濱徹也『乃木希典』（河出書房新社、1988年）／乃木神社社務所編『乃木希典全集』上・中・下・補遺（国書刊行会、1994年）／『昭和天皇実録』第1（宮内庁、東京書籍、2015年）

表2 渡欧の洋上より乃木院長差出の絵葉書一覧

※学習院アーカイブズ蔵

	絵葉書情報	発（消印）	着（消印）	宛名	翻刻
1	Castle of Himeji. Nippon Yusen Kaisha S.S. "KAMO MARU."	Singapore 1911年4月30日	四谷 5月17日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	宮殿下御一行並ニ希典義も海路平安、今日シンガホール着、御休息有之度候。御報迄。匆々不尽
2	Singapore. The Sea View Hotel—Front Building, facing the Sea.	Singapore 1911年5月3日	四谷 5月17日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	殿下御初 海路平安 四月三十日着
3	Singapore. The Sea View Hotel—Tennis- Court.	Singapore 1911年5月3日	四谷（5月）17日	大日本東京四谷 学習院初等 御中	今后三時放錨 ペナンニ向フ
4	Penang Date Trees, Penang.	Penang 1911年5月5日 Singapore 1911年5月8日	四谷 5月20日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	両殿下御始一行健康、海上安泰波ヲ見ス典 大そらの壁たつきはみ たひらけく 青海 原にさゝなみもなし
5	Water Gush at Western Road, Penang.	Penang 1911年5月5日 Singapore 1911年5月8日	四谷 5月21日	大日本東京 四谷 学習院初等科 御中	今到着。午前中遊覧午後馬関出發後好雨 ヲ喜候 五月四日夜 希典 ペナン港
6	Kandy Temple of the Holy Tooth.	Colombo 1911年5月11日	四谷 6月2日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	昨日着港。今日此地ヲ見物。明日出發西 航ス。此後ハ暫ク御報ヲナシ得ス、マル セールヨリ差出ス郵便ハ此端書同時此着 スベク候。
7	Jaffna Fort. Ceylon. "SKEEN-PHOTO"	Colombo 1911年5月11日	四谷 6月2日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	殿下御始一行至極健康。当地ハ充分冷氣 八十六七度位。殿下其他諸生ノ勇健勉学 ヲ祈ル。
8	The Bund, Kandy. "SKEEN-PHOTO"	Colombo 1911年5月11日	四谷 6月2日	大日本東京四谷 学習院初等科 御中	秋冬春夏禪之尺紅白紫黄花四時無地獄今 無極楽仏書万卷又何痴 谷口中佐次韻 險路羊腸峯勢危 追思釈氏入山時山僧不識 人間事寒寺祝経群小痴（カンジー）ナリ

表3 「故乃木院長二関スル事項」新聞記事スクラップブック内容目次

凡例

- ・年月日欄および「掲載紙」欄は、原則として本スクラップブックに記載のママで記した。
- ・「掲載紙」欄は本スクラップブックでは略称となっているため、正式紙名を補って記した。但し、該当する紙名が複数ある場合、〔 〕内に「or」で候補を示した（初出時のみとし、2回目以降は〔 〕内を省略した）。その際には、「全国新聞一覧表」（『新聞総覧』日本電報通信社、1911・1913年）を参考にした。
- ・「記事名」欄には小見出しも採取した。また、見出しが無い場合は〔 〕で補い、署名および談話者などは《 》内に記した。
- ・「備考」欄には、該当記事のシリーズタイトルや、記事内容を補う情報などを簡潔に記した。
- ・本表の作成は西山直志が行った。作成に当たっては、大山公佑、木村真美、丹藤真子、野呂美月、各氏の協力を得た。

①朝日新聞切抜・故乃木院長に関する事項

番	年	月	日	掲載紙	記事名	備考
1	大正1年	9	14	東京朝日新聞	●乃木大将自殺に就て ▽日本の風教道徳の一案 《黄洋》	
2	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●自殺の動機 ▽暁の上で死ぬることを▽いかにも口惜しく思ふ《文学博士 井上哲次郎氏談》 ▲死に関する用意 ▲旅順戦と自責 ▲先帝の知遇 ▲將軍の人生観 ▲文学の嗜み	
3	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●乃木大将を弔して偽れる者駭れる者に与ふる書 《戸谷白羽》	「乃木大将殉死に関する寄書」欄
4	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●自殺の動機 ▽暁の上で死ぬることを▽いかにも口惜しく思ふ《文学博士 井上哲次郎氏談》 ▲死に関する用意 ▲旅順戦と自責 ▲先帝の知遇 ▲將軍の人生観 ▲文学の嗜み	
5	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●辞世二首天覧に入る ▽乃木大将及び夫人が▽殉死の際に詠る和歌 ▲自殺の現場 ▲正装の夫妻 ▲遺書及辞世	
6	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●三皇子の御驚き「何故の切腹」？ ▲平民的に御教訓 ▲切腹の趣言上 ▲双の御目に御涙 ▲最後の御教訓	
7	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●懐しいお祖父様 ▽初孫の様な華胄子弟《某昵近者談》 ▲長い鎌で草刈 ▲児童と会食 ▲一緒に遊戯 ▲優しいお強請	
8	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●日本武士の典型 ▽揮毫にも現れたる人格《武部官 恩地轍氏談》	
9	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●英独両親王の悼詞	
10	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●ルボン中将の哀悼	
11	大正1年	9	15	東京朝日新聞	●殯官祭の乃木大将 ▽夫人も同伴▽平静なる顔色	
12	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●幼児の教育 ▽豪胆格は父の遺伝 ▲巖父の遺伝 ▲大将の幼時 ▲大将の読書 ▲高風の一斑	
13	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●大将夫人静子 ▽馬場徹氏談 ▲全然家庭的婦人 ▲西那須野で百姓 ▲大将の心事を解す ▲善通寺の一話	
14	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●陣羽織の寄進 ▽野木神社社司の談	
15	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●乃木大将の殉死 ▲時弊に対する清涼剤（一）《理学博士菊池大龍氏談》 ▲現代唯一の模範（二）《理学博士某教育家談》 ▲將軍の苦痛（三）《法学博士高田早苗氏談》 ▲特別の例（四）《法学博士浮田和民氏談》	
16	大正1年	9	16	東京朝日新聞	教育的影響 ▽乃木夫人の殉死に対する▽三女流教育家の感想 ▲矢島女史 ▲三輪田女史 ▲嘉悦女史	
17	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●忘れぬ訓戒 ▽華族少年の肝に銘じたる ▲巧なる実物教訓 ▲心も体も強かれ ▲大将の頭を敲かせる ▲勅語集の講義	
18	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●幽崇の感情 ▽姉崎文学博士談 ▲乃木大将の殉死に就て	
19	大正1年	9	16	東京朝日新聞	●凡人の死を以て論ずべからず（帝大生寄書）	「寄書」欄
20	大正1年	9	17	東京朝日新聞	●満堂の生徒泣く ▽学習院の論告▽数名の卒倒者 ▲小笠原大佐の暗涙 ▲雨中に後姿を凝視する ▲感極まりて卒倒 ▲全院生徒の通夜	
21	大正1年	9	17	東京朝日新聞	●乃木大将の和歌	「春（学習院学生の浜御殿参観の際）・「夏」の2首
22	大正1年	9	17	東京朝日新聞	▲乃木夫人の壮烈 ▽石黒男爵談 ▲検案の模様 ▲屍体尚ほ暖か ▲大将は長剣 ▲夫人は短刀	写真あり「乃木將軍遺書石黒男爵宛」
23	大正1年	9	17	東京朝日新聞	●遺言状の変造 ▽咄々寺内長谷川の細工 ▲乃木邸の保存方法 ▲小笠原大佐の弁明 ▲寺内長谷川の指図	
24	大正1年	9	18	東京朝日新聞	●中朝事実に就いて ▽乃木大将の経典 《文学博士井上哲次郎氏談》	
25	大正1年	9	18	東京朝日新聞	●那須原頭の乃木大将 ▽洪紙袋に国旗	
26	大正1年	9	18	東京朝日新聞	●武士道より見たる乃木將軍の自刃《農学博士法学博士新渡戸稲造氏談》 ▲武士道とは如何なる者か ▲最も偉大なる人物 ▲世界的見地より見たる自殺 ▲日本道徳の積極的發現 ▲將軍の心事を了解せよ ▲暗涙に咽んで揮毫の和歌 ▲乃木大将の死によりて与へられたる教訓	写真あり「乃木大将より東宮殿下に捧呈せる「中朝事実」附録の標題」
27	大正1年	9	18	東京朝日新聞	●思想変遷が三度 ▽某將軍談	
28	大正1年	9	18	東京朝日新聞	●將軍は日本人の典型 ▽山口少将の談	
29	大正1年	9	19	東京朝日新聞	●大将の遺書蔵書 ▽日比谷図書館に陳列の企	
30	大正1年	9	19	東京朝日新聞	●正午迄に十万人 ▽乃木大将の葬儀▽葬列沿道の群集 ▲電車の大混乱 ▲屋根や柱に鈴生	
31	大正1年	9	19	東京朝日新聞	●十重廿重の人垣 ▽学習院生徒の送葬▽女子供の押ッくら	写真あり（葬送行列）
32	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●大将邸宅の群集 ▽昨日より一部縦覧	
33	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●嗚呼乃木大将《十四日 京城 五老峯》	
34	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●市民墓前に泣く ▽乃木大将夫妻の▽墓に参拝者多し▽朝来引も切らず ▲徹宵跪坐黙禱 ▲参拝者の涙 ▲無礼な商人	

「学び舎の乃木希典」展覧書

35	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●春よりも秋こそ ▽吉野山に於ける乃木將軍《十七師団長 仙波中將談》	
36	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●武士の好典型（四）=乃木將軍の逸歴= 眞真の武士 △礼節を尚ぶ △松陰崇拜	
37	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●殉死と小学生 ▽小学校長の態度	
38	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●市長失言を謝す（名古屋）	
39	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●乃木大将哀悼（同上）《十九日奉天特派員發》	「本社滿洲特電」欄
40	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●支那人大將を慕ふ ●乃木大将追悼會	
41	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●長府の遙拜式 ▽参列者感慨無量	
42	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●乃木大将の感化 ▽質素なる長府の風	
43	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●乃木大将極秘の遺書 ▽日本の軍務に就いて▽田中少將に与ふ	
44	大正1年	9	20	東京朝日新聞	●聯隊旗の思ひ出 ▽乃木軍と賊軍の戦	
45	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●乃木大将の面目（上）《桃水》	
46	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●彼岸入の青山 ▽轎車焼却は虚報▽乃木家墓の香煙	
47	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●責任の自覚 ▽福原文部次官談	
48	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●乃木大将の養子論 ▽井上頼因氏談	
49	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●卅五年前よりの心事 ▽乃木大将が竹馬の▽友に与へたる遺書 桂弥一宛ての遺書全文あり	
50	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●米將卒の感嘆（長崎）	
51	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●土国陸軍の表冊	「土耳其陸軍大臣マザン、パシヤ氏」
52	大正1年	9	21	東京朝日新聞	●乃木大将を悼み奉りてよめる《生野源太郎（投）》	
53	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●乃木將軍の面目（下）《桃水》	
54	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●独皇弟の殉死観 ▽日本人の固有道徳▽民心に与ふる影響	
55	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●『將軍と高嶋氏』に就て 聯隊旗奪取は村田三介の隊	
56	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●乃木家と墓地 ▲十日祭 ▲御下賜品分配 ▲数百通の謝状 ▲線香は危険	
57	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●乃木大将の追悼會	千駄ヶ谷の加地和助氏
58	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●谷本博士不評判 ▽神戸高商生の憤激	
59	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●教材としての乃木將軍 ▽文部当局者の方針	
60	大正1年	9	22	東京朝日新聞	●墓前に灑ぐ夜の雨 ▽虫声哀歌を奏する▽乃木卿夫妻の墓畔	
61	大正1年	9	23	東京朝日新聞	●幼年時代の乃木將軍 ▽質素を極めし生活 ▲大将の絶家主義 ▲日下窪に生る ▲国語の道中 ▲自ら米を搗く ▲幼名は無人 ▲集童館の日課 ▲熊野先生の保証 ▲紐で髪を結ぶ ▲乃木家の食置 ▲玉木家の食客 ▲畑で学問	
62	大正1年	9	23	東京朝日新聞	●玄関社の乃木邸 ▽無礼なる軍人の態度	
63	大正1年	9	23	東京朝日新聞	●乃木大将十日祭 ▽燈籠鳥居等の寄贈申込	
64	大正1年	9	23	東京朝日新聞	●乃木邸閉鎖す	
65	大正1年	9	23	東京朝日新聞	乃木大将の出生地	六本木周辺の略地図あり
66	大正1年	9	23	東京朝日新聞	●西国御名代宮嘆賞 ▽帰国後奏上せん	
67	大正1年	9	24	東京朝日新聞	▲乃木大将夫妻の警咳に接したる方々に申す（理学博士鶴田賢次） ▲六名士の見（本郷一読者） ▲愛馬と厩（新坂町一女子） ▲楠公に次ぐの軍神たり（安政老人） ▲軍隊教育に害あり（土田清臣乃） ▲遺書の変造（不求名子） ▲將軍の感激（不求名子） ▲嗚呼忠臣乃木將軍（大塩学道）	「乃木大将殉死に関する寄書」欄
68	大正1年	9	24	東京朝日新聞	●烈風猛雨 ▽家屋倒潰電線切断▽東京市中の大被害	
69	大正1年	9	24	東京朝日新聞	▲宮城内の被害 ▽自動車修理所倒潰す	
70	大正1年	9	24	東京朝日新聞	▲葬場殿の破損 ▽一時拝観を停止す	
71	大正1年	9	24	東京朝日新聞	▲乃木將軍の墓 ▽贈花乱れて哀感深し	
72	大正1年	9	24	東京朝日新聞	●乃木將軍と魔病院 ▽魔兵等の哀傷悲痛	
73	大正1年	9	24	東京朝日新聞	●乃木將軍に関する軍旗事件の真相 ▽陸軍の功に非ず▽警察署長の発見《発見者たる 大塚義彦氏談》 ▲相違せる記録 ▲天井裏に発見 ▲功を陸軍に譲る ▲熟知せる川村大将 ▲寺内大将の冷淡	
74	大正1年	9	24	東京朝日新聞	●戦友乃木大将 ▽某陸軍大将談 ▲ス將軍慚づ ▲死処に葬れ ▲常に臨戦の覚悟 ▲素朴な凱旋將軍	
75	大正1年	9	24	東京朝日新聞	周防艦上の扁額 ▽乃木大将記念の墨痕	写真あり
76	大正1年	9	25	東京朝日新聞	曲学阿世の徒を製造する国《高島米峰》	「乃木大将殉死に関する寄書」欄
77	大正1年	9	25	東京朝日新聞	●乃木大将と素行會 ▽明日追悼記念祭舉行	
78	大正1年	9	26	東京朝日新聞	●我皇帝に告げん ▽旅順を見物せし▽ポ殿下の車中語	
79	大正1年	9	26	東京朝日新聞	奢侈戒飭は目下の最急務《古志生 草生政恒稿》	「乃木大将殉死に関する寄書」欄
80	大正1年	9	26	東京朝日新聞	素行先生墓前の乃木將軍	写真あり（牛込弁天町宗參寺の素行先生墓前で祭文を読む乃木）
81	大正1年	9	26	東京朝日新聞	●乃木將軍富嶽の詩 ▽三典歌の奇因縁美しき一個詩話 ▲將軍殉死の其朝 ▲七年以前の追憶 ▲支那学者の激賞	
82	大正1年	9	26	東京朝日新聞	●素行霊前の講演 ▽山鹿素行の例祭と▽乃木大将の追悼會 ▲会衆約二百名 ▲三名士の講演 ▲時期を得た死	
83	大正1年	9	28	東京朝日新聞	●乃木大将と英人 ▽英政府の弔辞	
84	大正1年	9	29	東京朝日新聞	▲乃木將軍教育談	「演芸」欄
85	大正1年	9	30	東京朝日新聞	乃木將軍歌《五江 小川通義》	「日日詞壇」欄、漢詩

86	大正1年	9	30	東京朝日新聞	乃木大将夫妻自尽当日の記念撮影	写真3枚あり
87	大正1年	9	29	東京朝日新聞	●乃木大将追悼会(仙台)	来月2日櫻ヶ岡公園にて
88	大正1年	9	30	東京朝日新聞	脱帽の乃木大将(自尽当日の撮影)	写真あり
89	大正1年	10	1	東京朝日新聞	●乃木大将の希望実現 ▽家は断絶に決し▽邸宅は市に寄附	
90	大正1年	10	1	東京朝日新聞	●乃木將軍追悼会	丁未俱樂部にて
91	大正1年	10	2	東京朝日新聞	秋のそゞろ歩き 雨の百花園	「乃木大将自筆楽焼」ほかの画あり
92	大正1年	10	2	東京朝日新聞	●追悼演説会	丁未俱樂部にて
93	大正1年	10	3	東京朝日新聞	●乃木邸の栗の実 ▽新名乃木坂停留場	
94	大正1年	10	4	東京朝日新聞	●乃木神社の建設 ▽乃木大将追悼会の決議	国学院大学講堂での追悼会
95	大正1年	10	7	東京朝日新聞	●乃木將軍追悼会(仙台)	東北修養会主催
96	大正1年	10	7	東京朝日新聞	●乃木大将書籍処分 ▽墓地は兩三日中に竣成	
97	大正1年	10	8	東京朝日新聞	●遊就館の乃木室	
98	大正1年	10	11	東京朝日新聞	●乃木將軍追悼の妨害 ▽町長憤慨辞表を出す	菖町にて
99	大正1年	10	13	東京朝日新聞	●血痕附着の遺物 ▽乃木大将の常用品	写真あり
100	大正1年	10	13	東京朝日新聞	●学習院学制改革	
101	大正1年	10	13	東京朝日新聞	●皇后宮御奉送 ●両殿下乃木邸御成	山階宮武彦王芳磨王兩殿下
102	大正1年	10	13	東京朝日新聞	●偉人の寢床 ▽学習院に於ける▽乃木大将追悼会 ▲質素なる院長室 ▲菓缶一杯二日分 ▲歯磨は塩を使う ▲板敷の上の墨痕	
103	大正1年	10	31	東京朝日新聞	●乃木將軍の偽筆流行	
104	大正1年	11	2	東京朝日新聞	●乃木將軍記念写真配布	
105	大正1年	11	2	東京朝日新聞	●乃木將軍五十日祭《一日木浦特派員発》	「本社朝鮮特電」欄
106	大正1年	11	4	東京朝日新聞	●乃木將軍追悼会(盛岡) ●奉悼追悼式(山形)	盛岡市武徳殿にて 山形市第一小学校にて
107	大正1年	11	4	中央新聞	▲乃木大将追悼会(盛岡)	盛岡市武徳殿にて
108	大正1年	11	4	東京朝日新聞	[神田奨兵会主催の神田明神境内における日清日露戦病者及乃木大将追弔祭典式]	写真あり
109	大正1年	11	4	東京朝日新聞	●国民大弔祭会 ▽乃木將軍夫妻を偲ぶ ▲破風造の大神殿 ▲神式祭典執行 ▲僧侶一千百名 ▲毎年弔祭会を開く	
110	大正1年	11	12	東京朝日新聞	●源平武人と乃木大将《文学博士芳賀矢一氏談》遠く古武士に超越す	
111	大正1年	11	30	東京朝日新聞	●乃木家の跡仕末 ▽沙々貴神社奉納の旗▽同邸引渡は百日祭後	
112	大正1年	12	7	東京朝日新聞	●乃木大将景慕修養会設立	東京大阪兩朝日新聞愛読者の発起にて
113	大正1年	12	9	東京朝日新聞	●乃木將軍遺愛の徳利 ▽昨日の乃木兒玉兩大将祭	
114	大正1年	12	15	東京朝日新聞	●サンとデスが嫌ひ ▽乃木大将の蔵書百冊▽日比谷の遺墨展覧会	
115	大正1年	12	16	東京朝日新聞	●学習院学科課程改正	
116	大正1年	12	19	東京朝日新聞	●何をして遊びませう ▽新版のかるたや福笑ひ▽罪のない新春の娯楽 ▲かるたと双六 ▲御製と乃木大将 ▲御伽物いろ??	
117	大正1年	12	22	東京朝日新聞	●乃木大将百日祭	
118	大正2年	1	14	東京朝日新聞	●廃兵院の乃木大将祭 ▽院長以下追慕の涙	
119	大正2年	1	16	東京朝日新聞	●乃木邸市に寄附 ▽公開か否か未定▽乃木神社も建設	
120	大正2年	1	19	東京朝日新聞	●市有後の乃木邸 ▽現形の俵で保存	
121	大正2年	1	21	東京朝日新聞	●長府の乃木館 ▽桂弥一氏の記念計画《長府電話》	
122	大正2年	2	12	東京朝日新聞	●乃木神社の建立決議 ▽費用十四万四千円《長府特電》	
123	大正2年	2	15	東京朝日新聞	●乃木の遺物 ▽我国政変と米紙《十三日紐育特派員発》	「本社米國特電」欄
124	大正2年	3	2	東京朝日新聞	●哀しき記念 ▽乃木大将邸の引渡▽去り行く老女の涙 ▲火鉢より鏡台迄 ▲嗚呼此感慨無量 ▲大将夫妻自尽の室	写真あり
125	大正2年	3	15	東京朝日新聞	●軍神に捧ぐる真心 ▽乃木邸の監守人 ▲市の乃木邸招待会	
126	大正2年	4	14	東京朝日新聞	●乃木邸公開 ▽昨日の靈前祭▽落花繽紛の庭	
127	大正2年	4	15	東京朝日新聞	●乃木邸公開の日 ▽縦覧者邸内に満つ	
128	大正2年	4	24	東京朝日新聞	●乃木会の役員	
129	大正2年	4	27	東京朝日新聞	●乃木神社の神霊《金沢特電》	
130	大正2年	4	29	東京朝日新聞	●乃木会の進捗	
131	大正2年	5	31	東京朝日新聞	●宮廷録事 ▲聖上御容体 ▲東宮、兩皇子御參内	
132	大正2年	6	10	東京朝日新聞	●乃木会首唱者会	
133	大正2年	9	14	東京朝日新聞	●乃木將軍一年祭(金沢)	素封家能生久治氏邸に於て
134	大正2年	9	14	東京朝日新聞	●乃木將軍一年祭《十三日木浦特派員発》	「本社朝鮮特電」欄
135	大正2年	9	14	東京朝日新聞	●乃木大将一年祭執行 ▽落葉悲し墓前の秋▽追憶の涙に咽ぶ参拝者 ▲墓前の参拝者 ●乃木会評議員会 ▲旧大将邸の祭式 ▲学習院の挙式 ▽武術試合と訓話 ▲乃木会の講演	
136	大正2年	9	14	東京朝日新聞	▲富豪の感奮 神戸の野村翁 ▽乃木大将の事績に▽発奮して百万円を ▽公共事業に投ぜん ▲悲壮なる翁の家系 ▽殉死に次に切腹 ▲老いて 子なき翁 ▲徒弟学校の設立計画 ▲伏見に乃木神社 ▲村野翁の直話 ▽全く独力で遣る	
137	大正2年	11	21	東京朝日新聞	軍神の遺墨五千円 ▽学習院の給仕が貰つた▽献上の書幅の下書	写真あり

「学び舎の乃木希典」展覧書

②国民新聞切抜・故乃木院長に関する事項

番	年	月	日	掲載紙	記事名	備考
1	大正1年	9	15	国民新聞	嗚呼武士道の権化 悲しい哉乃木大将今や亡し 惜しい残念! 東宮殿下の御説《御養育係長 丸尾錦作氏談》	
2	大正1年	9	15	国民新聞	悲壯鬼神を哭かしむ 見よ偉人の光輝ある最期を	
3	大正1年	9	15	国民新聞	▲亀鑑とすべき人《川村大将の談》	
4	大正1年	9	15	国民新聞	▲万人の師表《井上哲次郎博士談》	
5	大正1年	9	15	国民新聞	●乃木大将の面影 ▲大将農夫と会飲す ▲栃木県の野木神社	
6	大正1年	9	16	国民新聞	「日本の乃木」は死せり 至誠君国に殉せる將軍の一生 心事明白《寺内朝鮮総督の談》	
7	大正1年	9	16	国民新聞	●院長としての大將 ▲身を以て範を示す ▲慈愛の深き院長 ▲生前生徒を戒む ▲あれがお見納め	写真あり「乃木大将夫人」
8	大正1年	9	16	国民新聞	●惨として声無し 十四日夜の乃木邸	
9	大正1年	9	17	国民新聞	●夫人は大将の後で自殺を遂ぐ《男爵 石黒忠恵氏談》	
10	大正1年	9	17	国民新聞	●弔客門に満ちて愁意又新なり	
11	大正1年	9	17	国民新聞	▲小笠原海軍大佐宛の遺書	
12	大正1年	9	17	国民新聞	三十五年死処を求む 乃木邸の門前弔客群をなす ●学習院に宛たる大将の遺書《福原文部次官談》	
13	大正1年	9	17	国民新聞	●暴風雨の日に御陵守護を命ず 將軍の忠誠斯くの如し	
14	大正1年	9	17	国民新聞	●旅順戦没者の遺族統々会葬せん	
15	大正1年	9	17	国民新聞	●大将夫妻の葬列	
16	大正1年	9	17	国民新聞	●乃木大将追悼会	
17	大正1年	9	18	国民新聞	●乃木大将履歴書 ▲陸軍出身前の履歴 ▲公傷公病 ▲陸軍出身後の履歴 ▲賞典	
18	大正1年	9	19	国民新聞	さらば! 大君の辺へ 乃木將軍夫妻の英霊青山に眠る 沿道送葬十幾万真に一代の盛儀 最期の決別 勅使参向せらる 夫妻の靈柩 愛馬三頭葬列に従う 森厳莊重 永久の眠	
19	大正1年	9	20	国民新聞	●香煙空を掩ふ 偉人の新墓畔 昨日の乃木家墓地	
20	大正1年	9	20	国民新聞	●乃木家の宝刀 死に先ちて家宝を整理す	
21	大正1年	9	20	国民新聞	常選謎々「隅田川とかけて」	次回課題「乃木大将」
22	大正1年	9	20	国民新聞	●米国外使の弔辞	
23	大正1年	9	20	国民新聞	東郷大将の受勲	
24	大正1年	9	20	国民新聞	哭乃木大将《仙波 勝島仙》／輓乃木將軍《大田道》／時事書感《高古香》／乃木大将葬式の盛儀を見て《大塊 野田卯太郎》	漢詩3首・和歌1首
25	大正1年	9	20	国民新聞	ハガキ便り	
26	大正1年	9	20	国民新聞	噂さ 吉右衛門泣く	
27	大正1年	9	21	国民新聞	●土耳其陸相弔辞	
28	大正1年	9	21	国民新聞	或人と乃木大将の事をかたりあひてよめる《井上通泰》	
29	大正1年	9	21	国民新聞	ハガキ便り	
30	大正1年	9	21	国民新聞	大正元年九月十四日護 聖柩赴桃山途中有飛報曰く昨 靈輻出關之時乃木大将夫妻在家自殺不知遺書記何事就其志略可察知也驚歎賦此《股野琢》	漢詩2首、もう1首は「読新報所録乃木將軍夫妻遺書感泣而賦」
31	大正1年	9	21	国民新聞	●米国軍人の感称	
32	大正1年	9	21	国民新聞	●乃木將軍を弔す（大連電報）	
33	大正1年	9	21	国民新聞	●乃木將軍は台湾開發の恩人 暗黒時代の照魔鏡《竹島少佐の追懐談》	
34	大正1年	9	21	国民新聞	●乃木大将と教育《福原文部次官談》	
35	大正1年	9	21	国民新聞	●乃木大将 雑感《文学博士 井上哲次郎（一）》	
36	大正1年	9	22	国民新聞	●乃木大将 雑感《文学博士 井上哲次郎（二）》	
37	大正1年	9	23	国民新聞	●乃木大将 雑感《文学博士 井上哲次郎（三）》	
38	大正1年	9	21	国民新聞	●竹馬の友桂彌一氏に宛てたる遺書 養子の弊害を喝破す	
39	大正1年	9	21	国民新聞	●貧に育ち貧を通した一生 幼少からの厳格な修養 ▲大将の幼年時代 ▲模範苦学 ▲大将の赤貧	
40	大正1年	9	21	国民新聞	●乃木大将墓前に割腹を謀る 元小松宮邸の馬丁	
41	大正1年	9	21	国民新聞	●済まぬ済まぬ《賀古鶴所氏談》	
42	大正1年	9	22	国民新聞	心事分明《蘇峰生》	「日曜講壇」欄
43	大正1年	9	22	国民新聞	●情けに富んだ聯隊長 一兵卒の見たる乃木將軍	乃木が東京鎮台第1聯隊長時代に一兵卒だった下谷坂町原新左衛門の追想
44	大正1年	9	22	国民新聞	●伏見宮殿下名馬乃木号を召させ給ふ	
45	大正1年	9	22	国民新聞	輓乃木大将《杉田定一拝草》	漢詩1首
46	大正1年	9	22	国民新聞	ひとり言《愛山生》	
47	大正1年	9	22	国民新聞	ハガキ便り	
48	大正1年	9	22	国民新聞	●学習院長の新任は未だし	
49	大正1年	9	23	やまと新聞	○伊勢山の將軍追悼	在郷軍人横浜分会発起し22日午前10時より伊勢山皇太神宮境内 横浜奨兵事務所にて
50	大正1年	9	23	国民新聞	●忠魂逝て茲に十日 厳肅なる十日祭と雨中墓前の大賑ひ ▲冥福を祈る群集 ▲蕭然たる乃木邸	
51	大正1年	9	23	国民新聞	乃木將軍歌《五江 小川通義》	

52	大正1年	9	23	国民新聞	●凄愴を極めたる乃木隊の苦戦（上） 軍旗喪失の真相 ▲熊本重圍に陥り植木の戦正に酣也 ▲旗手血戦して倒れ軍	
53	大正1年	9	24	国民新聞	●凄愴を極めたる乃木隊の苦戦（下） 軍旗喪失の真相 ▲乃木聯隊長泣然として自尽せんとす ▲奪はれたる軍旗敵陣の竿頭に翻る	
54	大正1年	9	23	国民新聞	●乃木將軍愛吟の詩「烏々歌」	
55	大正1年	9	24	国民新聞	●烏々歌の正誤	
56	大正1年	9	24	国民新聞	●大將夫人の教訓 何処までも日本婦人の典型	
57	大正1年	9	23	大阪朝日新聞	●幼年時代の乃木大將 大將の絶家主義 義士の墓に詣づ 徒歩で国詰の道中 自ら米を炊く 大將はよく泣く子 言行一致を主とす 楠公の遺命状 質素なる生活 風変りの握飯 玉木家に食客 畑中で学問修業	「乃木大將の竹馬の友たる長府仙俗庵主人桂彌一氏は大將の少年時代その他につき左の如く語れり」
58	大正1年	9	24	国民新聞	●先帝の御優詔と乃木將軍	
59	大正1年	9	25	国民新聞	ハガキ便り	
60	大正1年	9	25	国民新聞	●女学生は乃木夫人を如何に見る ▲生きた教訓 ▲生害は別問題 ▲特別な場合	
61	大正1年	9	25	国民新聞	●駐在の外人某紙の乃木評を憤る 口を極めて將軍を嘆賞す	
62	大正1年	9	25	国民新聞	●閑話休題	
63	大正1年	9	25	国民新聞	●將軍追悼記念祭	素行会にて26日牛込区弁天町宗参寺に於て
64	大正1年	9	25	国民新聞	●乃木大將 雜感《文章博士 井上哲次郎（四）》	
65	大正1年	9	26	国民新聞	●乃木夫人（一）《貴族院議員子爵 前田利定》	
66	大正1年	9	26	二六新報	○素行会と乃木將軍追社	
67	大正1年	9	26	国民新聞	奉悼 明治天皇二首《宮路宗海謹稿》	
68	大正1年	9	26	国民新聞	ハガキ便り	
69	大正1年	9	26	国民新聞	[写真「宗参寺なる山鹿素行の墓と去る四十年十二月二十九日乃木將軍の朗読したる祭文」]	
70	大正1年	9	26	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（五）》	
71	大正1年	9	26	国民新聞	●田園の乃木將軍 質素極まる石林の別荘	
72	大正1年	9	26	国民新聞	●子守唄を歌って呉れ 陣中の乃木大將	
73	大正1年	9	27	国民新聞	●遺烈千秋 山鹿素行と乃木大將の追悼法会 ▲大將と素行の遺物 ▲名士続々来会す ▲厳肅なる法要 ▲各名士の講演	
74	大正1年	9	27	国民新聞	常選謎々「乃木大將とかけて」	
75	大正1年	9	27	国民新聞	乃木夫人（二）《貴族院議員子爵前田利定》	
76	大正1年	9	27	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（六）》	
77	大正1年	9	27	国民新聞	太息篇《艸莽微臣 谷諶朝軒泣血稿》／休息篇／恭輓陸軍大將乃木伯爵閣下／恭輓乃木伯爵夫人閣下	漢詩4首
78	大正1年	9	27	国民新聞	●深厚なる英国の弔辞 乃木將軍夫妻に対して	
79	大正1年	9	28	国民新聞	ハガキ便り	
80	大正1年	9	28	国民新聞	●閑話休題	
81	大正1年	9	29	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（七の上）》	
82	大正1年	9	30	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（七の下）》	
83	大正1年	9	30	国民新聞	●乃木大將の追悼会	大日本武徳会附属武徳専門学校主催にて28日京都武徳会本部に於て
84	大正1年	9	29	国民新聞	●遺言條々の実行 乃木邸の処分近し	
85	大正1年	10	1	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（八）》	
86	大正1年	10	1	国民新聞	奉輓乃木大將及夫人《雲心 大庭景陽》	漢詩1首
87	大正1年	10	1	国民新聞	熟慮の將軍《角田柳作》	
88	大正1年	10	2	国民新聞	●烏々歌に就て 乃木大將愛吟の烏々歌	
89	大正1年	10	2	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（九）》	
90	大正1年	10	2	国民新聞	乃木大將（一） ▲此の親にして此子あり 虚弱なりし大將の幼時	
91	大正1年	10	3	国民新聞	乃木大將（二） ▲寒中水を浴せる教育法 子を持って知る親の恩	
92	大正1年	10	3	国民新聞	●湿やかなる廿日祭 乃木邸及青山墓地に執行	
93	大正1年	10	3	国民新聞	●乃木邸は現状の儘保存すべし 阪谷市長の処分説	
94	大正1年	10	3	国民新聞	聞乃木大將夫妻自儘作殉死行《松坡 田邊新》	漢詩1首
95	大正1年	10	4	国民新聞	●山本竹扁先生 乃木大將と一戸中將と半日の推敲に成し合作	
96	大正1年	10	4	国民新聞	●国学院の軍神追悼会	
97	大正1年	10	4	国民新聞	乃木大將（三） ▲乃木式弁当が藩の名物 奇抜な食い溜めの練習	
98	大正1年	10	4	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（十の上）》	
99	大正1年	10	5	国民新聞	●乃木大將 雜感《文学博士 井上哲次郎（十の下）》	
100	大正1年	10	5	国民新聞	乃木大將（四） ▲異彩を放つ乃木式筒袖 罪を獲て一家郷に帰る	
101	大正1年	10	6	国民新聞	乃木大將（五） ▲唯った三間の小屋住居 始て父母の膝下を離る	
102	大正1年	10	8	国民新聞	●遊就館に乃木室	
103	大正1年	10	8	国民新聞	乃木大將（六） ▲集童場の模範生となる 討論会では一方の旗頭	
104	大正1年	10	9	国民新聞	輓乃木大將軍十首《耕雲 三谷伸》	漢詩10首
105	大正1年	10	9	国民新聞	乃木大將（七） ▲父にも優る厳格な叔父 武芸を嫌って鋏を執る	
106	大正1年	10	10	国民新聞	●乃木会設立計画	

「学び舎の乃木希典」展覧書

107	大正1年	10	10	国民新聞	乃木大将 (八) ▲始て萩の明倫館に入る 文学寮の士気大に振ふ	
108	大正1年	10	11	国民新聞	●乃木大将の追悼会 大日本武徳会	
109	大正1年	10	11	国民新聞	●乃木家寄贈金	
110	大正1年	10	11	国民新聞	●乃木大将追悼会	
111	大正1年	10	12	国民新聞	乃木將軍《淞雨 松田敏》	
112	大正1年	10	12	国民新聞	●乃木大将追悼祭	
113	大正1年	10	11	国民新聞	乃木大将 (九) ▲高下駄で十九里の往復 四十余年前切腹の稽古	
114	大正1年	10	12	国民新聞	乃木大将 (十) ▲花々しき初陣の貫通傷 一躍少佐に任命せらる	
115	大正1年	10	13	国民新聞	乃木大将 《杉重華 (孫四郎)》	
116	大正1年	10	13	国民新聞	乃木大将 (十一) ▲不平の暴動各地に起る 將軍秋月の賊を掃蕩す	
117	大正1年	10	14	国民新聞	輓乃木大将 五首《黄山 中川吉郎》	漢詩5首
118	大正1年	10	14	国民新聞	●大将夫妻追悼会	
119	大正1年	10	14	国民新聞	乃木大将 (十二) ▲必ず戦場の露と消えよ 兄弟水盃を汲で別かる	
120	大正1年	10	15	国民新聞	乃木大将自筆 註文状	
121	大正1年	10	15	国民新聞	乃木將軍歌次小川五江韻《鈴山 大津淳一郎》	漢詩1首
122	大正1年	10	15	国民新聞	●乃木大将遺言の効力 ▲自署の効力 ▲財産の処分	
123	大正1年	10	15	国民新聞	乃木大将 (十三) ▲弟は戦死叔父は割腹 兵を率いて熊本に向ふ	
124	大正1年	10	16	国民新聞	乃木大将 (十四) ▲植木に於ける一大血戦 聯隊旗を賊軍に奪はる	
125	大正1年	10	16	国民新聞	●乃木大将の実弟 石林の遺郎を守る	
126	大正1年	10	17	国民新聞	●秋寂し葬場殿	
127	大正1年	10	17	国民新聞	乃木大将 (十五) ▲切腹の覚悟を思止まる 壮烈な河原林騎手の死	
128	大正1年	10	18	国民新聞	●宛然聖姿を仰が如し	
129	大正1年	10	18	国民新聞	●遺芳薫る松陰神社 乃木大将遺墨陳列さる	
130	大正1年	10	19	国民新聞	乃木大将 (十六) ▲奪はれた聯隊旗の行衛 始めて会心の笑を漏す	
131	大正1年	10	19	国民新聞	●桃山に神苑設置 乃木大将銅像も	
132	大正1年	10	21	国民新聞	十三日夜の総督邸《京城に於て 蘇峰生》	
133	大正1年	10	21	国民新聞	●乃木大将追悼会 (名古屋)	20日偕行社に於て渡邊師団長主催
134	大正1年	10	22	国民新聞	乃木大将 (十七) ▲辛じて九死に一生を得 敵も亦其武者振を賞す	
135	大正1年	10	23	国民新聞	●乃木大将が愛読せし殉死に関する名著現はる	
136	大正1年	10	23	国民新聞	●乃木邸四十日祭 ●乃木將軍弔祭会	
137	大正1年	10	23	国民新聞	乃木大将の殉死《侯爵 鍋島直大》	短歌5首(記事名・署名は冒頭1首、ほかに鍋島栄子・鍋島尚子の歌あり)
138	大正1年	10	23	国民新聞	乃木大将 (十八) ▲大将更に木葉に進軍し 怨を飲んで再び退却す	
139	大正1年	10	24	国民新聞	乃木大将 (十九) ▲命知らずの乃木と緯名 激戦の結果名誉の負傷	
140	大正1年	10	25	国民新聞	乃木大将 (二十) ▲戦報頻々創痍尚癒えず 一夜窺に病院を脱走す	
141	大正1年	10	25	国民新聞	●乃木將軍に頼まれた高綱の画像 絵は納音氏書は將軍の三幅対 ▲一間余の大鎌 ▲記念の三幅対 ▲故大将の読書法	写真あり「乃木將軍依託の佐々木高綱の画像と將軍揮毫の二幅」
142	大正1年	10	14	朝日新聞	●觀樹山莊を訪ふ △師団増設 △因襲的悪制 △教育問題か △一個の乃木に非ず △先帝を誣蒙	
143	大正1年	10	16?	朝日新聞	●乃木將軍追悼会	青森県八戸町老年会の発起にて13日午後3時半町立小学校に於て
144	大正1年	10	26	国民新聞	乃木大将の殉死につきて《男爵 千家尊福》	短歌5首
145	大正1年	10	28	国民新聞	●乃木大将の胸像成る	鑄金家岡崎雪声氏
146	大正1年	10	28	国民新聞	乃木大将 (二十一) ▲官軍最後の強襲を試み 乃木軍田原の険を攀ぶ	
147	大正1年	10	29	国民新聞	●乃木大将追悼祭	大日本武術講習会が11月1日午後1時より神田橋脇強楽堂に於いて
148	大正1年	10	29	国民新聞	乃木大将 (二十二) ▲乃木軍の猛襲功を奏し 賊軍の本壘田原坂陥る	
149	大正1年	10	30	国民新聞	乃木大将 (二十三) ▲熊本鎮台の参謀となる 又た可愛岳の戦に加る	
150	大正1年	10	31	国民新聞	●乃木將軍大弔祭会	11月3日正午より芝公園新運動場に於て神仏両式により執行
151	大正1年	10	31	国民新聞	乃木大将 (二十四) ▲流石瘦我慢の將軍も ハタと弱った結婚談	
152	大正1年	10	31	国民新聞	乃木將軍歌《菖水 辻澤玄》	漢詩1首
153	大正1年	11	1	国民新聞	乃木大将 (二十五)▲伊瀬知副官の媒人口 扱是からが見合の幕	
154	大正1年	11	1	国民新聞	●乃木將軍弔祭会寄贈 ▲金一百円宛	
155	大正1年	11	2	国民新聞	乃木大将 (二十六) ▲大騒を演じた見合ひ 古式に拠った結婚式	
156	大正1年	11	2	国民新聞	東京たより 十一月一日午後二時《門外漢》	
157	大正1年	11	3	国民新聞	●金沢に乃木神社	
158	大正1年	11	3	国民新聞	●乃木大将の写真寄附	
159	大正1年	11	3	国民新聞	●乃木將軍弔祭会	「乃木大将夫妻国民大弔祭会は予記の通り今三日正午より芝公園新運動場に設けられたる式場に於て神仏両様にて執行さるゝ筈」
160	大正1年	11	4	国民新聞	●国民相ひ会して乃木將軍を祀る 莊嚴なりし將軍大弔祭会 ▲神々しき神式弔祭 ▲盛莊なる仏式弔祭 ▲乃木会の協議	
161	大正1年	11	9	国民新聞	乃木大将 (廿七) ▲静子夫人幼時の教育 男と同じ木綿の筒袖	

162	大正1年	11	11	国民新聞	乃木大将 (廿八) ▲静子夫人の花嫁振り 和気藹々たる新家庭	
163	大正1年	11	17	国民新聞	●乃木將軍銅像の頒布	岡崎雪声氏製作の乃木大将胸像を京橋区尾張町2丁目中村美術品店にて実費頒布
164	大正1年	11	19	国民新聞	●乃木邸愈よ寄附 区裁判所より検認の通知	
165	大正1年	11	24	国民新聞	乃木大将 (廿九) ▲深夜の上のを騒がす 公園地で演習は禁物	
166	大正1年	11	28	国民新聞	乃木大将 (三十一) ▲大将夫妻の心づくし 兵営内に教室を設く	
167	大正1年	11	30	国民新聞	乃木大将 (三十二) ▲玉汗で出来た射撃場 途上兵卒に詰問さる	
168	大正1年	12	3	国民新聞	乃木大将 (三十三) ▲昇進祝に射撃の演習 空腹を抱へて解散す	
169	大正1年	12	5	国民新聞	乃木大将 (三十五) ▲木賃宿の茶代二十円 亭主警察署へ届出づ	
170	大正1年	12	4	国民新聞	乃木大将 (三十四) ▲独逸留学中の兩將軍 大将厚く恩義に感ず	
171	大正1年	12	6	国民新聞	乃木大将 (三十六) ▲日清戦役には旅团长 外套を負傷兵に与ふ	
172	大正1年	12	7	国民新聞	乃木大将 (三十七) ▲勝も負るも戦の習ひ 捕虜を扱はって遣れ	
173	大正1年	12	8	国民新聞	乃木大将 (三十八) ▲難攻不落の金城鉄壁 大将大に敵を悩ます	
174	大正1年	12	11	国民新聞	乃木大将 (四十) ▲日清役に於ける殊勲 白刃を閃して突進す	
175	大正1年	12	12	国民新聞	乃木大将 (四十一) ▲此母にして此子あり 死を覚悟して渡台す	
176	大正1年	12	9	国民新聞	●世田ヶ谷の將軍祭 乃木大将愛用の徳利	
177	大正1年	12	13	国民新聞	乃木大将 (四十二) ▲禅寺の庫裡に男世帯 妻でも面会はならぬ	
178	大正1年	12	14	国民新聞	乃木大将 (四十三) ▲路上五門紙幣を恵む 遊廓の亭主連縮上る	
179	大正1年	12	15	国民新聞	乃木大将 (四十四) ▲聯隊長不意討を喰ふ あの手だけは秘密だ	
180	大正1年	12	17	国民新聞	●乃木大将遺愛の書籍陳列さる 低徊去る能はず ▲大将を見る如し ▲墨痕鮮か也 ▲精読せる書籍 ▲色鉛筆の辻釈	
181	大正1年	12	18	国民新聞	●誰か之を見て泣かざる者ぞ 乃木大将夫妻の遺物 遊就館に陳列せらる ▲観る者皆泣く ▲凄愴の気充つ ▲輝ける外国勲章	
182	大正1年	12	18	国民新聞	乃木大将 (四十五) ▲那須野原の百姓生活 村民へ国旗を頒ばる	
183	大正1年	12	18	国民新聞	●誰か之を見て泣かざる者ぞ 乃木大将夫妻の遺物 遊就館に陳列せらる ▲観る者皆泣く ▲凄愴の気充つ ▲輝ける外国勲章	
184	大正1年	12	19	国民新聞	乃木大将 (四十六) ▲旅順口に於ける大将 陣中に詔勅を賜はる	
185	大正1年	12	21	国民新聞	乃木大将 (四十六 [マ]) ▲アンペラの上に瞑目 御馳走が過て叱らる	
186	大正1年	12	22	国民新聞	●殺魂去って百日 微雨蕭々墓畔の涙	
187	大正1年	12	24	国民新聞	乃木大将 (四十八) ▲二令息相次で戦死す 鬼神亦泣く陣営の夜	
188	大正1年	12	25	国民新聞	乃木大将 (四十九) ▲旅順遂に我手に帰す 健気なる夫妻の覚悟	
189	大正1年	12	28	国民新聞	乃木大将 (五十) ▲先帝の勲慮に感激す 学習院で生徒と合宿	
190	大正1年	12	29	国民新聞	乃木大将 (五十一) ▲あはれ大将夫妻の死 万民瞻仰の的となる	
191	大正2年	1	12	国民新聞	●米國紳士乃木將軍の遺物に泣く 何故落涙したかとは常識を欠いた質問 ▲観光団員の大喜び	写真あり「逝ける湯地翁」
192	大正2年	1	14	国民新聞	●廢兵乃木將軍を祀る	
193	大正2年	1	15	国民新聞	●嗚呼忠烈乃木伯爵夫妻之遺跡 赤坂新坂町の伯爵邸々々東京市に寄附せらる ▲現状の儘永久に保存	
194	大正2年	1	21	国民新聞	●血! 血染の敷物 南天棒禪師と故乃木將軍	
195	大正2年	1	22	国民新聞	●乃木邸寄附受領	
196	大正2年	3	2	国民新聞	●市民の宝市民の誇 乃木大将遺邸々々東京市の有となる ●乃木大将記念の鬚	
197	大正2年	3	2	国民新聞	●思出多き記念祭 一高の健児乃木將軍を偲ぶ	
198	大正2年	3	6	国民新聞	●忠実なる軍神の僕 乃木將軍と宿縁深き兵事係	
199	大正2年	3	13	国民新聞	●乃木邸に大防火壁が出来る 管理者の住宅は葬場殿の材木で造る = 追て乃木会の設立を見ん	
200	大正2年	3	16	国民新聞	●美しく成った乃木邸 奥の方ではお歴々の保存法相談会	
201	大正2年	4	26	国民新聞	●乃木將軍桃山に現れん 國民表彰会の銅像建設計画	
202	大正2年	4	8	国民新聞	●愈軍神邸の公開 十四日より乃木邸参拝自由	
203	大正2年	4	11	国民新聞	●千古の記念乃木神社建設されん 境内には図書館と陳列館	
204	大正2年	4	13	国民新聞	●乃木会創設発表 乃木会設立趣意書 乃木会規定 (草案)	
205	大正2年	4	14	国民新聞	●陸海の將星軍神の靈前に籲く 乃木邸々々公開せらる	写真あり「乃木邸の祠前」
206	大正2年	4	15	国民新聞	●噫忠魂千古赫乎 公開された乃木邸の大賑ひ	
207	大正2年	4	15	国民新聞	東京たより 四月十四日午後二時半《門外漢》	
208	大正2年	4	25	国民新聞	●乃木会創立準備	
209	大正2年	4	18	国民新聞	●乃木会創立準備	
210	大正2年	5	25	国民新聞	●乃木会創立の盛況	
211	大正2年	5	26	国民新聞	●乃木会創立総会	
212	大正2年	5	30	国民新聞	●乃木將軍写真帖	「学習院にては故乃木大将の事蹟に関する材料を蒐集しつゝ、ありしが写真帖の分だけ先づ脱稿せる由」
213	大正2年	6	17	国民新聞	●乃木会正副会長	
214	大正2年	8	7	国民新聞	●乃木会々員募集	
215	大正2年	8	12	読売新聞	●小消息 ▲乃木將軍記念写真帖	

「学び舎の乃木希典」展覧書

216	大正2年	8	13	国民新聞	●乃木將軍記念写真帖	「新刊紹介」欄。「学習院にて編纂中なりしもの完成九月十三日の記念日を以て発売すべく審美書院では予約募集を開始した」
217	大正2年	8	15	国民新聞	●乃木大将一年祭	
218	大正2年	8	23		●乃木大将一年祭 各国偉人の霊地恣に繁盛さる ▲奈翁一世の落書 ▲文豪生家の公有 ▲猶ほ実例が多い	
219	大正2年	9	13	国民新聞	●噫此の夜九月十有三日 英霊逝て茲に一年偉名赫々たり ▲真似も出来ない ▲將軍最後の好意 大迫学習院長談 ▲御勅披十三首 僅かに残る 八十三首 井上通泰博士の談 ▲最後の歌談 ▲七十首は自分の添削 ▲尊き進献の五首	
220	大正2年	9	23	国民新聞	●露国の極東兵備を視察して慷慨 悲憤せる乃木大将を憶ふ《宮内大臣伯爵 渡邊千秋氏談》	
221	大正2年	9	23	国民新聞	●偉人祭 哀愁今更に至て悲痛の涙新なり ▲英霊来り響く 莊嚴なる乃木祭 ▲素行会追悼祭 ▲手向のけむり	
222	大正2年	10	17	国民新聞	●総売上高八万円 大阪美術倶楽部の入札 乃木大将の筆蹟も出る	

◎地方各新聞切抜・故乃木院長に関する事項

番	年	月	日	掲載紙	記事名	備考
1	大正1年	9	15	京城日報	嗚呼乃木將軍 千載不滅の模範的武人 ▲武士の典型《柴軍參謀長談》乃木大将は全然古武士の典型也 將軍の精神修練と質素なる生活 静子夫人に対する大将の感化力 大将にして始めて殉死の誠意を達す ▲真乎の武人《山根正次氏談》	柴勝三郎（朝鮮駐劄軍參謀長）
2	大正1年	9	15	京城日報	●將軍と共に殉死せし乃木夫人《藤田軍医監談》 ●全軍の將卒皆泣く《某憲兵大尉談》 ●何人も將軍を悼む	写真2枚あり「乃木將軍の手翰（山根正次氏蔵）」・「乃木大将の真筆（山根正次氏蔵）。藤田嗣章（軍医監）
3	大正1年	9	17	神戸又新日報	●逝ける乃木將軍 生ける東郷大将 ●十五年前の乃木將軍 ●乃木大将夫妻追憶	
4	大正1年	9	17	富山日報	○記念の録 ▼乃木將軍と飛騨驛	
5	大正1年	9	17	弘前新聞	乃木大将を哭す《竹南性》	
6	大正1年	9	17	豊国新聞	▲乃木大将碑銘 寺内総督之を揮毫す ▲吁、陸海の双壁 東郷伯の感果たして如何 ▲悲壯なる葬儀 四個の柩は相共に送れん ▲物悲しき邸前 若き婦人の黒髪 ▲妃殿下の御愛惜 夫妻地下に冥ぜん	
7	大正1年	9	18	信濃毎日新聞	●乃木大将と松本（続）▲大将と正行寺	
8	大正1年	9	18	上毛新聞	●乃木將軍と連隊《土橋三橋両氏談話》	高崎歩兵第15連隊の土橋大尉と三橋清氏（故乃木保典氏の又従兄弟）に談話を聞く
8	大正1年	9	18	上毛新聞	●十日前に乃木大将揮毫の分会旗 該旗を持ち葬儀參列	
9	大正1年	9	18	京都市出新聞	●士人の典型乃木陸軍大将（二）《第十六師団長 山中中将談》	山中信儀（第16師団長）
10	大正1年	9	19	いばらき	●乃木大将と水戸▽四ヶ年前の思ひ出▽従者もなく只飄然 ▲瑞龍西山を訪ふ ▲將軍の謙讓儉素 ▲喪祭式の写本	
11	大正1年	9	18	高田〔高田新聞or高田日報〕	逝ける乃木大将 ▼自殺実状公表 ▽祖先は近江源氏 ▼乃木家の祖先 ▼自刃せる実状	
11	〃	〃	〃	〃	▼第一の弔訪者《長岡將軍の談》 ▲大葬後迄差控 ▲遺書は幾通も ▲石黒男へ遺書 ▲何等の変なし ▲武士道の典型	写真あり「〔判読不能〕に於ける乃木將軍」。長岡外史（第13師団長）
11	〃	〃	〃	〃	▼武士道地に落す《レ中佐の談》▼健げなる最期 ▼士道の真意義 ▼揮毫を家宝に	「奥洪国陸軍中佐フォン、レルビ氏」
12	大正1年	9	18	高田	●小説に書かれた乃木伯△徳富健次郎の『寄生木』	
13	大正1年	9	18	北国新聞	連隊旗	
14	大正1年	9	18	呉日々新聞	乃木家の後	「社説」欄
15	大正1年	9	18	京城日報	●乃木大将の謹厳	
16	大正1年	9	18	横濱貿易新報	時代漫評《暮村隠士》	
17	大正1年	9	18	東洋新報	●乃木邸に勅使	
18	大正1年	9	18	豊国新聞	秋菊霜に傲る 芳魂は雲煙に随って散せず △坂本中将閣下 未だ乃木將軍の遺書在 △何たる悲愴ぞ 夫人は斯して自殺す △訓戒肝に徹す《教育総監本郷中将の談》 △今更に偲れて 女学部生紅涙に咽ぶ	本郷房太郎（教育総監部本部長）
19	大正1年	9	19	河北新報	噫乃木將軍（二）台湾総督を送る《隠士鏡軒》	
20	大正1年	9	19	河北新報	●西南役の当夜 ▲死の遠因をなせる記念の夜 ▲乃木將軍手書の一感状書	写真あり「乃木將軍の岩片氏に与えたる感状（明治十年）」
21	大正1年	9	19	信濃毎日新聞	●乃木大将と松本（続）▲大将と正行寺	
22	大正1年	9	19	信濃毎日新聞	陋習打破論（一）乃木將軍の殉死	
23	大正1年	9	19	京都市出新聞	●士人の典型乃木陸軍大将（三）《第十六師団長 山中中将談》	山中信儀（第16師団長）
24	大正1年	9	19	長野新聞	乃木將軍を偲ぶ ▲郡市長等を叱吃す▼▼切殺すぞ ▼坊主嫌ひ ▼機嫌直る ▼苗代質問 ▼其後の事	
25	大正1年	9	19	山梨日々新聞	●大将の割腹を止む ▽西南役部下軍曹の談	

26	大正1年	9	19	福岡日々新聞	●乃木大将と付属小学 二生徒の感想 ▲大将と木剣体操 ▲優しくて謙遜 ▲付属小学の講話	
27	大正1年	9	19	岩手〔岩手日報or岩手公論〕	乃木將軍を哭す《田鎖凌山（寄）》	「言論」欄
28	大正1年	9	19	長野新聞	乃木將軍と諏訪 ▲子供を集て訓諭	
29	大正1年	9	19	長野新聞	乃木將軍と松本（四）▲在りし世の偲び草▼ ▲夫人同伴三度の墓参 ▲碑前に立つ老將軍 ▲二愛子の冥福を祈る ▲我將何顔看父老	
30	大正1年	9	19	東奥日報	●乃木將軍の絶筆 ▲南郡藤崎村長に贈られし	「南郡藤崎村長長谷川英治氏」
31	大正1年	9	19	福岡日々新聞	○長府町遙拜式	「昨日乃木陸軍大将葬儀執行に付午後三時より同町豊浦小学校敬業館に於て遙拜式執行」
32	大正1年	9	19	福岡日々新聞	○従卒の遺子を憫む 匿名にて学資を給与す	写真あり「乃木静子夫人の筆跡」
32	大正1年	9	19	福岡日々新聞	○軍旗紛失の当時 西南役植木激戦の回顧 河原林少尉未亡人の談	「河原林少尉の未亡人徳子（六十二）を小倉市堺町の寓居に訪ひ」
33	大正1年	9	19	福岡日々新聞	○乃木大将追懐談《小倉連隊長時代の部下 福岡典獄山縣齊高氏談》	
34	大正1年	9	19	芸備日々新聞	●乃木大将の半面 ▲同將軍の逸話と教訓	
35	大正1年	9	19	京城日報	●生前の訓戒 一言一行悉く亀鑑 ▲清朝に忠臣無し ▲決死事に当れよ ▲軍刀に対する礼 ▲飽迄も至誠資至忠	
36	大正1年	9	19	日本電報通信	●將軍墓地参詣者陸続	
37	大正1年	9	21	二六新報	○土国陸軍の表弔	「土耳其陸軍大臣マザン、パシヤ氏」
38	大正1年	9	19	新愛知	学習院長としての乃木將軍《学習院主事 松井安次郎氏談》 ▲高潔謹直の士 ▲寮舎に於ける院長 ▲慈愛に富みし院長 ▲修養家たりし院長	
39	大正1年	9	19	日本電報通信	●乃木將軍と老紳士	
40	大正1年	9	20	横浜貿易新報	●蕭殺たる墮涙 墓畔香華多し △弔者黎明より雑踏す	
41	大正1年	9	20	横浜貿易新報	●十年後の賊將 故將軍を語る △宛然たる「大觸」の△直孝と三郎兵衛	
42	大正1年	9	20	横浜貿易新報	●床しき大将の半面 △美談佳話に満つ ▼表札何時か紛失 ▼拍車附の長靴 ▼何事も人手藉らず ▼煙草一本でも分配 ▼大将の凱旋上奏文 ▼「爾靈山」の由来	
43	大正1年	9	20	横浜貿易新報	●江州の痛悼式 ▽遺書中の佐々木神社境内に	江州蒲生郡安土村の佐々木神社
44	大正1年	9	20	横浜貿易新報	[乃木將軍自刃の教訓について]	「時言閑語」欄
45	大正1年	9	20	東洋新報	●昨朝の將軍墓前 ▲押し返されぬ雑踏	
46	大正1年	9	20	横浜貿易新報	○乃木大将追悼式 ▽廿二日横浜褒兵義会にて	
47	大正1年	9	20	豊国新聞	偉大なり將軍の死！《木村鷹太郎氏談》	「名家談叢」
48	大正1年	9	20	横浜貿易新報	○乃木大将追悼会	「中郡城島村在郷軍人分会長新藤鶴太郎氏」
49	大正1年	9	20	東洋新報	●佐々木神社奉弔式	江州蒲生郡安土村の佐々木神社
50	大正1年	9	20	東洋新報	●乃木夫人を亀鑑とせよ ▲某女学校長談	
51	大正1年	9	20	横浜貿易新報	[乃木の葬式に山県・桂が欠席、長州閥の行く末について]	「東西南北」
52	大正1年	9	20	[記載なし]	●「極秘」の遺書 乃木大将より田中軍務局長に宛しもの	
53	[記載なし]			千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想（つづき） ▲永久忘れられぬ偉人《清古弁護士談》 ▲大将の真骨髄《小池高女校長談》	
54	大正1年	9	20	千葉毎日新聞	○仁科校長乃木邸弔問	「千葉町寒川小学校長仁科要氏」
55	大正1年	9	20	河北新報	[第二師団長・仙台時代の乃木について]	
56	大正1年	9	20	信濃毎日新聞	●乃木大将と松本（統）《正行寺住職談》 ▼宇多天皇に出づ ▼大将自殺当夜来松す ▼逸話の一二	
57	大正1年	9	20	信濃毎日新聞	●乃木大将（下）▲塩尻から松本までの大将《上諏訪信毎支局 穂村松東》 ▼遂々網に罹った ▼余りは茶代ジャ ▼三人とも面喰ふ ▼塩尻駅の將軍 ▼是れが桔梗ヶ原 ▼猛烈な攻撃ジャ ▼よく勉強しろ	
58	大正1年	9	20	いばらき	乃木將軍と余が友《富岡如夢》	
59	大正1年	9	20	いばらき	●卅五年前の敵と敵 ▽老將の乃木將軍談	「雑報」欄
60	大正1年	9	20	いばらき	●僕は麦飯と缶詰が好物なり ▽馬場歩兵大佐談話	
61	大正1年	9	20	河北新報	噫乃木將軍（三）《隠士鎖軒》丸龜に於ける再会	
62	大正1年	9	20	信濃毎日新聞	陋習打破論（二）乃木將軍の殉死	
63	大正1年	9	20	神戸又新日報	●將軍の挨拶 ▽玄關の大瓢	「小倉聯隊在勤当時の事」
64	大正1年	9	20	扶桑新聞	●乃木大将に愛せられし陶工一泣いて其高潔を語る	「岐阜県不破郡赤坂町に清水石徳と云へる陶工あり」
65	大正1年	9	20	新愛知	●乃木將軍逸話（一） ▲乃木新田 ▲將軍の綽名 ▲飄逸の一面 ▲馬車を斥く	
66	大正1年	9	20	京都日出新聞	●京わらんべ	「乃木大将夫妻葬儀の活動写真を浅草では一昨夜から映じてゐる京都にも早くほしい」
67	大正1年	9	20	京都日出新聞	●士人の典型乃木陸軍大将（四）《第十六師団長 山中中将談》	山中信儀（第16師団長）
68	大正1年	9	20	京都日出新聞	●乃木將軍逸事 ▲中朝事実に雅懐 ▲將軍師恩を忘れず ▲將軍の旧知己	
69	大正1年	9	20	京城日報	●名誉ある木賃宿 四畳半で大将一泊	
70	大正1年	9	20	京城日報	●乃木夫人追悼会	愛国婦人会有志が近日南山本願寺に於て

「学び舎の乃木希典」展覧書

71	大正1年	9	20	京城日報	●乃木大将追悼会	大和町一丁目浄土宗開教院にて 19日午後2時より
72	大正1年	9	20	芸備日々新聞	●乃木將軍祭典 ▲於神宮奉斎会本部執行	広島赤穂義士追悼会員中有志者の 発起
73	大正1年	9	20	浜松新聞	●鷹森専二氏の表誠	「浜名郡天王村天王遠江報国隊員 なる鷹森専二氏」
74	大正1年	9	20	下野新聞	●石林人民の哀悼 乃木別邸に修行す	「乃木將軍別荘所在地なる那須郡 狩野村大字石林字民等」
75	大正1年	9	20	浜松新聞	●乃木大将の染筆 ▲高野連隊長の珍藏▲大将の雅号は秀顕	「当歩兵第六十七連隊長高野毅 氏」
76	大正1年	9	20	福岡日々新聞	○記念の香遠木 乃木大将手植の名木《大迫第十八師団長談》	大迫尚道（第18師団長）は第11 代学習院長大迫尚敏の弟
77	大正1年	9	20	福岡日々新聞	○乃木夫人の生立 鹿児島湯地家の事	
78	大正1年	9	20	三重新聞	●故乃木大将の追善	「佐々木家の末裔たる伊賀国名賀 郡箕輪村大字夏見深山卯太郎氏 が発起人」
79	大正1年	9	20	広島中国新聞	●福山通信 ▲故乃木大将追悼式	「福山町南波高橋金尾諸医師及齒 科赤尾巖氏其他」が18日に福山 公園に於て
80	大正1年	9	20	いばらき	●乃木大将追悼式	西茨城郡笠間町にて20日午後2時 より稲荷神社後園に於て
81	大正1年	9	21	豊国新聞	沙々貴神社縁起	
82	大正1年	9	21	横浜貿易新報	●乃木大将追悼会	「溝方面」欄／高座郡大澤村にて 18日午後3時より学校前の忠魂碑 前に神籬を設け
83	大正1年	9	21	横浜貿易新報	○横商の乃木大将追悼会	横浜商業学校同窓会有志が27日 午後8時伊勢山太神宮社に於て
84	大正1年	9	21	東洋新報	●乃木將軍に殉せんとす ▲元小松宮家ノ馬丁	「芝区白金三光町三九一井上源三 郎方同居平野正太郎（二六）」
85	大正1年	9	21	東洋新報	●乃木大将の感化 ▲福原文部次官談	福原録二郎（文部次官）
86	大正1年	9	21	横浜貿易新報	○乃木家と遊行寺 ▲乃木家最初の菩提所は末寺▲亡き夫人は遊行上人隨 喜者	「藤沢方面」欄
87	大正1年	9	21	横浜貿易新報	○乃木大将陣中に都々逸を物す ▽法公門放捷の一夜	写真あり（葛谷寛次氏所持の乃 木直筆の都々逸一首）
88	大正1年	9	21	信濃毎日新聞	陋習打破論（三）乃木將軍の殉死	
89	大正1年	9	21	いばらき	●乃木將軍に仕し調馬師 ▽下市に住む馬術の名家▽泣て將軍の逸事を語 る ▲乃木將軍に見ゆ ▲紅鹿毛の駿馬英 ▲提灯は目に付く ▲田打、 稲刈、畑堀 ▲いざぎこし召せ ▲困ったと只一言《一記者》	写真あり「夫人シツ子の留吉氏に 送りたる書状」。「元水戸家の馬術 （大坪流）師範役たりし鈴木清忠 氏の二男留吉（四七）氏を昨日 其の自宅に訪ふ。」
90	大正1年	9	21	河北新報	噫乃木將軍（四）《隱士鏡軒》玉藻樓の招飲 仁慈惻隱の一端	
91	大正1年	9	21	扶桑新聞	〔かつて長府で乃木將軍宅に同居した名古屋電燈の技師長岡本高介氏の語 る所〕	「黄金ペン」欄
92	大正1年	9	21	福岡日々新聞	○乃木大将の追懐《栗田歩兵第三十五旅団長談》	栗田直八郎（歩兵第35旅団長）
93	大正1年	9	21	新愛知	●乃木將軍逸話（二） ▲知ってゐるの一語 ▲乃木は武士である ▲木 賃宿に泊らる ▲年金は馬丁と馬	
94	大正1年	9	22	岐阜日々新聞	乃木大将の殉死《一記者》	
95	大正1年	9	21	千葉毎日新聞	○千葉に隠れし乃木大将の姻戚 ▲元秋田県令の国司氏……少年時代將軍 と同居▽	千葉高等女学校前通りに隠居生 生活を営む国司仙吉氏
96	大正1年	9	21	千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想（つづき） ▲高風照萬春《告森知事談》 ▲御美 事の最期《宇佐美農銀頭取談》	告森良（千葉県知事）、宇佐美敬 三郎（千葉県農工銀行頭取）
97	大正1年	9	21	神戸又新日報	●露將と乃木將軍（下）△記念すべき水師營の会見	写真あり「乃木將軍の戯墨（日 露役の陣中にて）」
98	大正1年	9	21	京都日出新聞	家名と邸宅と墓碑	
99	大正1年	9	21	東洋新報	●偉人死の反響 ▲勤儉の風出現す	
100	大正1年	9	22	横浜貿易新報	戯曲的巨人 乃木大将の自殺を論ず《小島鳥水》	「日曜文壇」欄
101	大正1年	9	22	岐阜日々新聞	●將軍慰靈祭	山県郡葛原村軍人会分会発起と なり19日午後7時より
102	大正1年	9	22	千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想（つづき） ▲静思冥想せよ《元田教育課長談》 ▲百代貞烈の鏡《神田郡長談》	元田敏夫（千葉県内務部教育課 長）、神田清治（千葉郡長）
103	大正1年	9	22	京都日出新聞	●乃木大将追悼講演会	大日本武徳会武術専門学校にて
104	大正1年	9	22	扶桑新聞	●乃木將軍の戯歌一好個の記念と崇む	
105	大正1年	9	22	東洋新報	●伏見大将宮の乃木号	
106	大正1年	9	22	東洋新報	●彼岸入りと青山 ▲葬場殿と乃木將軍墓畔の賑ひ	
107	大正1年	9	23	横浜貿易新報	●在郷軍人雨中に乃木大将を悼む ▽横浜奨兵義会に於て	
108	大正1年	9	23	横浜貿易新報	○軍旗を奪はれし剝那の乃木將軍 ▽割腹を企て部下に支へられ▽部下將 軍を縛して死を支ゆ	
109	大正1年	9	23	河北新報	噫乃木將軍（五）《隱士鏡軒》金倉寺の寓を訪ふ 夫人の香川下り	
110	大正1年	9	23	二六新報	○雨中の養者一万 △乃木大将十日祭▽	

111	大正1年	9	23	横浜貿易新報	[乃木家の跡目の処置不当、山県公寺内伯等は芳名を汚瀆するもの]	「時言閑語」欄
112	大正1年	9	17	台南新報	●噫乃木將軍 自死の教訓《鰐石》	
113	大正1年	9	21	松陽新報	●乃木將軍追悼会	東伯郡安田村にて18日午後3時より同村小学校講堂にて
114	大正1年	9	21	朝鮮〔朝鮮新聞or朝鮮時報〕	●竹下氏方の乃木大将揮毫	「当民団議員竹下佳隆氏」
115	大正1年	9	21	京城日報	●安東だより ▲乃木將軍追悼式	官民有志30余名發起にて18日午後5時より西本願寺にて
116	大正1年	9	21	京城日報	●乃木將軍追悼会《平壤支局》	橋本第4旅団長ほか發起にて18日午後7時よりへ平壤大和町華頂寺にて
117	大正1年	9	21	長崎〔長崎新聞or長崎日々新聞or長崎民報〕	●乃木大将追悼法会	長崎市内各宗37ヶ寺及び山口県人の主催にて23日大音寺にて
118	大正1年	9	21	東奥日報	●貞淑なる乃木夫人 ▲一戸第四師団長夫人の談	一戸兵衛（第4師団長）
119	大正1年	9	21	鳥取新報	○故乃木大追悼式	帝国在郷軍人会赤碕町分会主催で23日午後1時より同町尋常校にて
120	大正1年	9	21	山陰新聞	●乃木將軍の親切	元63聯隊長歩兵大佐石黒千久之介氏を記者往訪
121	大正1年	9	21	広島中国新聞	●竹原町の乃木將軍追悼会	村上町長・桑原署長主催者となり18日午後3時に照蓮寺にて
122	大正1年	9	21	広島中国新聞	●枕の弾傷 乃木將軍の訓戒《在呉一記者》	
123	大正1年	9	21	鹿兒島新聞	●乃木夫人の人格 ▲尋常の烈婦に非ず □息の欠点を挙げて教育者に語る《芹沢登一氏》▲花の如き洋装の中に一人緋の袴《石黒男爵の談》 ▲宿屋を驚かす ▲家風の遺訓	芹沢登一は「今より十五年前乃木大将家の家庭教師を囑託せられたる」人
124	大正1年	9	22	下野新聞	●乃木將軍の別荘 思出多き那須野の秋 花に早きコスモス 秋雨の音の如く落つ 噫嗟淋し、悲し 無頓着な中農の家	
125	大正1年	9	22	福岡日々新聞	○旅順土産の鎌《乃木大将の親族大館氏談》	
126	大正1年	9	22	函館毎日新聞	●九星の話（廿八）乃木大将の性格（上）《京都 広田花月》	
127	大正1年	9	22	福岡日々新聞	▲乃木將軍と本邦	「宮崎より」欄
128	大正1年	9	22	小樽新聞	△乃木大将追弔演説会▽	「悪い事は云はんから演説は抜きにして追弔会だけに止めて置き給へ」
129	大正1年	9	22	山形〔山形新聞or山形日報or山形新報〕	[乃木將軍に対する追悼詩歌] 自由短語	「見聞雑記」欄
130	大正1年	9	22	静岡民報〔静岡公報or静岡新報カ〕	●涙ある雄将《小島少将談》	藤枝に隠退している小島好問（予備役の陸軍少将）を記者が訪う
131	大正1年	9	22	下野新聞	●野木村の大将弔悼	下都賀郡野木村野木神社の社司が18日上京、村民一同は追悼式挙行
132	大正1年	9	22	東洋日出新聞	●乃木將軍追悼会	23日午後2時より長崎市今籠町大音寺にて勤行
133	大正1年	9	22	広島中国新聞	●乃木家の礼状	広島市長の弔電に対する礼状
134	大正1年	9	22	新愛知	●乃木將軍逸話（三） ▲嚴父と帶劍 ▲馬が可哀さうだ ▲外套と炭を斥く	
135	大正1年	9	23	新愛知	●乃木大将追悼会 ●追悼会と参列申込	23日午後6時より愛知県会議事堂に開催
136	大正1年	9	23	岐阜日々新聞	●思出づる乃木將軍 ▲依田岐早中学校長談（承前） ▲無造作な揮毫 ▲お断り申す ▲時間の厳守 ▲忙しい四時間	依田喜一郎（岐阜中学校長）
137	大正1年	9	23	高田	●乃木將軍追悼会	直江津町在郷軍人分会が22日午後4時より光明寺にて
138	大正1年	9	23	芸備日々新聞	[例の谷本博士が神戸高商で乃木大将の事を云々した処生徒が騒然として噪ぎ立ち]	「耳窓日録」欄
139	大正1年	9	23	京都日出新聞	●兩善光寺と乃木將軍	
140	大正1年	9	23	福岡日々新聞	○乃木大将の追懐《山根第十二師団長談》	「雑報」欄。山根武亮(第12師団長)
141	大正1年	9	23	神戸又新日報	●乃木大将忠魂碑建立	明石郡の有志が明石丸丸山上に記念忠魂碑の建設を協議決定
142	大正1年	9	23	山陰新聞	●芝居で見る陣屋 ▽夫人を追ひ帰したる乃木將軍	「乃木將軍と親交ありし退職奥田歩兵中佐の談なり」
143	大正1年	9	24	信濃毎日新聞	其人格を仰いで其死を見るな（下）	
144	大正1年	9	24	神戸又新日報	●ナイムー夫人 ▽乃木大将の司令部跡 ▲二ヶ月間の司令部 ▲劍山の占領 ▲建物と建札 ▲乃木大人の徳望	
145	大正1年	9	25	日本電報通信	[山県公は乃木大将に対してただ不興の噂、ほか]	「閑談語」欄
146	大正1年	9	26	横浜貿易新報	[京都大学の谷本博士は乃木大将の自刃に対して異論あり、ほか]	「時言閑語」欄
147	大正1年	9	26	東洋新報	●馬丁の見たる故將軍	「十年間乃木大将の馬丁たりし谷田某」

「学び舎の乃木希典」展覧書

148	大正1年	9	25	河北新報	噫乃木將軍（六）《隠士鏡軒》夫人の香川下り（続）琴平に両雄の邂逅	
149	大正1年	9	25	いばらき	●妾もお蔭で墨磨りの名人になりました▽乃木夫人の諧謔	
150	大正1年	9	25	下野新聞	●嗚呼乃木將軍△余は大将崇拜者なり《新渡戸博士談》	
151	大正1年	9	25	高田	●乃木將軍追悼式	直江津町在郷軍人会にて22日午後4時より光明寺に於て
152	大正1年	9	25	高田	●乃木將軍追悼会	直江津在郷軍人分会にて22日午後4時より光明寺に於て
153	大正1年	9	25	広島中国新聞	○追悼法会と仏教演説会	広島市山崎町本行寺に於て23日に彼岸法要を兼ね追悼法会
154	大正1年	9	24	九州〔九州日々新聞or九州新聞〕	●乃木大将の追弔式 五高防長会の主催	昨23日午前11時より熊本市内京町加藤神社々務所に於て
155	大正1年	9	25	千葉毎日新聞	▲武士道新生命《遠山町長談》	
156	大正1年	9	25	千葉毎日新聞	▲倭魂の権化《藤代弁護士談》	後欠
157	大正1年	9	27	横浜貿易新報	○山鹿素行先生と乃木大将を悼む△二偉人を同時に悼△雨に流れる宗参寺	
158	大正1年	9	27	横浜貿易新報	○北雪に印せし乃木大将の美德△將軍の親戚井上包太郎氏談▼塩鱈に舌鼓打つ▼雪袴を奨励す▼無用の長物のみ▼一小学生より学ぶ▼博く知識を求む	「故乃木大将と不思議の縁に当る北海道石狩国空地〔ママ〕郡瀧川屯田尋常高等小学校々長井上包太郎氏」
159	大正1年	9	25	北国新聞	故乃木將軍銅像建設の議《今枝恒吉》	
160	大正1年	9	25	東洋日出新聞	●誠実を以て修められし乃木二靈追悼会	一昨日午後2時長崎市今籠町大音寺に於て執行した各宗連合並に山口県人主催の乃木大将夫妻追悼法要
161	大正1年	9	25	呉日々新聞	●將軍と赤穂義士	
162	大正1年	9	25	呉日々新聞	●乃木大将夫妻の追弔法会 静子夫人の令姪参拝	一昨日午後1時より湯船下禪利神応院に於て
163	大正1年	9	26	神戸又新日報	●乃木大将と岩沼町	
164	大正1年	9	26	扶桑新聞	●市長失言に対する名士の所見（承前）▲野村朗氏▲御宿正定氏	名古屋市長阪本鈺之助氏の失言に対する市會議員諸氏の意向
165	大正1年	9	26	千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想（つづき）▲崇高の殉死《筒井医学博士談》▲凡人と非凡人▲責任論と憤死論▲医学の為に感謝▲是れ向上の一念	
166	大正1年	9	26	神戸又新日報	●乃木將軍追悼講演会	東北修養会が10月5日前後に片平丁神宮（仙台大神宮）に於て
167	大正1年	9	26	新愛知	●阪本市長の陳告	
168	大正1年	9	26	東洋新報	●乃木將軍遺愛の福祿寿	
169	大正1年	9	26	神戸又新日報	噫乃木將軍（七）《隠士鏡軒》風紀に関する注意	
170	大正1年	9	28	横浜貿易新報	〔御大葬の葬場殿と乃木大将墳墓を拝観する者の心構えについて〕	「時言閒語」欄
171	大正1年	9	22	鹿児島新聞	●乃木夫人追悼会《吉田將軍の談》	乃木静子の従妹である吉田豊彦（陸軍中將）の21日報徳会での講演大要
172	大正1年	9	23	鹿児島新聞	●百発を打て 日州の野と乃木將軍	
173	大正1年	9	22	鹿児島新聞	●先帝と乃木將軍《奈良原男追懐談》	奈良原繁（男爵）が往訪の記者に語る
174	大正1年	9	25	広島中国新聞	●乃木大将追弔会△湯船山下神應院に於て	式で詠まれた弔詩（漢詩）・弔歌（短歌）あり
175	大正1年	9	26	下野新聞	●乃木將軍の別荘（三）思出多き那須野の原 飄然として去来せり 山廻りの將軍 夫人の百姓振り 鎮守祭礼の宿 作物の生育は何した お産は心配なもの	
176	大正1年	9	26	函館毎日	福島日より（廿四日福山特置員発）▲偉人の追悼	
177	大正1年	9	26	下野新聞	噫乃木さん《でんはち》	「乃木大将に関する寄書」欄
178	大正1年	9	27	千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想（つづき）▲大将に得たる教訓《海塩中学校校長談》▲千秋一死尊《永井赤十字支部幹事談》	海塩錦衛（千葉県立千葉中学校校長）
179	大正1年	9	27	河北新報	噫乃木將軍（八）《隠士鏡軒》死す者一人もなし 北清事件の余波	
180	大正1年	9	27	扶桑新聞	●市長失言に対する名士の所見（承前）▲堀田幾三郎氏	名古屋市長阪本鈺之助氏の失言に対する市會議員諸氏の意向
181	大正1年	9	27	新愛知	●乃木大将追悼会	暴風雨で延期となった追悼会は28日午後6時より愛知県会議事堂に於て開催
182	大正1年	9	27	いばらき	●今にして思ひ当る乃木大将の書簡▽一旦受け贈物を返す	写真あり「乃木大将の書簡」
183	大正1年	9	28	豊国新聞	乃木將軍愛読書 学習院教授有馬祐政氏は左の如く語る	
184	大正1年	9	28	日本電報通信	●乃木邸の跡始末	
185	大正1年	9	29	横浜貿易新報	乃木大将を悼みて	「貿易歌壇」欄、短歌13首
186	大正1年	9	29	豊国新聞	至誠の家	
187	大正1年	9	29	豊国新聞	ローマ字と將軍 ▲単に昔風の武士に非ず ▲ローマ字の宣伝者 ▲東瀛の間でローマ字論	「熱心なローマ字論者にして日本式綴方の主張者なる田丸卓郎博士は乃木將軍とローマ字について左のやうに語つた」

188	大正1年	9	17	台南新報	●古武士の風格 ▽乃木大将を訪へる▽督府某事務官の談 ▲武士道の伝統者 ▲真率なる夫人 ▲水牛の皮の敷物 ▲大将の至孝	
189	大正1年	9	17	台南新報	●乃木大将の印象 ▽萩野少将の追懐	萩野末吉(台湾第2守備隊司令官)
190	大正1年	9	18	台南新報	●故大将追弔会 ▽内地人協会第一著の事業	内地人協会準備会の席上会衆一同賛成
191	大正1年	9	28	河北新報	噫乃木將軍(九)《隠士鏡軒》 將軍善通寺を去る	
192	大正1年	9	28	富山日報	○將軍記念の幅 ▼殉死間際の執筆	写真あり。「婦負郡八尾町字上新町石戸長太郎(三八)氏」
193	大正1年	9	28	神戸又新日報	●江湖片々	乃木学習院長の後任説
194	大正1年	9	28	小樽新聞	●公会堂で故將軍追弔	29日午後6時より公園内の公会堂に於て開催に予定変更
195	大正1年	9	28	神戸又新日報	●將軍と南天棒 ▽某平生は悟道より来る ▽干物に酒一陶 ▽バンザイバンザイ	
196	大正1年	9	28	上毛新聞	●大将に御礼を忘る 三郷在郷軍人恐懼	佐波郡三郷村の表忠碑揮毫について
197	大正1年	9	28	山陽新報	●乃木夫人の姪を訪ふ ▲摂津軍医長夫人	乃木静子実姪の軍艦摂津軍医長秋田松二郎氏夫人の談話
198	大正1年	9	28	扶桑新聞	●市長失言に対する名士の所見(承前) ▲安東敏之氏 ▲井上茂兵衛氏	名古屋市市長阪本彰之助氏の失言に対する市議員諸氏の意向
199	大正1年	9	28	北海タイムス	●小樽乃木將軍追悼会	29日午後6時より公園内公会堂に於て開會する筈
200	大正1年	9	28	千葉毎日新聞	○乃木大[将に対する感想(つづき)] ▲自殺の倫理観《青木牧師談》	タイトル破れにより欠
201	大正1年	9	29	千葉毎日新聞	○乃木大将に対する感想(つづき) ▲日本の守護神《荻生医学学校長談》 ▲大将の智的方面《長谷川警察部長談》	荻生録造(千葉医学専門学校校長)、長谷川久一(千葉県警察部長)
202	大正1年	9	29	神戸又新日報	●楠氏の遺跡に將軍の英霊を弔ふ ▽盛んなりし昨日の追悼式 ▼式場の内外《婦人記者》	昨28日午後1時より湊川遊園地にて
203	大正1年	9	29	扶桑新聞	●市長失言に対する名士の所見(承前) ▲伊藤由太郎氏 ▲伊藤繁丸氏	名古屋市市長阪本彰之助氏の失言に対する市議員諸氏の意向
204	大正1年	9	29	河北新報	噫乃木將軍(十)《隠士鏡軒》 赤坂邸の新築 山鹿自筆の配処残筆	
205	大正1年	9	29	扶桑新聞	●將軍以て瞑す可し 昨夜の追悼会と演説	28日午後6時より愛知県会議事堂に於て
206	大正1年	9	27	京城日報	内外片々	
207	大正1年	10	1	東洋新報	●乃木將軍と光山	楽焼師堀川光山が学習院に陶器原料と器械類一式を寄贈した御礼の乃木揮毫扇面の内容
208	大正1年	10	1	横浜貿易新報	○哀詩「双殉行」△乃木大将夫妻の殉死を悼みて 双殉行《井々居士》	「井々居士竹添進一郎氏」の漢詩
209	大正1年	9	20	琉球新報	○故乃木大将追悼会	那覇区内久茂地本願寺にて昨19日午後8時より
210	大正1年	9	22	琉球新報	○武士の典型乃木大将軍《八巻太一》	
211	大正1年	9	27	京城日報	●乃木將軍追悼会	京城府永楽町本派本願寺にて26日午後1時より
212	大正1年	9	27	[不明]	●乃木大将追悼□□ ▲総泉禪□□	破れにより冒頭下部欠。総泉寺に於て(鳥取県米子カ)
213	大正1年	9	27	長崎	●厳かなる追悼会 ▲光源、光永、西勝三寺に於る	昨26日に長崎市伊良林光源寺・桶屋町光永寺・東仲町西勝寺にて
214	大正1年	9	27	鹿児島新聞	[山鹿先生と乃木伯の関渉、ほか]	「荒村雑筆」欄
215	大正1年	9	28	東洋日出新聞	旧日本?新日本?	破れにより冒頭下部欠
216	大正1年	9	29	富山日報	▲乃木大将追悼会	「各種の会合」欄。富山市梅澤町日蓮宗立像寺に於て一昨日正午より
217	大正1年	9	29	福岡日々新聞	○乃木大将銅像記念碑	山口県豊浦郡長府町二の宮社内公園地へ
218	大正1年	9	29	高田	●本県に於ける乃木將軍の逸話 ▽香々のお代りて昼食▽貧乏士は之で沢山だ	
219	大正1年	9	29	高田	●絶句を電送して励ます ▽戦死の電報を待つ▽堀内少将んも談片	
220	大正1年	10	3	東洋新報	●乃木夫人の追悼法会	酬恩社婦人部にて来る6日午前10時より浅草今戸称福寺に於て
221	大正1年	10	3	横浜貿易新報	○乃木大将の高徳一類の栗実も尊し △乃木おこし乃木団子△停留場まで名が変る	
222	大正1年	9	30	河北新報	噫乃木將軍(十一)《隠士鏡軒》 三十七八年戦役	
223	大正1年	10	1	河北新報	噫乃木將軍(十二)《隠士鏡軒》 双玉並びに砕く	
224	大正1年	10	2	河北新報	噫乃木將軍(十三)《隠士鏡軒》 双玉並びに砕く(つづき)	
225	大正1年	9	28	鹿児島新聞	●乃木將軍追悼講演会	28日午後7時より上町共立学舎に於て国体擁護会員と市内有志者合同にて
226	大正1年	9	28	京城日報	●乃木將軍追悼会	釜山実業同志会主催にて29日午前10時龍頭山神社に於て
227	大正1年	9	28	下野新聞	●乃木神社建立計画 那須郡有志の希望	石林字民の乃木神社建設の第一回相談会開催

「学び舎の乃木希典」展覧書

228	大正1年	9	28	馬山新報	●乃木將軍の追悼会	釜山実業同志会主催にて29日午前10時龍頭山神社に於て
229	大正1年	9	28	朝鮮	●乃木大将追悼式	29日午前10時より龍頭山にて当地実業同志会の主催
230	大正1年	10	1	河北新報	●乃木大将追悼会	東北修養会々員主催で5日午後6時より片平丁神宮社内に於て
231	大正1年	10	1	京都日出新聞	●乃木夫人静子の甥を訪ふ《馬場京阪電鉄技師談》	「京阪電鉄株式会社運輸課長技師馬場齋吉氏」
232	大正1年	9	30	福岡日々新聞	○乃木大将追悼会 昨日秋雨肅々中挙行	福岡市議員発企で昨日午前8時半より東公園亀山上皇銅像下に於て
233	大正1年	10	2	河北新報	●乃木大将追悼法会	明3日午後3時より新寺小路松音寺に於て
234	大正1年	10	2	神戸又新日報	●將軍と楠公と赤穂義士▽桂弥一氏の談	
235	大正1年	9	29	朝鮮	[釜山に乃木將軍の記念碑を作ると云ふ]	「余滴」欄
236	大正1年	9	29	朝鮮	●召物は木綿か紬に限る 乃木大将夫人の事	「鹿児島島の某将校婦人の談に曰く」
237	大正1年	9	29	鹿児島新聞	[乃木への先帝の御信任、ほか]	「輪転記」欄
238	大正1年	9	29	鹿児島新聞	○乃木大将談話会	26日都城男子小学校に於て
239	大正1年	9	30	門司新報	●乃木大将追悼会 福岡市議員主催	昨29日福岡市東公園に於て
240	大正1年	9	30	門司新報	●筐の軍服軍刀 洋服屋の見た乃木大将 ▲心持腰が曲る ▲絹裏は勿体ない ▲衣襷は一夏半打 ▲自刃用の軍刀 ▲渡英の際の背広	「廿数年来乃木大将の軍服及び軍刀調製の御用を勤めて居た東京芝区露月町寿屋商店高島氏の話」
241	大正1年	10	1	秋田〔秋田魁新報or秋田時事or秋田毎日新聞〕	○嗚呼乃木將軍	杉謙二氏編纂で今回東京至誠社より出版
242	大正1年	10	1	高田	●乃木將軍と高田▽少将堀内文治郎 五八将士及高田市民へ	
243	大正1年	10	2	芸備日々新聞	●乃木夫人の書簡 ▲附り大将父子の書簡▲逸見晴三郎氏の所蔵 ▲乃木大将夫人静子刀自自筆の書簡 ▲乃木大将の書(絹本) ▲日露戦役の際旅順包囲軍に参加せる乃木少尉(保典)氏よりの書簡	「本市大手町三丁目横浜火災株式会社広島出張所員逸見晴三郎氏」
244	大正1年	10	4	横浜貿易新報	●乃木大将追悼会	横浜市内野毛町高野山出張所大聖院に於て今4日午後2時より
245	大正1年	10	4	豊国新聞	[学習院長の後任について]	「活殺自在」欄
246	大正1年	10	4	横浜貿易新報	[乃木の愛読書について]	「時言閑語」欄
247	大正1年	10	7	横浜貿易新報	時代漫評《暮村隠士》	
248	大正1年	10	3	いばらき	●乃木大将追悼式	北相馬郡取手町にて近々の内に
249	大正1年	10	4	河北新報	噫乃木將軍(十五)《隠士鏡軒》夫人湯地氏の逸事	
250	大正1年	10	4	河北新報	●乃木大将追悼会	昨3日午後3時より新寺小路松音寺に於て
251	大正1年	10	4	河北新報	●乃木大将追悼講演会	明5日午後6時より片平町神宮に於て
252	大正1年	10	1	朝鮮	●乃木大将夫人追悼式	実業同志会主催で一昨日午後10時より龍頭山頂の広場に於て
253	大正1年	10	2	福岡日々新聞	○乃木大将追悼会	小倉歩兵第14聯隊にて今2日午後0時30分より同聯隊營庭に於て
254	大正1年	10	3	河北新報	●乃木大将追悼講演会	明後5日午後6時より片平町神宮に於て
255	大正1年	10	4	いばらき	●乃木大将と水戸△水戸学著書の愛読	
256	大正1年	10	4	いばらき	●乃木大将追悼祭	去29日筑波郡上郷村別雷神社々頭の日露戦役記念碑前に於て
257	大正1年	10	2	京城日報	●乃木大将追悼会 京大諸博士の口演	大日本武徳会附属武術専門学校の主催にて28日午後2時より京都武徳会本部にて
258	大正1年	10	3	河北新報	噫乃木將軍(十四)《隠士鏡軒》涙の歓迎 將軍二典の墓を営む 中朝事実を贈らる	
259	大正1年	10	5	横浜貿易新報	●乃木將軍追弔 ▲鎌倉和合団の第一着歩	「鎌倉方面」欄
260	大正1年	10	2	山陽新報	[乃木が自費刊行した素行・松陰の著書を乃木本と称して尊重せんと云ふ井上哲次郎博士の説について]	「東京より」欄
261	大正1年	9	30	馬関毎日新聞	●乃木大将追悼会《釜山支局報》	釜山実業同志会主催で昨29日午前10時より龍頭山上に於て
262	大正1年	9	30	馬関毎日新聞	●筆の雫	
263	大正1年	10	1	関東タイムス	●乃木將軍墓守の出願	群馬県館林町矢木宮三郎(23)が 出京して青山警察署へ出頭
264	大正1年	9	30	鹿児島新聞	●乃木將軍追悼講演会	一昨28日共立学舎に於て
265	大正1年	9	27	台南新報	●賊軍の将軍前に泣く	
266	大正1年	9	29	松陽新報	乃木大将の薨去を悼みて《岡本重昌》／乃木大将の殉死をいたむ《嶋多豆夫》／おなしく夫人静子をかなしむ／嗚呼乃木將軍《内藤訥堂》／乃木伯爵夫人	短歌・俳句など計7首

267	大正1年	10	1	北国新聞	[乃木の自刃について]	「一顰一笑」欄
268	大正1年	10	1	北国新聞	偶感《在東京 森川生》	
269	大正1年	9	30	山陰新聞	●陣中の乃木大将 △落合軍医監談 ▲兩典の死は幸福 ▲真似られぬ点 ▲外套を旧主人の子に ▲外国武官に甘諾	落合泰蔵（日露戦争当時の第3軍軍医部長）
270	大正1年	10	5	上毛新聞	●乃木大将の遺影	前橋市内曲輪町の猪谷写真店より頒布（猪谷学習院学生監が同店主の実弟）
271	大正1年	10	4	下野新聞	再び乃木將軍と贈答せし書翰に就て《横堀三子》 作問氏より三子氏に寄せし書翰	
272	大正1年	10	4	北海タイムス	●留萌時事（二日支局報） △乃木大将追悼会	29日正覚禪寺に於て
273	大正1年	10	4	九州	▲故乃木伯追悼会	皇典講究所主催で今3日午後1時より國學院大學に於て
274	大正1年	10	3	門司新報	●乃木大将招魂祭 昨日小倉連隊に於て	昨2日午後0時30分より小倉歩兵第14聯隊宮庭の娛樂場に於て
275	大正1年	10	8	豊国新聞	■遊就館の乃木室■	
276	大正1年	10	3	福岡日々新聞	○乃木大将追悼会	「雑報」欄。小倉歩兵第14聯隊にて昨日午後0時半より
277	大正1年	10	1	馬山新報	●乃木大将の追悼会	29日釜山龍頭山上に於て
278	大正1年	10	5	河北新報	●乃木大将追悼講演会	本日午後6時より片平町神宮に於て
279	大正1年	10	5	河北新報	噫乃木將軍（十六）《隠士鏡軒》 夫人の逸事 殉死に就いて	
280	大正1年	10	3	芸備日々新聞	乃木大将と旅順《陸軍少将 伊豆凡夫氏談》 ◎大将の為に弁ず ◎四億万円の要塞 ◎要塞の内部が知れぬ ◎正攻法を執る ◎乃木大将の子息 ◎余が命を伝える	
281	大正1年	10	5	神戸又新日報	●趙州露刃剣 ▲乃木大将と南天棒	西宮海清寺南天棒老師が3日の乃木大将追悼会席上語りて曰く
282	大正1年	10	5	神戸又新日報	●乃木大将追悼会	西宮町海清寺南天会下巨艦会の企催にて3日午後4時より海清寺本堂にて
283	大正1年	10	5	東洋日出新聞	●乃木大将追悼会（高商主催）	7日午前10時半より長崎高等商業学校講堂に於て
284	大正1年	10	5	朝鮮	●乃木將軍を詠す《案外》	短歌5首
285	大正1年	10	5	富山日報	○乃木大将追悼会	富山市在郷軍人分会が明6日午前10時総曲輪武徳会場内に於て
286	大正1年	10	6	河北新報	噫乃木將軍（十七）《隠士鏡軒》 婦人観、団体観 葬儀遙拜	
287	大正1年	10	7	河北新報	●乃木大将追悼会 ▲一昨夜の神宮奉齋会	東北修養会主催で一昨夜7時より片平丁神宮奉齋会に於て
288	大正1年	10	7	神戸又新日報	●再び乃木將軍と南天棒師	西宮南天棒老師の語る所
289	大正1年	10	10	横浜貿易新報	●乃木將軍追弔会	「鎌倉方面」欄。鎌倉郡川上村在郷軍人会有志者主唱で6日午後2時より同村小学校に於て
290	大正1年	10	4	台南新報	●乃木大将と台南	
291	大正1年	10	4	台南新報	●故乃木大将の祭典 ▲別室の展覧品	2日午後4時台南公館に於て
292	大正1年	10	6	鹿児島新聞	[乃木大将殉死の遠因たる丁丑役の聯隊旗奪取の事件について]	「万年筆」欄
293	大正1年	10	8	長崎	●乃木將軍と趙州露刃剣の偈《南天棒老師之談》	神戸西宮海清寺南天棒老師が語りて曰く
294	大正1年	10	8	山陰新聞	●高商の將軍追悼会	長崎高等商業学校にて7日午前11時同校講堂に於て
295	大正1年	10	9	扶桑新聞	●第三師団乃木大将追弔会	来る20日渡辺師団長主催の下に師団偕行社に於て
296	大正1年	10	8	酒田新聞	●乃木大将追悼会	弘道会飽海支会にて一昨日午後1時より酒田寺町浄福寺に於て
297	大正1年	10	8	岩手	●かくして小乃木を造れ △真摯なる乃木会の設立	神田青年会館内の鉄道青年会幹事益富政助氏が今回乃木会なるものを設立
298	大正1年	10	8	北国新聞	乃木將軍の片影—追悼演説の印象記—《東京 笹川生》	
299	大正1年	10	9	新愛知	●乃木大将追弔会	第3師団の追弔会は愈来る20日師団偕行社に於て
300	大正1年	10	9	芸備日々新聞	●火裏蓮	
301	大正1年	10	8	東洋日出新聞	●乃木大将追悼会 長崎高等商業学校講堂にて	昨日長崎高等商業学校講堂にて
302	大正1年	10	8	河北新報	噫乃木將軍（十八）《隠士鏡軒》 女傑を逐ふ	
303	大正1年	10	9	河北新報	噫乃木將軍（十九）《隠士鏡軒》 山鹿の学風	
304	大正1年	10	8	下野新聞	●將軍夫妻は神様です《橋本氏家駐長談》	西那須野停車場勤務中に知遇を得た現氏家駐長橋本嘉三郎氏の感話
305	大正1年	10	9	下野新聞	●乃木將軍の遺書に石林に五百金 △農民の感涙	那須郡狩野村大字石林民の代表が上京
306	大正1年	10	9	下野新聞	世界の乃木大将《在倫敦 松岡俊三》	「海外持信」欄
307	大正1年	10	10	河北新報	噫乃木將軍（二十）《隠士鏡軒》 学術品性 和歌漢詩	

「学び舎の乃木希典」展覧書

308	大正1年	10	11	横浜貿易新報	○乃木大将直筆の悶着 △抵富に入れて真偽の争ひ	偽筆の乃木大将直筆掛軸
309	大正1年	10	12	豊国新聞	●銘刀の切れ味 故將軍夫妻が周到なる注意	「故乃木大将の喪主たりし玉木砲兵少佐目下金沢聯隊に在り往訪の汽車に語つて曰く」
310	大正1年	10	9	九州日々新聞	●乃木將軍招魂祭の議	熊本市に於て招魂祭執行の議あり
311	大正1年	10	9	酒田新聞	●乃木大将哀悼文 ▲土方副支会長の弔辞 ▲徳川会長の弔辞 ▲献詠の和歌漢詩等 ▲陳列品	日本弘道会飽海支会主催で6日浄福寺に於て挙行の哀悼文・陳列品等
312	大正1年	10	10	浜松新聞	○乃木大将追悼会	浜名郡豊西村中善地区の撫松庵に於て去る8日午後3時より
313	大正1年	10	13	東洋新報	●乃木大将追悼式（山口）	本日午後2時大殿小学校にて
314	大正1年	10	13	東洋新報	●乃木將軍の卅日祭	12日午前11時より
315	大正1年	10	11	扶桑新聞	[愛知県会議事堂での乃木大将追悼演説会に対する二六新報の報道は曲解]	「黄金ペン」欄
316	大正1年	10	11	岐阜日々新聞	●乃木將軍追悼会	岐阜市在郷軍人団が新嘗祭当日に伊奈波社に於て開催予定
317	大正1年	10	10	松陽新報	●乃木大将追悼祭	12日大社教本院にて千家管長主催にて
318	大正1年	10	11	山陽新報	●乃木大将追悼講演会	岡山医学専門学校々友会講演部に於て12日午後1時より同校控室に於て
319	大正1年	10	10	山陰新聞	●乃木陸軍大将と南天棒老師	西宮南天棒老師の云ふを聞く
320	大正1年	10	11	河北新報	●地方雑信	名取郡長町瀧澤寺に於て去る8日に大施餼会を勤修
321	大正1年	10	11	河北新報	噫乃木將軍（廿一）《隠士鏡軒》 殉死の先例	
322	大正1年	10	12	河北新報	噫乃木將軍（廿二）《隠士鏡軒》 女性の殉死 將軍の肖像	
323	大正1年	10	15	豊国新聞	■將軍墓前の玉申■	
324	大正1年	10	16	横浜貿易新報	[シユレーダア氏発起の乃木会について]	「時言閒語」欄
325	大正1年	10	8	台南新報	●乃木將軍祭典寄贈	2日台南公館に於て挙行の祭典に寄贈少からず
326	大正1年	10	12	北国新聞	茶の煙	
327	大正1年	10	13	湖南日報	●故乃木將軍追悼会	群馬防長親睦会と民団役所の合同で催すことになる
328	大正1年	10	13	広島中国新聞	●乃木大将追悼会	広島赤穂義士追遠会有志の主催にて昨12日午前10時広島市大手町五丁目神宮奉斎会本部に於て
329	大正1年	10	13	馬関毎日新聞	●乃木大将追悼会	昨12日午後2時より山口町の大蔵小学校に於て
330	大正1年	10	14	馬関毎日新聞	●乃木神社建設	長府町にて乃木神社建設費を募集すべく準備計画中
331	大正1年	10	13	中国民報	○乃木大将追悼講演会	岡山医学専門学校講演部の主催にて12日午後1時より学生控所に於て
332	大正1年	10	13	大獅子	乃木將軍と信仰《棲叢》	正式紙名不明
333	大正1年	10	13	根室新聞	●乃木將軍の奉悼会	本日帝国在郷軍人会根室分会が表忠碑境内に於て
334	大正1年	10	13	信濃毎日新聞	●乃木大将追悼会	東筑摩郡嶋立村字南栗林の正行寺にて13日正午より
335	大正1年	10	15	信濃毎日新聞	●乃木大将追悼式	佐々木高綱の墳墓地たる東筑摩郡嶋立村北栗林の正行寺に於て執行
336	大正1年	10	17	神戸又新日報	●乃木將軍宝塚追悼演説会	15日午後5時より宝塚宝遊館に於て
337	大正1年	10	14	岐阜日々新聞	●乃木大将追悼祭《十三日高山電報》	本日八幡神社境内に於て
338	大正1年	10	16	扶桑新聞	●曹長の乃木神社	愛知県豊明村字栄84番戸後備憲兵曹長浜島伊三郎氏自邸内の乃木神社竣工
339	大正1年	10	15	岩手	●八戸特報（十月十三日）▲乃木將軍追悼会	13日午後1時より八戸老年会主催となり長者小学校講堂に於て
340	大正1年	10	14	山陰新聞	●乃木大将追悼祭	去る12日午後1時より簸川郡杵築町の大社教本院に於て齋主千家管長
341	大正1年	10	15	京城日報	●乃木大将追悼式	京城在住有志者発起となり13日午後1時より京城ホテルにて
342	大正1年	10	15	尾三新聞	●乃木大将の密書 上野知多郡長の手在り	
343	大正1年	10	15	函館毎日新聞	●乃木將軍追悼会 △八戸町立長者小学校に就て	八戸老年会発起となり去る13日午後3時半より
344	大正1年	10	14	北海タイムス	●月形村に住む乃木將軍親戚 ▲乃木家の家系 ▲井上家の系統 ▲津奈子乃木家を思ふ ▲突然の訪問	写真あり（井上津奈子宛て乃木希典書簡、明治29年3月23日）。

345	大正1年	10	13	佐賀〔佐賀新聞or佐賀日々新聞〕	●乃木大将は立腹…弔電一万五千通…	
346	大正1年	10	15	佐賀	●乃木大将の日常生活《東京 井上胤文》 ▲乃木大将の寝室 ▲終始寮舎に宿泊せられた ▲大将の白手袋 ▲大将の生活費は一日四十銭 ▲香の物に醤油を用ひられず	
347	大正1年	10	12	広島中国新聞	●乃木大将追悼会	市内婦人有志者發起により来る30日午後正1時広島高等女学校講堂に於て
348	大正1年	10	16	福岡日々新聞	○東京より（十三日）《八千八聲山房主人》	
349	大正1年	10	16	馬関毎日新聞	●乃木大将追悼会	門司市有志者が来る11月3日に開催の筈
350	大正1年	10	15	根室新聞	●故乃木將軍の追悼会	一昨13日帝国在郷軍人会根室分会にて午後3時より表忠碑境内に於て
351	大正1年	10	15	馬関毎日新聞	●筆の雫	長府の乃木神社建設計画について
352	大正1年	10	17	東奥日報	●八戸たより（十四日）▲乃木將軍追悼会	13日午後1時より八戸老年会主催にて長者小学校に於て
353	大正1年	10	17	長崎	●大野の乃木將軍追悼会	去る13日北松浦郡大野村の西蓮寺に於て
354	大正1年	10	17	秋田	○乃木將軍の逸事《霞城記》 ▲秋田に於ける大将の半日《大久保市長談》	大久保鉄作（秋田市長）
355	大正1年	10	22	東洋新報	●乃木將軍の四十日祭	22日午前11時より赤坂新坂町の乃木大将邸に於て
356	大正1年	10	15	樺太日々新聞	●乃木將軍追弔会	大泊通町西本願寺別院にて一昨13日午後1時より
357	大正1年	10	18	山陽新報	〔読書人としての乃木大将について〕	「東京より」欄
358	大正1年	10	19	高田	■崇高なる犠牲的行為■《五味監督判事》	「一日一話」欄
359	大正1年	10	20	京都日出新聞	●乃木將軍追悼講演会	24日午後6時より高倉通万年寺下る稚松尋常小学校にて
360	大正1年	10	20	京都日出新聞	●乃木大将と銅像 大浦子と大森知事	
361	大正1年	10	20	福岡日々新聞	○乃木大将親《加藤弘之男談》	
362	大正1年	10	20	芸備日々新聞	●乃木大将夫人追悼会	本日午後1時より有志婦人会發起により
363	大正1年	10	21	扶桑新聞	●師団の乃木祭 祭主は渡邊師団長	渡辺章第3師団長主催で昨20日午前9時より名古屋借行社内に於て
364	大正1年	10	22	日本電報通信	●乃木將軍大弔祭会 ▲来月三日芝公園に執行	都下各新聞通信の有志記者主唱の国民的な大弔祭会を執行予定
365	大正1年	10	22	新愛知	●乃木大将追悼祭	渡辺章第3師団長主催で昨20日午前9時より名古屋借行社に於て
366	大正1年	10	20	秋田	○北人南況《橘生》	
367	大正1年	10	20	山陰新聞	●乃木將軍銅像建設の議《東京帝国大学生 小川弥太郎》	
368	大正1年	10	20	松陽新報	●乃木將軍逸話 ▲粗食と勉学《元副官塩田大佐談》	
369	大正1年	10	21	山形	●乃木將軍の感化 ▼山形市内質素の風	
370	大正1年	10	21	北海タイムス	●乃木將軍追悼会	13日樺戸郡月形村小学校に於て
371	大正1年	10	22	いばらき	●乃木大将追悼会	北相馬郡取手町在郷軍人及び同町有志が会合し11月1日に挙行決定
372	大正1年	10	24	豊国新聞	■將軍夫妻大弔祭会■—来月三日日比谷で—	都下新聞通信有志記者らの主唱で11月3日に日比谷公園内に於て
373	大正1年	10	24	横浜貿易新報	○五千円の貸金 証文一通も無き ▲乃木大将追懐談	「横須賀市」欄。葉山村青年会堀内支部会は一昨22日午後7時より大会を開き元乃木大将副官の塚田清市大佐の実話あり
374	大正1年	10	21	広島中国新聞	●乃木夫人追悼会 ▲昨日於県立高女講堂挙行	昨日午後1時40分より県立広島高等女学校講堂に於て
375	大正1年	10	22	山形	〔山形で乃木の殉死以来質素の風が起った〕	「見聞雑記」欄
376	大正1年	10	25	東洋新報	●乃木大将の歌 ▲省議に上り検定済となる	東京音楽学校教授吉丸一昌氏の作歌・学習院助教授小松玉巖氏の作曲
377	大正1年	10	23	下野新聞	輓乃木將軍次小峴詞宗詩礎將軍会见贈肖像七八故及《横堀鉄研》／同三首《同人》／同次將軍富岳詩韻二首／同用梅村郡宰詩韻	「文苑」欄。漢詩6首
378	大正1年	10	23	芸備日々新聞	●乃木大将追悼会	帝国在郷軍人会可部分会主催にて明24日午後7時より品窮寺に於て
379	大正1年	10	23	山陰新聞	●乃木大将追悼会	来る31日午後1時より八束郡乃木村善光寺に於て
380	大正1年	10	24	下野新聞	●乃木神社建立議 有志熱心に運動す	那須郡有志の石林に乃木神社建立の進行

「学び舎の乃木希典」展覧書

381	大正1年	10	24	広島中国新聞	●乃木大将追悼講演会	広島市外己斐町の己斐小学校にて明25日午後8時より
382	大正1年	10	25	山陽新報	本日の招魂祭 故乃木大将追悼兼修	
383	大正1年	10	29	東洋新報	●乃木將軍追悼会	大日本武術講習会が11月1日午後1時より神田橋和強楽堂に於て
384	大正1年	10	26	芸備日々新聞	●乃木大将追悼会	帝国在郷軍人会可部分会主催となり一昨24日午後7時より品窮寺に於て
385	大正1年	10	27	福岡日々新聞	○師団長時代に於ける乃木大将の書簡《渡邊佐賀連隊長の議》	写真あり(乃木が讃岐善通寺第11師団長時代の幕僚渡辺小太郎(佐賀歩兵第55連隊長)が秘蔵する乃木書簡)
386	大正1年	10	25	北海タイムス	乃木大将論(上) 六日弘道会札幌支部に於ける代議士浅羽靖氏の講演要旨	
387	大正1年	10	27	北海タイムス	乃木大将論(下) 六日弘道会札幌支部に於ける代議士浅羽靖氏の講演要旨	
388	大正1年	10	30	東洋新報	●華族会館役員の変更	
389	大正1年	10	29	日本電報通信	●乃木將軍夫妻弔祭会彙報	
390	大正1年	10	27	中国民報	著述家に関ふ《散木迂人》	
391	大正1年	10	27	高田	秋晴二日《柳下鱈》 將軍の墓に詣づ	
392	大正1年	10	27	馬関毎日新聞	●乃木大将追悼祭	11月1日午後3時より長府町豊浦小学校内敬業館に於て
393	大正1年	10	30	日本電報通信	●乃木將軍大弔祭会	11月3日正午より芝公園新運動場に於て
394	大正1年	10	29	神戸又新日報	●乃木將軍追悼演説会	26日午後7時より川辺郡宝塚の池田町川西座に於て
395	大正1年	10	31	東洋新報	●將軍の偽筆濫造 ▲一度は生ける將軍を驚か	
396	大正1年	10	31	横浜貿易新報	○乃木將軍追弔 ▲浄土本山光明寺に於て	
397	大正1年	10	28	松陽新報	●乃木大将追悼法会	31日午後1時より八東郡乃木村善光寺にて
398	大正1年	10	28	佐賀	●故乃木將軍国民大弔会	東京市内各新聞通信記者の発起により11月3日芝公園に於て
399	大正1年	10	28	中国民報	○乃木神社建立 ▽御野立所に面する地	備前上道郡可知村大字大羅芥子山の句々廻神社跡へ乃木神社建設を計画
400	大正1年	10	28	山陰新聞	●乃木將軍弔祭会	東京各新聞記者が発起となり11月3日に東京芝公園にて
401	大正1年	10	29	秋田	○故乃木將軍追悼法要	来る31日午後2時より由利郡本荘町仏教各宗合同宣正期成会主催となり浄土宗大然寺に於て
402	大正1年	10	31	扶桑新聞	●乃木大将追慕法会	名古屋市内門前町西別院に於て三重仏教教学財団主催となり明1日午後1時より
403	大正1年	11	1	豊国新聞	■乃木大将夫妻弔祭会■	11月3日正午より芝公園新運動場に於て
404	大正1年	11	1	東洋新報	●故將軍夫妻の大弔祭会	11月3日正午より芝公園新運動場に於て
405	大正1年	11	2	横浜貿易新報	○乃木大将五十日祭 ▲故將軍副官の追善	葉山村堀内の別邸に滞在中の元乃木大将副官塚田清市陸軍大佐が執行
406	大正1年	10	31	芸備日々新聞	●乃木大将追弔法会	安芸郡江田島村有志者の発起により去る27日午前9時より同村教法寺に於て
407	大正1年	11	3	豊国新聞	■乃木大将の俸給■	
408	大正1年	11	3	東洋新報	●將軍国民大弔祭 ▲愈々本日執行	本日正午より芝公園にて
409	大正1年	11	4	横浜貿易新報	哭乃木大将《横浜木村寧靜》/秋日送友《横浜康同鼎》	「貿易歌壇」欄、漢詩2首
410	大正1年	11	4	横浜貿易新報	○乃木大将国民大弔祭 ▲枯葉散り敷く芝公園の一角▲壇を設け千古の偉人を弔ふ ▲青山墓前の奉告祭 ▲道楽にて入場挙式 ▲各宗連動同大法要 ▲参拝者一万人に上	
411	大正1年	11	1	富山日報	○乃木將軍追悼会	新湊在郷軍人会は一昨30日正午より新湊町長徳寺町光正寺に於て
412	大正1年	11	2	岩手	●乃木大将追悼会彙報	2日午前中までに申込すべし
413	大正1年	11	2	岩手	●乃木大将追悼会	去る30日午後7時より稗貫郡花巻河口町浄土宗松庵寺に於て
414	大正1年	11	2	鹿児島新聞	●乃木大将五十日祭 赤穂義士追善会有志主催	広島赤穂義士追遠会有志が本市大手町5丁目神宮奉斎会本部に於て
415	大正1年	11	2	馬関毎日新聞	●乃木大将追弔会	明3日午前9時より小倉市米町永照寺に於て帝国在郷軍人会小倉分会発起となり

416	大正1年	11	3	岩手	●乃木將軍追悼会《一記者》	本日は盛岡市長其他の発起の当日
417	大正1年	11	3	九州	●乃木大将追悼会	来る13日午後3時より熊本市の武徳殿に於て開催、昨日発起人会を開く
418	大正1年	11	3	北国新聞	●乃木大将の祭祀 神霊たるべき遺品を求む	
419	大正1年	11	4	福岡日々新聞	○乃木大将追弔会	小倉在郷軍人分会主催で昨3日午前10時より米町永照寺に於て。昨3日午後1時より甘木町主催で甘木尋常小学校々庭に於て
420	大正1年	11	5	東洋新報	●自転車の産婆さん ▲乃木大将が自殺の発奮の因	
421	大正1年	11	4	馬関毎日新聞	●乃木大将記念事業協議	長府町にて故乃木將軍紀念事業の協議会を開催
422	大正1年	11	5	岩手	●乃木將軍追悼式 △莊嚴質素の内に終る	3日午前10時より盛岡市内丸の武徳殿内にて
423	大正1年	11	5	石見新聞	哭乃木將軍《百辛 橋本重平》	漢詩1首
424	大正1年	11	5	石見新聞	●乃木大将追悼会	去る1日午後当町小学校に於て
425	大正1年	11	6	山陽新報	●服部綾雄氏の乃木大将談 明治軍人の典型	服部綾雄（金川中学校長）
426	大正1年	11	6	京城日報	▲乃木將軍追悼祭	「木浦より」欄。11月1日午後4時半より松島神社境内に於て
427	大正1年	11	8	岐阜日々新聞	悼乃木將軍《雲涛 連亮》／大風吹倒庭前大樹戯作／秋山婦樵図／江上散策《城谷 柏木萬》／述懐《柳村 森雅樹》／探草《小碧 奥田芳男》／賞菊	「文苑」欄。漢詩7首
428	大正1年	11	8	新愛知	●乃木大将と教材	知多郡教育会が小学校修身教材に
429	大正1年	11	8	京都日出新聞	●乃木大将銅像に就て	伏見町有志者間の銅像建設計画
430	大正1年	11	12	京城日報	謁乃木將軍墓賦懷《正道学人》／壬子中秋無月	「漢詩」欄。漢詩2首
431	大正1年	11	13	京都日出新聞	乃木大将夫人歌《南豊 園田恒四郎（未定稿）》	「日出詩壇」欄
432	大正1年	11	15	横浜貿易新報	○学習院生徒の演習	行軍及び野外演習
433	大正1年	11	5	光州日報	乃木大将追悼祭	木浦官民の発起にて1日午後4時30分より松島神社境内に於て
434	大正1年	11	11	鹿児島新聞	●戦塵余録（其二）《九日宮崎町於大淀河畔 狐竹生》 △都城と乃木將軍	
435	大正1年	11	17	馬関毎日新聞	●乃木大将弔魂祭	門司有志の発起にて本日午前10時より甲宗八幡宮境内に於て
436	大正1年	11	19	東洋新報	●乃木大将追悼会（門司）	門司官民有志の発起にて18日朝10時より八幡宮に於て
437	大正1年	11	21	東洋新報	●乃木將軍に殉死	福岡県三養基郡基里村鶴田猛（17）が阿蘇山噴火口に投身
438	大正1年	11	23	小樽新聞	●興聖寺と乃木將軍	小樽区手宮裡町興聖寺別院にて12月5日創立七週年紀念大法会に合せて故乃木大将追悼法会を営む
439	大正1年	11	25	上毛新聞	●乃木大将の追悼会	高崎市上野日々新聞社主催にて昨24日午前10時より高崎公園英靈殿前に於て
440	大正1年	11	22	馬関毎日新聞	●乃木將軍記念事業委員会	長府町に於て
441	大正1年	12	4	京都日出新聞	●銅像木標撤去	
442	大正1年	12	9	鹿児島新聞	●乃木將軍夫妻追悼会	在郷軍人会鹿児島分会主催となり来る14日午後2時より照国神社境内に於て
443	大正1年	12	13	東洋新報	●乃木大将の遺墨 ▲日比谷図書館に陳列	
444	大正1年	12	15	鹿児島新聞	●乃木大将夫妻追悼祭 ▲祭典開始 ▲祭場と参列諸団体 ▲当日参拝者 ▲特志者寄附	14日午後2時より山下町鶴嶺山麓の照国廟畔に於て
445	大正1年	12	14	横浜貿易新報	○乃木大将の硯 ▲近き沙々貴神社に寄附さる	硯の名工なる東京浅草区東三筋町6大森頼三翁（63）
446	大正1年	12	14	豊国新聞	●乃木將軍遺愛の硯 ▼沙々貴神社に寄附	硯の名工なる東京浅草区東三筋町6大森頼三翁（63）
447	大正1年	12	15	山陰新聞	木次電話（十四日） ●乃木將軍追悼会	大原郡木次町洞光寺に於て13日午後2時より
448	大正1年	12	18	読売新聞	●故乃木將軍夫妻供養	来る12月21日午後1時より青山南町2丁目玉窓寺に於て
449	大正1年	12	19	東洋新報	●乃木將軍の銅像 ▲廃兵院へ寄附せらる	本郷区西片町の鑄金家齋藤清美（37）
450	大正1年	12	19	函館毎日新聞	●乃木將軍追悼祭	「雑報」欄。函館教育会主催にて21日午後1時より宝小学校に於て
451	大正1年	12	20	鳥取新報	●乃木大将百日祭	岩美郡教育会第一部会主催にて明21日午前10時より宇倍野第一尋常小学校に於て
452	大正1年	12	23	鳥取新報	●乃木大将百日祭	岩美郡第一教育会主催にて一昨日午前10時より宇倍野第一尋常小学校に於て

「学び舎の乃木希典」展覧書

453	大正1年	12	24	山陰新聞	●乃木將軍追弔会	迹摩郡温泉津町にて21日西楽寺に於て
454	大正1年	12	24	東奥日報	[弘前出身の彫刻家前田照雲氏は乃木將軍胸身像を製作して広く予約募集中]	
455	大正1年	12	25	高田	●雪艇季に入る 東部の学生団来高	「学習院学生三島、有嶋、内藤、二荒、三井、戸田、相馬の各貴公子は長岡師団長令息護一君と共に来高直接にレルヒ中佐の指導を受け」
456	大正1年	12	22	台湾日々新報	●乃木母堂祭典	27日午前9時より台北庁主催にて三板橋共同墓地に於て
457	大正1年	11	11	家庭新報	乃木將軍夫妻国民大弔祭会	「雑録」欄。11月3日芝公園地内に於て
458	大正1年	12	27	台南新報	●乃木將軍の遺物を観る《十七日 在京一記者》 ▼血染の襦衣 ▼腥気に打る ▼遺書に狂歌	
459	大正1年	12	28	台湾日々新報	●乃木母堂例祭	台北庁主催にて27日午前9時より墓地三板橋に於て
460	大正2年	1	1	石見新聞	●乃木大将追悼会	津和野小学校々友会鷺原部会が去月15日法音寺に於て
461	大正2年	1	3	松陽新報	乃木將軍と山中鹿之助《高橋龍雄》	
462	大正2年	1	8	馬関毎日新聞	●乃木神社設計 長府町経営事業	
463	大正2年	1	11	九州	●鬼將軍と乃木大将の銅像	京都市外深草村字山村の手伝業北宗こと北村宗次郎(59)が加藤清正と乃木の銅像作成中
464	大正2年	1	14	馬関毎日新聞	●柳井通信	山口県玖珂郡柳井
465	大正2年	1	19	福岡日々新聞[カ]	●乃木大将記念碑建設	紙名かすれ判読困難。大分県下毛郡上津村在郷軍人會にて
466	大正2年	1	19	京都日出新聞	●乃木大将銅像見合	紀伊郡深草村字山村請負師北村宗次郎が作成中
467	大正2年	1	21	京都日出新聞	●乃木將軍と小説	
468	大正2年	1	28	豊国新聞	●乃木邸保存内定	
469	大正2年	1	27	日本電報通信	●乃木邸保存内定	
470	大正2年	2	17	京都日出新聞	●伏見町より ▲名誉助役問題 ▲宇治川浜地払下問題 ▲乃木大将銅像問題	
471	大正2年	2	22	大坂朝日新聞	●乃木大将講演会	23日午後6時より西区立売堀南通1丁目の金光教大阪境界所に於て
472	大正2年	2	20	弘前新聞	○明治最末史を飾る老將の面影 ▽藤崎村乃木將軍追慕会	2月23日午前10時より藤崎小学校にて
473	大正2年	3	9	徳島日々新聞	●忠実なる軍神の僕 ▲乃木將軍と因縁深き本県出身の兵事係り▽	
474	大正2年	3	15	山陽新報	●室の宿帳 乃木大将の白	
475	大正2年	3	16	東洋新報	●乃木邸の公開準備	
476	大正2年	3	27	東洋新報	●乃木大将の銅像建設	桃山御陵付近に建設する国民表彰会を組織
477	大正2年	3	29	大正□□	●乃木邸の公開 ▲四月十三日記念祭▲十四日公開に決定	紙名判読困難
478	大正2年	3	31	扶桑新聞	●御睦まじき三殿下 児島高德と乃木大将	
479	大正2年	4	14	馬関毎日新聞	●乃木大将追悼会	山口県佐波郡中関村勲七等有末直佐氏が一昨13日正善寺に於て
480	大正2年	4	19	新愛知	●乃木邸の卅分間	
481	大正2年	4	21	福岡日々新聞	○東京より(十八日)《八千八聲山房主人》	
482	大正2年	4	29	横浜貿易新報	○乃木將軍遺墨 ▲宮谷小学校へ寄贈さる	
483	大正2年	5	5	石見新聞	乃木邸の公開《千雲》	
484	大正2年	5	15	東洋新報	●乃木會の盛況	
485	大正2年	5	29	京都日出新聞	●乃木夫人に関する講話	乃木大将家の家庭教師たりし芹沢登一氏の京都市立高等女学校における講話
486	大正2年	6	14	東洋新報	●乃木會の創立總會	昨日午後1時より市會議室に於て
487	大正2年	7	14	扶桑新聞	十日帝国大学卒業式に於て 台覧の貿易図 市茶屋町茶屋の珍藏品(二) ▲茶屋新田開拓 ▲交趾國へ発途 ▲見聞悉く異様	写真あり(貿易図)
488	大正2年	7	14	扶桑新聞	十日帝国大学卒業式に於て 台覧の貿易図 当市茶屋町茶屋の珍藏品(三) ▲其貿易の状態 ▲夕顔棚の娯楽 ▲王へ自由の謁見	写真あり(貿易図)
489	大正2年	7	18	門司新報	●乃木將軍記会成る	
490	大正2年	8	9	京都日出新聞	●卒塔婆物語 乃木勝典氏墓標の浜寺漂着	
491	大正2年	9	6	いばらき	●乃木大将碑除幕 ▽大迫学習院長訓話《龍ヶ崎電話》	龍ヶ崎町女子部小学校門前に建設
492	大正2年	9	14	東洋新報	●乃木將軍一周年祭 ▼学生の参拝者多し	
493	大正2年	9	14	憲政新報	●嗚呼將軍 △昨日の一年祭 ▲旧乃木邸 ▲青山畜場 ▲青山墓地 ▲学習院	
494	大正2年	9	13	京都日出新聞	●乃木大将馬上の銅像	紀伊郡深草村大字宮山村北林宗次郎氏の建設竣工

495	大正2年	9	13	函館毎日新聞	乃木將軍一年祭	
496	大正2年	9	14	函館毎日新聞	●乃木大將一年祭 ▲將軍夫妻の大写真 ▲祭式始まる ▲日射病続出	函館教育会主催にて13日午後1時より公園広場に於て挙行
497	大正2年	9	13	京城日報	●嗚呼乃木大將！ 懐ひ起す九月十三日	写真あり「代々木にて飛行機を觀つある故乃木大將（中耳炎にて全快せし当時）」
497	〃	〃	〃	〃	▲大將の平生《富永鑄太郎氏談》 ▲鈴木天眼凹む ▲必ず毎朝墓參 ▲夫人から梨五十 ▲食ふ丈けで可い	
497	〃	〃	〃	〃	▲珍しき逸話《山根正次氏談》 ■公の品は一も無い ■是れは驚き入った ■珍無類天長節祝宴 ■十余里を一直線に	
497	〃	〃	〃	〃	▲検死の役《元赤坂警察署長 本堂警視談》 ▲武人最後の典型 ▲卅五年死所を求む ▲死が与へた印象 ▲茲に覚悟相定め候	
497	〃	〃	〃	〃	▲夫人の面影《富永夫人談》 ■台所のお指揮 ■召し物は木綿 ■差向のお食事 ■夫人と葡萄酒 ■何時もお丈夫	
498	大正2年	9	13	京城日報	●満堂嗚咽 老若悉く逸話と遺品に泣く ■本社主催追慕大講演 ■珍しい遺墨 ■本願寺の法要	
499	大正2年	9	14	京城日報	[本日は乃木將軍自尽の一周年、ほか]	
500	大正2年	9	15	新愛知	●乃木將軍一週年祭	愛知県西春日井郡枇杷島町仏教少年教会主催にて去る13日午後7時より同町蛭子座に於て
501	大正2年	9	17	京都日出新聞	●乃木神社と桃山	
502	大正2年	9	27	河北新報	●乃木大將と小国民 ▲附属小学生徒の廃兵慰籍	
503	大正2年	9	28	小樽新聞	●乃木將軍追悼演説会	27日午後0時半より小樽中学校弁論部に於て
504	大正2年	10	8	台湾日々新報	●乃木將軍建碑に就て ▲木村匡氏談	
505	大正2年	10	8	台湾日々新報	●乃木大將遺髪と同情	
506	大正2年	10	14	芸備日々新聞	●乃木記念館建設 乃木將軍記念会趣意書	子爵毛利元雄氏の主唱にて山口県長府町の旧邸内に
507	大正2年	11	4	東洋新報	●蕃山会の乃木祭	来る9日午前10時茨城県猿島郡古河町男子尋常高等小学校に於て
508	大正2年	11	4	東洋新報	●碧血千年色青松万古心 乃木將軍逸事 ▲戦勝記念松 ▲將軍の謙徳 ▲天真流露 ▲履歴の書	写真2枚あり (①乃木揮毫書 ②大正元年12月13日付の佐藤正署名の由緒書)。